
じよいふる

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じょいふる

【Zマーク】

Z1386F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

佐久間風子は高校一年生。学校では、いじめられっ子だ。ある日、街でバッグを盗まれてしまう。取り返してくれたのはサッカー選手を自称する青年だった。ある日、風子はふとした気まぐれから、彼が出場している試合へと足を運ぶようになる。選手の頑張り、そしてスタジアムや、バイト先で出会う人々たち、彼らによつて閉じこもつていた風子の心に少しずつ変化が起きていく。

第一章 本物のほうが空を飛べるだけマシかもね

それを見た瞬間、体が勝手に反応していた。

風子は両腕を高々とあげ、叫んでいた。

いつたい自分はなにをいつているんだ。興奮のあまり、まるで言葉になつていなかつた。

悠子が抱きついてきた。

後ろの席にいた木場直樹が、風子と悠子の体を抱きかかえた。そして、一人の頭をくしゃくしゃにかき回した。

風子は笑っていた。

天使も嫉妬しそうな、とろけるようなその笑顔を、スタジアムの熱気が風となつてさらつていった。

第一章 本物のほうが空を飛べるだけマシかもね

1

F県野々市市の航空写真を数十年前と現在の物を一枚並べて見比べてみても、大きな変化を発見することは困難だろう。現在の写真をよく見ると、近代化の波に押されて駅周辺にはビルが増えているのが分かる。よく見てその程度の発見しか出来ず、どちらの航空写真を見せられたところで感想はさほど変わらなかつただろう。

田んぼばかりだね。

確かに、駅を中心とした建物の密集している地帯は若干の賑わいを感じさせてくれるもの、そこから少しだけ離れるともう周囲一面田園風景だ。その中に小さな住宅地が点在している。

そんな広大な田園地帯の中に、L字型の建物がある。大きな建物なのだろうが、周辺の土地があまりに広いので、よく分からぬ。

F県立野々市商業高等学校。

今年創立六十周年を迎えた、歴史のある学校である。

近くを田んぼに、遠くを山々に囲まれた、実にのどかな環境の中で、生徒らは勉学や運動に励んでいる。

【教育理念】

- 一 自立、自由の意味を学び、尊ぶ
- 二 自ら思考し、行動出来る

【校訓】

- 「責任」　自己の行いが周囲に与える重さを自覚する
「誠実」　他人を尊重し、丁寧に接する
「友愛」　他者の喜びを自分の喜びとし、他者の痛みを自分の痛みとする

商業高校だけあって、以前は一番目が「誠実」ではなく「商才」だったのだが、時代の流れというものの、そのような主張もどうかと保護者からの苦情があり変更をした経緯がある。

このようない派な主張を掲げてはいるものの、パンフレットや学校紹介のホームページに書く文句に利用する程度で、教師だつてそらで覚えていやしない。

ましてや生徒が覚え、率先して実行していくはずもない。

「おい、クマ！」

一年B組の教室、後ろのドアが勢いよく開くが早いが、女子生徒のガラの悪い叫び声。遠金恵理香が立っていた。不良上級生とも繫がりがあるために、男子も恐れる存在だ。長い黒髪。肌も黒っぽいが、化粧なんか地肌なのがよく分からない。彼女のすぐ後ろには、取り巻きである谷澤達子と矢野舞子の姿。

教卓のそばで、大橋道矢にジュース缶を渡していた一人の女子生徒が、その声にびっくりと肩をふるわせた。振り返り、出入り口に立つ三人の姿を確認すると、まるで小間使いのように小走りで彼女ら

のほうへ駆け寄つていいく。

三人の前に立つ。

なにか

クマと呼ばれた女子生徒は、うつむいたまま上田遣いでぼそぼそと呟く。

「なにかじやねえよ。なんだよクマ、この靴は！」

つき出された靴を受け取る。遠金恵理香の通学靴だ

磨いたばかりといった光沢を放つてゐるが、うつすらと土が付い

たままの箇所があった。といつても、図の左側の、
左の二つとものがござ。

「すんません！」

女子生徒は突然土下座をし、頭を深く下にした

すくすく魔わ直しあがんで

10分に頭を下にのせる床と窓がぐるぐる回った

讀たり やに直したり とふくらひながら
量被から三を抜くんじ
やねえよ、馬鹿

「ほんとう、すんませんです。気を付けるんで、許してください」

野川の鷺つばい、女川の河童

み、磨いて後で下駄箱に入れておきますから」と、遠金に軽くお辞

高橋】夫のとJINへとそそぐると馬鹿が

אנו יתנו לך

「生意気に言い訳してんじやねえ。つかジユースなんて買つてんじやねえよ！」

「以後ちゅ……注意します」

クマでありサクスケである女子生徒は、頭を下げる。

「ブー、お前、なんだよこれ！」

大橋道矢が声を荒らげて不満気だ。

「なんだよ、このオレンジジュー。つぶつぶが入ってないじゃねえか。おれがオレンジといや、つぶつぶだろ？がよー。」

「すんませんでしたーー」今後このようなことがないように、気をつけますんで……」

クマでありサクスケでありブーである女子生徒はそつこつと、また土下座をし、深く頭を下げた。

彼女には佐久間風子ふうかという可愛らしくて立派な名前があるのだが、本名で呼ぶ者はこのクラスにはいない。

風子は身長一五四、五センチ。すらり、といつほど瘦せてもないなが別に太つてもいい。それがどうにも見る者に重苦しい印象を与えるのは、おそらくはその髪型のせいであった。

歌舞伎の主役みたい。

そう表現するのが一番分かりやすい。

腰まで伸びている長い黒髪が、さながら超新星の「ごとく大爆発している。顔の大半がその中に埋もれてしまつており、しかも始終うつむいていることも手伝つて目がほとんど隠れてしまつている。髪型というよりは、なにもせずにいたらこうなりましたという感じだ。

実は風子は意図的にこのようにしている。

もともとは、とりたてて明るいとはいえないまでも十分に「普通」というカテゴリーに属する平凡な女の子だった。

中学一年の一学期に、突然いじめの標的になつた。いじめは度を越した酷いもので風子は何度も自殺を考えたくらいだ。

いつしか風子は、誰に対しても卑屈な態度で接するよつになつた。髪を伸ばして放置、おしゃれに気を遣わないどころか、わざと醜い身なりをするよつになつた。

高校では、入学当時からいじめられた。クラスは違うが中学の時の同級生が何人かいたことが原因だろう。

遠金の靴を磨き直した風子は、昇降口の下駄箱に行くため廊下を歩いている。

たくさんの生徒たちがお喋りしながら行き交っている。

風子の嫌いな、「じゅわーじゅわー」とした人の波。

なんでもないのに、みんなどうしてそんなに楽しそうにしているのだろう。

なにがおかしくて笑っているのだろう。

そもそもなんだって生きてるんだ。どうせそのままうちに死んでしまうというのに。

靴を両手に抱え、うつむいたまま、縫うように進んでいく。

一人の男子生徒と肩がぶつかった。

「す、すいません！　ごめんなさい！」

風子は深く頭をさげて謝った。悪いのは友達とふざけていた男子生徒なのだが。

靴を遠金の下駄箱に戻し、教室に戻る。

クラスのみんなの表情は普段通りだ。友達とお喋りをしていたり、本を読んでいたり。

しかし、風子は微妙な空気の変化を感じ取っていた。

理由はすぐに分かった。

自分の机の表面が、ニスでも塗ったかのような光沢を帶びている。

風子は自分の席に着き、椅子に座った。

ぼさぼさの前髪で目が完全に隠れているというのに、風子にはみんなの視線が、そして興味の対象がよく分かっていた。

心の中で深く溜め息をつくと、ゆっくりと両腕を机の上に置いた。みんな、笑いをこらえるのに必死だ。

しばらくして、風子は腕を動かそうとした。袖が机に張り付いてしまっていた。腕を動かそうすると、机が引っ張られてガタガタと動く。

机の表面に塗られていたのは、強力な接着剤だった。風子は慌て

たそぶりで、引き剥がそうとしきりに腕を動かした。

「ガタガタうるせえぞ、クマ！」

怒声が飛ぶ。

「『』、ごめんなさい。でも、でも、袖が……」
上着を脱ごうにも、腕が両方とも机から離れない状況のため、それも出来ない。

風子が机と奮戦しているうちに、予鈴が鳴った。と同時に教室の前のドアから担任の安喰先生が入って来た。

しんとなる教室にガタガタという音だけが響いている。風子は力一杯に服と机とを引き剥がそうとしたところ、袖が破れてしまった。バランスを崩し、風子は後ろに、机は前に倒れた。耳をかき鳴らす不協和音とともに、机の中身がすべて床に散らばった。

机の表面には、制服の袖が張り付いている。風子の制服の袖は、裏地だけになってしまった。

「おいブー、いい加減にしうよさつきから、授業の邪魔だろが！」

「人の迷惑考えてよね」

「常識ねえのか、この馬鹿」

「ど、ど、どうもすんませんです！」

風子は慌てて机と椅子を起こし、散らばったものを片づけはじめ
る。

また、心の中で深い溜め息をついた。

……これでいいのだ。

2

吹き付ける神の息吹に、髪の毛がばさばさと音を立て、激しくな
びいている。顔を上げれば風に髪をさらわれて額が丸見えになりそ
うだが、下を向いているためにかえって額や顔に髪の毛が張り付い
てしまっている。エイリアンや巨大蜘蛛が頭に取り付いているかの
ようだ。

佐久間風子は自転車通学をしている。俗にママチャリと呼ばれる

型の青い色の自転車を利用している。

今風子が自転車を走らせている農道は、たまにトラクターや軽トラックが通るくらい、ほとんど貸し切りのようなものだ。

道路は少し盛り上がったところに作られており、小さな土手の下にはどこまでも田んぼが広がっている。

運のないことに登校時と下校時とで風向きが真逆に変化し、彼女の場合常に向かい風と戦わなければならない。

この風さえなければ、見晴らしの良い気持ちのいい通学路だとうのに。おかげで体力がつくかも知れないが、微塵も嬉しくない。このなにも風を遮るものがない田んぼの、ど真ん中をつつきつい風はとにかく激しい、辛い。一帯が山に八方を囲まれた狭い盆地であること、この風の原因の一つだろう。

ハンドルを持つ腕をよく見ると、制服の袖の表面が破れてなくなって裏地だけになってしまっているのが分かる。

狭い道と交わり十字路となっているところにさしかかる。そこを左に折れるとすぐに小さな住宅地があり、そこに風子の家がある。もうこの位置からでも、風子の家が見えている。瓦葺きの、近代的な普通の一軒家だ。しかし彼女は曲がらず、そのまま真っ直ぐ自転車を走らせた。

風の神と戦い続け、もう五分程もペダルを漕ぐと、景色が一転する。駅周辺の広い住宅地だ。さらに進んでいくと次第に交通量が、そしてビルディングの数、人間の数が増えてくる。鉄道の踏切を横断せずに直前を右折、線路沿いを少し進むと駅が見えてきた。自動車と通行人が多いので、自転車を降りて押して歩く。

駅前大通りに平行している、商店の並ぶ小道へと入る。さらに少し進むと、ノワゼットという名の小さなケーキ屋がある。風子はこの店で、アルバイト店員として働いている。火水木曜が午後五時から八時半まで。土日が朝から晩までのフル勤務。時給は七二〇円。自転車を店の裏側にある狭いスペースにとめた。

「お、おはようございます！」

裏口から店内に入ると、風子は先輩に深く頭を下げる。別に店の決まり事ではないが、みんなどの時間も「おはよっ」を使っている。

「おはよっ、サクちゃん」

白衣を着た大男、下平耕平、ここの中のアルバイト店員では一番の古株だ。もう七年以上にもなるらしい。

届いたばかりの大きな砂糖袋が、台車の上に積まれている。下平はそれを棚にしまっているところのようだ。

「それ、やります」

風子は砂糖袋に手をかける。今日は五時半頃に届くと聞いていたので、すっかり自分の仕事と決めていたから。

「いいよ、おれがやるよ。サクちゃん勤務は五時からなんだから。それよりタイムカード押してきなよ」

「はい」

頭を下げるたびに、髪の毛が大移動してそれ自体独立した生き物であるかのようにぱさりぱさりと動く。

「肩こらないのかな」

下平は小さな声で呟いた。

風子は部屋の隅でタイムカードを押すと、タイムレコーダーの横にあるロッカーを開き、白衣を着込み、帽子を被つた。

小走りにやってきた北田重樹店長が、棚に積まれている昨日の伝票を調べ始める。風子に気づき、

「おう、サクちゃんおはよっ」

「おはよ…」
「おはよ…」

風子は帽子の中に、爆発した髪の毛をぎゅうぎゅうっとしまいこむ。それによって髪型がつぶれて、余計に風子の顔を隠してしまう。

お店で働く以上、あまりよい格好とはいえない。しかし彼女は接客業務ではないし、ケーキの製造補助という仕事の腕前はしっかりとしているから、今では店長は特になにもいわない。

注意したのは初日だけだ。こいつは仕事なのだから髪を切れ。それが、せめて帽子で押さえ付けるように髪をかき分けて、顔を、お

でこを出せ、と。そういうながら店長が風子の髪の毛をかき分けようとしたところ、いきなり顔をさらされた風子がひどく動搖してあたふたしてしまい、それ以上強制も出来なかつた。なんだか変わり者っぽいし、この仕事は諦めてもらおうか。まあ、一日一日様子を見るか。自分から、無理だと気付くだろつ。などと考えていたのだが、いや働かせてみると、とても物覚えが良くて手先も器用なので、店長からお願ひしてそのまま続けてもらうこととなつた。

このアルバイトは風子が中学を卒業してすぐに始めたもので、かれこれもう一ヶ月ほどになる。

「しかし、せつかく可愛い顔をしているのに、もつたいないよなあ。きちんとした身なりで笑顔で接客してくれたら、お客様さんがひとつが増えそうな気がするけどなあ」

店長が腕組みしながら、風子のことがあらためてまじまじと見て、残念そうな表情を浮かべている。

「ほくもそう思つてんですけどね、店長」

下平も続く。

「か、可愛くなんて……ない……です」

興味本位でとんでもないことを口にしないで欲しい。自分なんかが接客などをしたら、間違いなく客は減る。人にはそれぞれの領分とこうものがあるのだ。お前なんかに会計をされたからケーキがまづくなつたといいがかりをつけられて謝罪させられたり、怒つて一度とお客様さんがこなくなるかも知れない。

「でもね、本当ならレジが忙しくてお客様が並んじゃつている時なんかは、手伝つてもらつたりもするんだからね。下平君だって、こんな野太い声や指だけレジ打つたり電話取つたりもしてるんだから」

「あ……はい……あの、その分かつては、いるんですけど……」「この仕事、好きだから続けたいし……そしたら、いろいろしなきやつてことも……分かつてます……すみませんです。……もともうしわけなくて……ほんとうにすみませんです」

風子は深く頭を下げる。帽子からみ出ている髪の毛が垂れて揺れている。

当たり前だが、風子は好きでいじめられているわけではない。いじめの標的となってしまったかどつかは、運の左右する部分も大きいのだろうが、災難の降りかかる前兆を察してうまく立ち回ることが出来れば回避可能なのではないか。仕事をすること、大人と接することで、自分と他人との距離の取り方、要領よく立ち回つていく技術等を身につけたい。そう考えて、高校入学早々にアルバイトを始めたのである。

結局、そうした技術を身につける前に、早速高校でもいじめられっ子になってしまったが、それでもこの仕事を辞めるつもりはなかった。無趣味で家にいても特にやることのない風子は、仕事に没頭するようになり、いつしかケーキを作る仕事 자체が好きになつていたから。五月からは、土日をフル勤務にしてもうつとう頼んだくらいだ。

「ま、本業のケーキ作りのアシスタントをよくやつてくれているから、いいんだよ。無茶しなくともね」

店長の言葉に、風子はまた頭を下げた。

「おはようございまーす」

裏口から明津恵美、林聖の一人が入つて来た。

明津恵美は、通う学校は違うが風子と同じ高校生。学年は一つ上で二年生だ。林聖は二十四歳、まだ子供のいない専業主婦で暇があるので家計の支えにどこで働いている。

一人は店長と風子の間を通つていく。

どつ。という衝撃とともに、風子は脇腹に激しい痛みを感じた。

店長らに見えないよう、林聖に肘打ちを食らわされたのだ。面と向かっていわれたことはないが、風子は林聖に相当嫌われているようだ、このようなことをされるのは日常茶飯事だ。彼女一人が態度に出していくだけ、おそらく誰もが自分のことを嫌いなのだ。こんな外見だし、愛嬌もまったくないし……

今お店に入ってきた一人と入れ替わりに高野佑司、滝川良枝の二人が退勤。白衣に着替え終えた明津恵美と林聖の二人はレジにつく。時計の針が五時を示す。

風子は仕事を開始した。

「いらっしゃいませ~」

林聖の愛想たっぷりの声が奥の部屋にまで響いてきた。
しかし、それをかき消すような、お客様と思われる少女一人の笑い声。

「ほんとクマのやつ、馬鹿だよね~」

「どばどば、って机の中身全部出しちゃってさ~、おののけ慌ててんの。ほんと馬鹿。頭鈍いんだよあいつ」

風子は身を低くし、柱の陰からそっと店内を覗いて見る。
やはり声の主は谷澤達子と矢野舞子だった。

「どビビビも、すすすすみませんっ!」

「似でね~!」

谷澤達子が風子の仕草や言葉遣いを大袈裟に真似、矢野舞子がそれを見て両手を打ちながらげらげら笑っている。

……裏方仕事でよかつた。

風子は体の向きを変えて、柱に背中を預けた。

胸に左手を当てる。心臓がどきどきしている。呼吸が苦しくなってきた。

やつぱり自分に接客なんて無理だ。

でも、だからこそ、乗り切ることで自分が成長できるのではないのか。

いや……そもそも、何故そんな努力をしなければならないのか。
何故成長しようと頑張らなければならないのか。なんの悩みもなく、ただ遊んでいるだけの人もいるというのに。

風子は葛藤する。こんなことで真剣に悩んでいる自分が、とても惨めで辛かった。

「はい、チョコモンブランが一つと、ブルーベリーのタルトが一つ、

イチゴのタルトが一つですね」

林聖のキンキンとした声が響く。

今ならもれなく脇腹に肘鉄一発おまけにつけてきます。

3

「お疲れ様でした！」

「サクちゃん、そんな気合い入れて叫ばなくても……」

別に気合いを入れて叫んでいるわけではない。「ぼそぼそ声にならないよう喋るうとして、自分の声をコントロール出来なかつただけだ。まともに喋らうとして声が裏返つてしまつたり、最近どんどん喋ることが下手になつてきている。

ノワゼットの勤務時間は八時半まで。みな、白衣を脱いで、タイムカードを押し、外へと出る。

田舎の町とはいえ、近代化の代償として空気は汚れてきており、初夏の夜空は昔ほど奇麗ではない。それでも、さそり座がすぐにつけられるところなど、都會と比べればよほど綺麗な星空だ。

「お疲れ様」

林聖はみんなに挨拶し、スケーターに乗つて帰つていぐ。唯一風子のほうにだけは、顔を向けもしなかつた。

「お疲れ様です」

明津恵美の、抜けるような明るい声。

「風子ちゃん、また明日ね~」

と手を振つてゐる。彼女は駅を渡つてすぐのところに自分の家があるため、ここから徒步だ。

「は、はい、お、お、お疲れ様でした！」

風子はぼやぼやの前髪のすき間から、去つていく明津の背中を見つめている。

明津は非常に屈託がなく、風子に対してもなんのわけへだてもなく接してくる。お互いの暇が合つ度に、いろいろと話しかけてくる。明津が土曜出勤の際には、お昼に誘われたこともある。

人間の本心を信じることの出来ない風子は、そのような明津の態度にかえつて不安を覚えてしまう。林聖に肘鉄を打たれているほうが、ずっと納得できる。そのようにならぬために始めたアルバイトだというのに。

一体自分は、人にとつてどのような存在なのだろう。

人にとつてどのような存在にまで、自分を成長させることができるのだろう。嫌われない技術を身につけることが出来るのだろう。時折、虚しくもそんな自問をしてしまうことがある。自問するまでもないことなのに。自分がどんなに成長しようと、良いと思ってくれる人など老若男女問わず現れるはずがないのだ。せいぜい「大嫌い。いじめてやりたくて仕方がない」から、「どうでもいい」になる程度が、自分の限界だ。そこまで高められれば上等だ。

風子は自転車のカゴに通学用のバッグを入れる。教科書など必要なものは全て教室のロッカーに置きっぱなしにしてるので、バッグは小柄なもので済む。

自転車のハンドルを握り、押しながら商店街の通りへと出た。

いつもと同じように真っすぐ家に帰るつもりだったが、ふと気付くと大通りの本屋前で足を止めていた。

最近開店したばかりの大型書店だ。深夜一時まで営業している。近くに深夜営業のコンビニエンスストアもなく、今までほとんどのが夜の八時で営業終了してしまっていた。しかし、この書店が出来たことにより、駅周辺の夜の雰囲気がだいぶ変化してきた。その集客力にあやかるうと、夜遅くまで営業時間を拡大した喫茶店なども出てきた。

本だけではなく、CDやDVD、テレビゲームの新品中古販売やレンタルなどを行っている。本店が九州にある、全国規模の大型チーン店である。この建物が出来る前は、古びた店や住宅が密集していた。誰どどのようなコネクションが有つたのか知らないが、その時の古本屋の主人がこの大型書店の店長だ。もう六十をいくつも過ぎているような白髪の老人だ。

風子は自転車を店の前の小さな駐輪場に止めて鍵をかけ、バッグを取り出すと店内へと入った。余談だが、風子はここで初めて、お店の自動ドアというものを体験した。それほど田舎だということであり、それほど風子がよそへ出掛けないということである。他にはせいぜい電車やバス、エレベーターのドアくらいしか知らない。

入るとすぐに立ち止まり、店の中全体を見回した。誰も知っている人間はいなさそうだ。一安心すると、再び歩きだす。風子が向かつたのは、趣味の「コーナー」だった。

棚におさめられた本の背表紙を見て、田についた本を手に取つてみる。

初歩からはじめる囲碁。

ぱらぱらとページをめくり、本を閉じる。もとの位置に戻す。
やるほど楽しくなる将棋

楽しむための麻雀

必勝競馬

等々……

一步横に移動すると、がらりとジャンルが変わる。
—POPの本、洋楽の本、クラシック。と、音楽関係になる。
それぞれ、手に取つて軽くページをめくつてはもとの位置に戻していく。

さらに一步移動。

野球、バレー、サッカー、剣道、柔道、などのスポーツの指導書、選手の自叙伝等だ。

まさか自分で野球をするわけにもいかないし、せいぜい観戦といったところか。でもこんな田舎じゃあ、球場まで遠くてとても行つていられない。テレビ観戦という手もあるが、それが趣味といえるものかどうか。

サッカーにしても同様だ。それに、風子はサッカーという球技に、あまり良い印象を持つていない。二十人以上もの人間がうじゅうじやと動き回っているのが、人嫌いの風子にはどうにも生理的に嫌なものかどうか。

のだ。野球ならグラウンドに立っているのは十人ちょっとだし、基本的に一対一の勝負で「こちやこちやからみあうこともないし、まだ我慢が出来る。

こんなことをしているのには、勿論理由がある。風子は最近、自分の趣味に出来そうなものを見つけたいと考えている。全くの無趣味であることも、自分がいじめられる原因の一つかも知れない。趣味を持つていれば、おのずから内面も変わってくるのではないか。ささやかではあっても、心の奥が光り輝いてくるのではないか。威厳というのか、いじめられにくらい雰囲気というようなものが出来てくるのではないか。いや、そんな高尚ぶった理由でなくとも、単純に趣味が合えばあまり嫌われずに済むかも知れない。

ともかく、集団競技は駄目だ。やるのも観るのも自分向きでない。集団も個人も関係なく、そもそもスポーツ観戦には興味はない。汗くさいことや、「勝負」とは嫌いだ。

風子は次の本を取るなりと手を伸ばす。タッチの差で、はたきのふさふさに本が被い隠されてしまった。ずっと立ち読みをしている風子に、店長がまるで昭和時代のような嫌がらせに出てきたのである。このチヨーン店そのものは、特に立ち読みを禁止しているわけではないが、この老店長にはどうにも我慢出来ないのである。

趣味コーナーに並ぶ本の背表紙を、鼻息を鳴らしながら片っ端から激しくはつき続ける店長の執念に、風子がたまらうはずもなくあつさり退散することとなる。

店の外へと出た。

結局、なにも自分のやりたいことを見つけられなかつた。虚しく時が流れただけだ。帰宅しても寝るだけだし、どうでもいいことだが。

通学用バッグを自転車の前カゴに入れ、カゴの上カバーを閉め、チャックを閉める。

前輪にかけた鍵を外そと制服のポケットに手を入れた。と同時に風子の肩にドンとなにか激しくぶつかつた。

風子はよろけた。

軽く硬い物が大量に道路に転がり散らばる音。

そこから、大量の万年筆だかボールペンだかが出てしまっていた。

「『』、ごめんなさい！　ただだいじょうぶですか」

むしろ風子はぶつかられた側なのが、しかし彼女はそう謝ると、道路に転がっている物を拾い始めた。しゃがむとどんでもなく量の多い髪の毛が八方に広がって地面に垂れ、まるで巨大なゴキブリか、巨大な黒クラゲだ。

「だいじょうぶです」

肌の色といい片言の喋り方といい、東南アジア系の外国人のようだ。

「どうもすみませんね。うかりして、ぶつつかっちゃいましたよ」と、男もしゃがみ、転がった物を拾いはじめる。

風子はペンを拾い、紙袋へ入れていく。金属で出来ている割に、やたらと軽いペンなのがなんとなく気になつた。

街の喧噪が一瞬小さくなつたその時、風子は背後にゆっくりチャックを開いていく音を聞いた。

振り返るとまた別の外国人の男が、風子の自転車のカゴに手をかけていた。

しゃがんでペンを拾っていた男は、立ち上がると同時に外国語でなにやら叫ぶ。風子の自転車カゴに手をかけていた男は、バッグを素早く取り出すと、走りはじめた。もう一人の男も後に続いて走り出す。

泥棒だ！

風子は立ち上がり、口を開いた。しかしその開いた口からはなんの言葉も出てこなかつた。

風子はただ動搖し、立ちすくんでいるだけだつた。

今週給料が出たばかりで、バッグにまだ全額入つていたのに……

「きみ、もしかしたら、あのバッグ、盗まれた？」

通りがかりの、長身の若い男が近づいてきて、風子に声をかけた。うつむいている風子、数瞬の後、大きく頷いた。

男は走り出した。

速い。

男の背中はすぐに群衆の中に消えた。
叫び声が聞こえてきた。

「その二人、泥棒です！」

続いて、外国人二人が喚く声。遠いし、外国語なのでなにをいつているのかさっぱり分からない。

ようやく呪縛から解けたかのように、風子も声の聞こえる方へ走り出していた。

しばらく進んだところで、ようやく彼らの姿を発見した。
二人の外国人窃盗犯は、先ほどの若者と、他の市民の協力により捕らえられていた。そして騒ぎを聞いて、近くの交番からお巡りさんが一人、駆けつけてきていた。

「きみのバッグ、無事だつたよ」

長身の若者は、汗だくの顔に笑みを浮かべ、お巡りさんが手にしている風子のバッグを指差した。

若者と風子はお巡りさんに簡単な調書を取られ、解放された。風子は自分自身も風体がかなり怪しいと思つてるので、いろいろ疑われて自由になるまで時間がかかるのではと不安に考えていただけに、拍子抜けだった。

窃盗犯は近くの工場で働いている不法労働者らしい。わざと地面にばらまいて風子に拾わせていたのは、検査で不良があり廃棄する予定だったペンケースだ。

「田舎だからって、油断してちゃ駄目だぞ。自分のことは自分で守らなきゃ」

間近でそう話しかけられ、風子は若者の顔を見上げた。身長差は三十センチくらいありそうだ。

「あ、あの……」

風子は口を開いた。

「……ああ、あの、び、どうも……あり、……ありが……あり、……どうもありがとうございました！　ただそれだけのことなのに、分かっていても声がスムーズに出てこない。

なおもありありいい続ける奇妙な風体の少女に若者はおかしさを感じた。見知らぬ人間にお礼をいうことに対し、泣き出してしまった。ほんの少しひどい緊張と萎縮してしまっている様子が可愛らしくて、つい笑ってしまった。

風子は笑われたことで、恥ずかしさ、もどかしさとにすっかり気が動転してしまった。バッグから財布を取り出すと男に差し出した。

「お……お礼」

「馬鹿、それじゃ取り戻した意味がないだろ。いいんだよ、そんなことは」

「でも……」

「それじゃ、セレーニーでコーヒーでもねいつてよ。一番安いのでいいから」

男はすぐそこの一階にある喫茶店を親指で指し示した。

4

喫茶室マキアート。

駅近くの四階建て雑居ビルの一階にある。以前は九時閉店だったが、近くにオープンした大型書店の影響により最近は夜の十一時まで営業している。

狭いフロアだが、客が他に一組くらいしかいないので別に窮屈な感じはない。オレンジの淡い光が店内を照らしている。小さな音量でジャズが流れている。

よくも悪くもない、どこにでもある喫茶店の風景なのだが、こういった店に生まれて初めて入った風子にはなんだかとても高級な大人の世界のように思えた。コーヒー一杯で何千円も何万円もするのではないかなどと不安だったので、メニューに書かれていた価格を

見てほつと安心した。

窓際の小さな木のテーブルを挟み、若者と風子の二人は向かい合って座っている。

もつと窓際から離れた席にしておけばよかつた、と風子は後悔していた。外を歩く人々が丸見えなので、反対に誰か知った人間に見られてしまうのではないかと不安でしかたない。若者の座るがままに、自分も同じテーブルの席に座つただけだし、風子の性格を考えれば他の席にしたいなどと主張できるはずもなく、結局はどうにもしようのないことだつたのだが。

風子は身を小さく縮めたまま、うつむいている。一体、どんな態度をとつていればいいのか。どんな表情をしていればいいのか。なにを話せばいいのか。仮にも相手は恩人だ、黙つても失礼ではないか。と困ついたら、男のほうから話しかけてくれた。

「きみ、この近くの高校なの？ この辺でよく見るよね、その制服」「の、のの野々部……商業、です」

「ああ、聞いたことある校名だな。おれはね、この近くのお菓子工場で働いているんだ」

「……は、はず、蓮見、製菓……ですか？」

風子は自分自身の言葉にびっくりして、いい終えると同時に思わず立ち上がつていた。

「どうかした？」
「なんでも……」

また腰を降ろす。

中二の時にいじめられるようになつてからというもの、すっかり人間嫌いになり、他人と接することが不器用になつてしまつた。家族以外の人間に自分から話すことなどほとんどない。それが今まったく知らない人間に「蓮見製菓ですか？」と質問をしたのだ。ささいなことだが、風子には驚きに値することだった。でもそんなことで驚くなんてあまりに馬鹿馬鹿しくて、恥ずかしくて、とても人に

は話せない。

「そ、蓮見製菓の社員。……なんだけど、自分の中では、本職はサッカー選手…………の、つもり」

風子はうつむいた顔を少しだけ上げた。

サッカー。

あの、二十人以上もの大勢が芝の上でひしめきあつサッカー。ゴールを決めると、みんなでごちゃごちゃと抱きつきあつたり、服を脱いでパフォーマンスをしたりする、あのサッカー。長髪と禿頭ばつかりの、あのサッカー……

「今年つかね、ＪＦＬチームの選手をやっているんだよ

「じょいふる？」

「違うよ、ジエー・エフ・エル。……でも、まあ毎日がジョイフルにや違ひないけどね」

ウエイトレスがコーヒートオレンジジュースを運んできた。

どんな態度でいればいいのか分からず、風子はウエイトレスに深く頭を下げた。ウエイトレスは、なんだか怪訝そうな顔と笑顔とをごつちやにしながら「ごゆつくりどうぞ」といい残し、店の奥に消えていった。

「ＪＦＬつづりのは、日本アマチュアサッカー界の、トップリーグだよ」

蓮見製菓サッカー部は、昨年の東北社会人リーグを他の追随を許さないぶつちぎりのトップで優勝し、今年からＪＦＬに加盟する資格を得た。昇格にともない、チーム名もハズミＳＣと改めた。

地域リーグで圧倒的な強さを誇っていたといつても、戦い方は完全な外国人頼みであつた。社会人リーグに外国人は少ないので、いるだけで反則級に強力な武器になるのだ。しかし、その選手はもういない。自分の能力が金になることに気づき、他のＪＦＬチームにプロ契約として雇われたのだ。ほとんどメンバーが変わらず、主力外人が抜け、戦いの舞台がワンランク上昇、当然今年のハズミＳＣには去年のような強さはない。

「去年のよくなつづか……なんていうのが、まあ、いろいろね、頑張っているわけですよ……」などと、若者はきまり悪そうにお茶を濁した。

風子には難しくて、なにがなんなのかよく分からなかつた。

「……凄いですね、ノーリーグの選手だなんて」

「ノーリーグじゃないよ。単純にいうと、その下の下」

「あの……どうして……サッカー選手なんかをやつしているんですかもしかしたら失礼な質問だつただろうか……。しかし、若者は別に気にしたふうもないよつだ。

「生き甲斐だから」

簡単にそういつた。

「生き甲斐……ですか？」

「そう。なんで生き甲斐に思つよつになつたかなんて理屈じゃないし、おれにもよく分からぬけど。そもそもなんで自分は生きているのかつて考えたことある?」

ある。そんなことは、しょっちゅうだ。

単に心臓が動いて、脳に血が流れているから、生きているのだ。別にこのまま意識が遠のいていつて、永遠に戻らなくとも構わないと思つてゐる。

だが痛い思いをしたり、苦しんで死んでいく勇気がない。死ぬまでのほんの少しの我慢だとうのに、その後は永遠に楽になるというのに、自分にはたかがその程度の我慢も出来ないのだ。しかしながら、いつか天命を終えるまでの苦しみを少しでも減らそうと、生き方をいろいろと模索しているのである。そうしてケーキ屋でアルバイトを始めたし、今も自分に合つ趣味を探そつとしている。

「おれは、なにかで世界一になれたらいなつて思つてゐる。でも、地球上には何十億と人間がいるだろ。世界で一番なんてまず無理。それでもおれは世界で一番を田指したい。大学までずっとサッカーやつていたから、おれが世界一を田指すなら、これしかないつて思つて……でも結局プロ試験に落ちて挫折したけどね。とりあえずは職

につかなかつて思つていたら、大学の先輩から、働きながらサッカーしないか、つて声をかけられてね、生まれた時から大学卒業するまでずっと住んでいた札幌を出て、ここに来て蓮見に入ったんだよ。……プロ試験に落ちて、こんなところでサッカーやってるってこと 자체、もう世界一がどうとか生意気なこといつているレベルじゃないってことなんだけど、でもやるからには、無茶でもいいから目標高く持つていたほうが面白いし……心の奥では無理とも思つてゐるから夢叶わなくともショックもないし。仕事の半分はサッカーなんだから、今も十分楽しいし、ほんとジョイフルですよ。……じゃ、コーヒー御馳走になります」

男は「コーヒーに砂糖とミルクを入れ、かき混ぜる。

「なんだか、矛盾してゐるようなしていないよ」

風子はグラスにストローを差し、オレンジジュースを少し飲んだ。「確かに、矛盾したこといつてるよなあ。でももつと変なのがいるぞ、ティフェンダーの選手で岡崎健吾つて奴なんだけどね。そいつは、J2からオファーが来ることあるんだけど、いつも断っちゃうんだ。サッカーだけやっていられるわけだし、より色々なチャンスに恵まれる舞台に立てるわけだから、こんな良い話はないのにね。実はJ2どころか、JFLでやっていく自信もないんだ。好きで会社員をやつているんだよ。プロのくせに、というフレッシュナーに耐えられないからなんだ」

「サッカーのことは全然分からぬけど、そういう気持ちつて誰にもあると思います。……自分も、フレッシュシャーやコンフレッシュだらけですから。なにするのにも緊張して心臓がどきどきしちゃつて」

「じゃあ、今度またあいつに誘いが来て断りやがつたら、尻を引つぱたいてやるかな。先にそういう場所に行かれちゃつてもなんか悔しいものはあるけど、認められる奴つてのは、認められることをやつてゐるわけだからな。……変わり者といや、渡辺輝彦つて奴はさ、いつも精神統一の際に決まった俳句を唱えるんだよ。誰のだつた

かな、目には青葉、山……なんだつたかな

「山郭公、初松魚ですか。山口素堂の俳句」

「そつそつ、それそれ、きみ頭いいね。セツトプレーの時も、人の密集する中でそんな言葉を呴いているから、みんな怪訝そうな顔で見ているよ。なんか一部で有名になつてているみたいで、この前の試合の時なんか、テルのマークについている奴が精神集中を乱そうとしてしきりにテルの耳元で呴いてんだよ、山は富士、海は瀬戸内、湯は別府。もうおれおかしくて、試合どこじやなかつたよ」

「なんか変わった人ばかりですね。ところでセツトプレーってなんですか?」

「な、なんか笑いのツボが違うのかな。……まあいや、ええとセツトプレーってのはね……」

ただ黙っているのもなんなので、よく分からぬ用語への質問をしてみたものの、説明されてもやつぱりよく分からなかつた。

夜の十時も近くなり、二人は店の外へと出た。

「ごめんね、遅くなつて。送つて行つてあげたいけど、おれ歩きだから

「自転車だつたらそんな時間かからないところだから大丈夫ですよ」「ゴーヒー、ごちそうさまでした。楽しかったよ」「じつちこそ、いろいろ面白い話聞かせてもらつて」「……あ、そうだそうだ」

若者は鞄から、小さなお菓子の幾つか入つたOPP袋を取り出した。

「これ、我が社の新商品。よかつたら食べてみて。……て、なんか営業マンみたいなことしているな、おれ。蓮見製菓をよろしくっス」「……いいんですか。じゃ、遠慮なく頂戴します。どうもありがとうございます。あ、そ、それと、バッグ取り戻してくれて、本当に有り難うございました」

風子はお菓子の包みを受け取つた。

「もう取られるなよ。夜道、気をつけてな」

若者は走り出した。振り返り、手を振つてゐる。

風子も無意識につられて右手を小さく上げていた。
すぐに若者の姿は、通行人の中に消えていった。

風子はバッグと先ほどのお菓子の包みを自転車のカゴの中に入れ
た。

自転車を走らせる。

賑わつてゐるのは駅周辺だけで、すぐに静まり返つた住宅街になる。その住宅街もすぐに終わり、広大な田園地帯へと入る。道路に街灯はあるものの間隔がかなり離れており、道標程度にしかならず、足下を照らす役割は全く果たしていない。だから風子は街灯がなくとも地面を照らせるように、自転車に乾電池式のかなり強力なライトを付けている。

頭がぼうつとしている。なんだか奇妙な気分だ。さきほどの男性の話が面白かったとか、初めての喫茶店が珍しかったとか、そういうことではない。自分自身が、なんだかいつもと違うのだ。なにが違うのだろう。

疑問に思つてから解答が出るまで、さほどの時間はかからなかつた。今日会つたばかりの見ず知らずの男性と、いつしか自分は普通に話せていた。自分の性格を考えると、本来なら決して有り得ないことだ。それほど巧妙に会話を誘導された気もしないし、自分の社交性が変化したのだとも思えない。

今までに感じたことのない、なんと名付けていいのか分からぬ気持ちが胸の奥から込み上げてきた。良い感覺なのか悪い感覺なのかが自分でも全く分からず、それがどうにも気持ち悪かつた。鳥肌が立つてきた。理解出来ないことから来るその不気味な思いから逃れようと、つい自転車を飛ばした。

せびなくして、自転車」と田んぼに転がり落ちた。

田んぼの中に、十軒ほどの家が寄り添つ住宅地が点在する。風子

の家はそんな住宅地の一つにある。

風子は泥まみれの格好で帰宅した。深緑のブレザーも、赤を基調としたタータンチェックのスカートも、今やすっかり茶色一色に染まりきっている。

心配する母に、道から外れて「一メートル下の田んぼに自転車」と転がり落ちたことを素直に話した。そして、服の袖が破れているのもそのせいにしてしまった。

スカートは洗濯してまた履けるが、上着はもう捨ててしまうしかない。

風子はお風呂に入った。

お風呂で脱いだ服や下着にシャワーでお湯をかけて、泥を落とした。

もともと髪の毛の量が多いのに加えて、腰まで伸ばしているものだから、洗髪がまた一苦労であった。しかし洗つたあとは乐でいい。バスタオルで軽く拭いて、少しだけドライヤーをかけると、あとはブラッシングもなにもせず、ただ眠れば、翌日には意図した通りの髪型になっているのだから。

パジャマ姿でリビングに行くと、弟の良信がいた。三つ年下の中学生一年生だ。テレビゲームで遊んでいるのを母に注意されて片づけているところだ。

「良信、凄いよ、さつきお姉ちゃんサッカー選手に会つちやつたんだよ」「へえ

「バッグを盗まれたのを、取り戻してくれたんだ。凄い足が速かつた」

良信と話しているとほつとする。

自分が違和感なくよどみのない会話が出来るこの世でたつた一人の存在。

「そもそも盗まれるなよ。……で、なに? ディのチーム?」

「バイパスの向こう側に蓮見製菓あるでしょ。そこのチームだつて

「なんだよ、Jリーガーじゃないじゃん。ただの会社のサッカー部じゃないの？」

「そぞらしきけど、でも今年から、なんだか立場が上がったとかいつてたよ」

「ふーん。ま、バッグが盗まれなくてなによりだつたね」

喫茶店で当の選手本人と会話した時は、実は凄い人と話しているのかもという気持ちもあつたのだが、弟に一蹴されるとなんだかとても他愛のないことに思えてきた。

しかし別にどちらでもいいのだ。風子にとってはJリーグも高校サッカーも草サッカーも同じだ。

風子は階段を上がつた。二階の自室に入る。

ベッドのふかふか布団に、大の字につづぶせになる。

首を学習机のほうに向ける。写真立てが置いてある。反対向きに置かれているため裏側しか見えない。

中学一年生の時に撮影した、友達数人と一緒に映つた写真。この写真の中には、笑顔の風子がいる。風子はこの裏返つた写真を決して見ようとはしない。自分の笑顔を自分自身の記憶から完全に消し去つてしまいたいと思っている。

友達は風子がいじめられるようになつても全く助けてくれなかつた。一人を除いてはいじめに加わるようなことはなかつたが、段々と風子と口をきかなくなつていつた。いじめられている風子を、他の生徒たちと同じように笑つて見ている者もいた。

風子はある日、彼女らに質問した。

「わたしも一緒にいじめられたくないし。それに、いじめられるほうが悪いんだよ。うじうじしているから、いつまでもいじめが続くんだよ」

彼らとは、中学を卒業してから一度も会つていない。

裏を向いた写真。

笑顔。

思い出。

こんなもの、見たくない。

なら捨ててしまえばいいのに……

何故かそうすることも出来なかつた。

しばらくして、風子はうつ伏せになつたまま顔を上げた。

床に置いた鞄の隣に、菓子が幾つか詰められた透明な袋がある。風子は起きあがつて動くのが面倒とでもいうように、はいつくばつたままの姿勢でベッドがら床に降りた。前のめりになりすぎてバランスを崩して床に一回転してしまう。

お菓子の袋を手に取つてみる。ステイック状のスナック菓子が、一本毎に包装されている。

「じくつまバー」という商品名らしい。チーズ味、焼き肉味、など色々な種類が入つている。小さな包装袋に、「今まで無い食感！」、「もうとまらない！」、「この感激に耐えられるか！」と小さな字で過剰なまでにたくさんの宣伝文句が書き込まれている。宣伝文句の中につかり埋もれて、白枠の会社所在地や商品説明の欄を見なければ商品名も分からなかつただろう。

確かに新商品といつていたが、風子はそもそも蓮見製菓のお菓子を全く知らないので、同社過去商品との比較は無理だ。蓮見製菓の工場はこの辺りに住む者なら誰でも知つているが、考えてみれば風子は一度もここのお菓子を見たことがなかつた。ちゃんとしたお菓子会社だったのだな、と改めて思った。

お好み焼き味の包みを破る。さきほど自転車の前カゴに通学用のバッグとこのお菓子とを入れたまま、田んぼの中に転げ落ちたわけだが、お菓子は運良く全くの無傷だつた。

「いままでに無い食感！」とはいうものの、十分に庶民に浸透しているありふれた食感であつた。しかし商品名の示す通り味にかなりのコクがあり、最初想像していたよりもずっと美味しかつた。しかし、すぐに飽きの来そうな味でもあつた。

そういえば……

泥棒を捕まえてくれたあの男性の名前を、最後まで知らないまま

だつた。

6

風子は姿見の前に立ち、身だしなみを整えていた。
よりみつともなくするために。

制服に着替えると気持ちがピリッと引き締まる。

佐久間風子から、クラスの「ゴキブリ」へ変身した実感がわいてくる。
家を出る。

空を飛べない巨大なゴキブリは、悲しいかな青いママチャリを飛
ばして学校へと向かうのだ。

行きも帰りも向かい風なので、登下校中の風子はいつも凄い髪型
だ。

風の吹いてくる方向に十五分ほども自転車を走らせると、風子の
通う高校に到着する。

校舎横の駐輪場に自転車をとめる。

騒がしい人の群とともに校舎に入る。

靴を上履きに履き替える。今日は画鋲は入っていなかつた。ささ
やかな幸せかも知れない。

階段を上る。風子の教室は二階にある。

二階の廊下を歩く。

風子の大嫌いな人混み。

喧噪。

他愛のない話。

表情。

笑顔。

窓からの青空。

普段通りの光景。

あと一年半も続く日常。

風子の教室のドアの前で、男子生徒が一人しゃがんでいたが、風
子に気づくと慌てて教室へと入つていった。

三十センチほど開いたドアのすき間、教室と廊下との境には、バナナの皮が落ちている。

今日のお題は定番のバナナでござりますか。しかし、毎回ひっかかるのも妙な話。風子はしゃがんでバナナを拾つた。今日は運良く気が付いて、畠にはひつかからなかつたつてことで。

風子はドアを開いた。

上から滝のような勢いで水が落ちてきた。

風子の全身は一瞬にしてずぶぬれになつた。

クラスの全員が、一斉に笑い出した。

「馬鹿だこいつ！」

「バナナに気をとられて、バケツに気がつかねえでやんの」

風子はバナナの皮を持ったまま、ただうつむいているだけだった。

「佐久間、なにをやつているんだ！」

担任の教師がやつってきた。

この教師は状況判断能力がゼロなのか。それとも無能なふりをしているのか。「なにをやつている」ではなく、「なにをされたのか？」ではないのか。怒声を浴びせる相手を間違つていなか。

風子は水を滴らせながら、諦めにも似た表情で先生の顔色を窺っている。濡れた髪の毛が顔全体をべつたりと被い隠している。

「先生、佐久間さんがまた大暴れしました」

「自分の思い通りにいかないと分かると、おれたちにやられたことにするといって、自分からバケツの水を被りました」

「こんなことばっかりされると、勉強に身が入りません。ちゃんと注意して下さい」

生徒らは実に楽しそうな表情で苦情を訴えた。

「佐久間、本当なのか？」

そんな訳の分からぬ理由で頭からバケツの水を被る人間が本当にいると思いますか？

風子は口を硬く閉ざしたまま、喋らない。

「もう、こんな馬鹿なことはするんじゃないぞ。雑巾で拭いておけ。

その前にジャージにでも着替えてこい。それと、放課後までに反省文を提出すること。…… それじゃ、ホームルームを始めるぞ」

以前にも同じようなことがあった。今回の件で確信出来た。やはり先生は気が付いている。見ないふりをしているのだ。介入するのが嫌なのだろう。薄々感づいているような態度を取ると、有事の際に介入しなかつた罪を問われる。気づいていなければ、最悪でも、無能呼ばわりで済む。

どちらにしても、教育者として最低ではないか。もしも本当に気が付いていないのなら、そんな鈍い人間は教師に向いていない。知らぬふりをしているのならば、教師である資格がない。とつとと塾の講師にでも転職して、勉強だけ教えていればいい。

みんなに仕返しされることが怖くて先生に相談することが出来なかつたが、いつか気付いて助けてくれるかも知れない。そんな微かな期待は完全に打ち砕かれた。

水を滴らせながら、教室の後ろにある自分のロッカーからスポーツバッグを取り出し、廊下へ出て行つた。

女子更衣室に入る。

バッグからジャージを取り出した。今年の一年生は青ジャージだ。風子は一瞬硬直した。

糸でジャージの上下が縫いつけられていた。縫い方は斜め縦横出鱈目に針を通しただけのもの。しかしかなり細かな間隔で縫われており、糸は少し引っ張つた程度では切れやしない。

せつかくの高校一年生だというのに、こんなことに一生懸命になつて喜んでいる人間がいる。

ハサミを持つていないのと、早く教室に戻りたい焦りで強引に引っ張ると、びい、と音をたててジャージはあっけなく破れてしまつた。その際に糸も大半が切れたようで、その後はぶつりぶつりと音を立てて簡単にジャージの上下を分割させることができた。

破れてしまつた箇所を調べてみると、丁度お尻のところに大穴が空いてしまつてている。このまま履いても、パンツが丸見えだ。仕方

なく、びしょ濡れのスカートの上から、ジャージのズボンをはく。ぐちより、と嫌な感触。気持ちがとても惨めになつてくる。

四つん這いになり、更衣室備え置きの雑巾で廊下に滴り落ちた水滴を拭きながら進んでいく。

教室に戻ると、すでに担任の姿はなく、国語教師が授業を始めていた。もう話を聞いているのか、風子はなにもいわれなかつた。

後ろのドアの周囲は水たまりのようだ。風子は雑巾で拭いてはバケツに絞り、五分ほどかけてようやく拭き終えた。

自分の席に着く。座るとお尻が気持ち悪い。数時間で乾くだろう。

それまでの我慢……いや、あと一年半……たかだか一年半の我慢だ。

風子は机の中から、現代国語の教科書とノート、カンペ恩を取り出した。

先生の喋っている内容から、現在進めているページはすぐ分かつた。前回途中で終わつてしまつたところの続きだ。教科書を開いてみると、そのあたりの数ページが破られて、なくなつていた。

風子の後頭部になにかがぶつかつた。髪の毛に突き刺さつた。

手に取つてみると、それは紙飛行機だつた。しかも、教科書を破いて折つたものようだ。広げてみると、果たして予想通り、風子の破かれた教科書の一ページであつた。

太いマジックで落書きされている。

「死ね、ブス」

「帰れ！」

「キモイ」

「バカ」

「死んでください」

j o l

g o l f

a o m

j e f

g I f サツカ一

g f l サツカ一

風子は両の人差し指一本だけで、たどたどしくキーを叩いている。色々な語句を入れては検索をかけてみるもの、一向に必要な情報を得ることが出来ない。

居間の隅に小さめのパソコンデスクがあり、そこには首振りディスプレイ型の i M A C が置いてある。風子は先ほどからずっと i M A C の画面と睨めっこし、キーボードと格闘している。

数年前に父親が仕事用に購入したパソコンだ。電子メールしか利用用途がないので、休暇を使って創作的なことをしようと思い、M A C はそういう方面に強いと知人に聞いて購入したものらしい。しかしパソコン購入前と購入後と、父の休日の過ごし方にはなんの変化もなく、相変わらずのゴルフ三昧。創作のその字もありはない。しかも、それから一年もたたないうちに職場でのパソコン利用用途が大幅に広がり、自宅にも様々なパソコン書類を持ち込む必要性が出てきたので、父は新しくウインドウズの動くノートパソコンを購入したため、ますます M A C は必要のないものになってしまった。M A C は家庭用にそのまま居間に置いてあるものの、ほとんど誰も使っていない。風子の弟良信が稀に利用する程度だ。風子も過去に一、三回利用してみたことはあつたが、いつも隣に良信がいて操作を教えてもらひながらだった。なので、パソコンを一人きりで触つてみるのは今日が初めてだ。

この時代に珍しいほど、プライベートによるパソコン利用の皆無な家族であった。

検索サイトで調べ物をするコツはある程度飲み込んでいたつもりだったが、いざ自分一人でやってみるとなかなかスマートにはいかない。漠然とした単語を一つ入れてみても数万件と検索されてしまうし、確かに複数の単語を入れて検索が出来るはず、とスペースキーを押したら単語間の空白が空くどころか先頭の単語がさらに変換されてしまうし。パソコンが、こんなに難しいものとは。

風子は先日街で出会った青年のことが気になっていた。バッグを取り戻してくれた長身の青年だ。蓮見製菓の社員だといい、評価用のお菓子をくれた。そして、サッカー選手でもあると聞いた。サッカー選手だというのならば、インターネットでなにか情報を得ることは出来ないかと考えたのだ。

ケーキ屋で勤務時間前後の時間帯、駅周囲の人混みに注意しているが、全く姿を見る事はなかった。当然といえば当然かも知れないが、なにか規則性があつてあの時間に駅前にいたのならば、また見かけることがあるかも知れないと考えたのである。

別に彼に対しても、特別な感情はないもない。

風子は家族以外の人間と話そつとすると、あがつてしまい、しどろもどろになってしまふ。そんな自分がふと気がついてみれば彼とともに話せていた。ただその一点が、彼の存在を忘れられないものとしていた。彼のことを全くなにも知らないので、せめて名前くらいは知りたいと思ったのだ。インターネットで名前が分かるのなら、それでもいいし、駅前で会えたら、名前を聞いて、もう一度お礼をいおうと思っている。普段の風子にとっては実に大胆極まりない発想なのだが、何故か風子は、それを自覚していなかつた。彼女は数年後、その時の自分の行動は神様のお導きだったのだと思つようになる

しかし青年のなにがそんなに気になるのか、あらためて考えるほどに不思議である。取り立てて特別な魅力や話術があるとも思えな

いじく普通の青年だというのに。無理に決まっているけど世界一を目指すなどという独自の哲学といい、変わっているといえば変わっているが。

さつかー

サッカー

今度は正しくカタカナに出来た。そつか、日常的なカタカナ語は漢字と同じように辞書に登録されているのか。

サッカー 日本

ひんまがつた矢印が書いてある大きなキーを押すと、入力した文字の下線が消え、スペースキーで空白を空けて次の単語を打ち込めようになつた。なるほど、日本語を複数入れる場合はこのようにしていくのか。やり方が分かつてみればどうということはなかつた。しかしこれはあくまで日本語入力方法の話であり、情報検索の要領の良し悪しとはなんの関係もない。

サッカーと日本という二つの単語だけで検索をかけたら二千万という膨大な情報が引っ掛かってきた。数十件分のタイトルと冒頭文章が一覧として表示されるが、どれもこれも関係ないものばかり。日本代表、日本サッカー協会、ジユビロ磐田、東京ヴェルディ、聞いたこともないようなものばかり出て来る。Jリーグ、J1、J2、という言葉が頻繁に出てくるが、確かにそういうのは違つよつと思う。

検索条件に、さらに「お菓子」と加えてみたが、日本代表人気があやかつたポテトチップやケーキ屋のホームページがたくさんヒットしてくるだけだった。

風子は発想を変えた。

新たな単語を入力。

蓮見製菓

二万八千九百件の検索結果。

一件目に表示されたのが、会社の公式HPのようだ。

リンクをクリックして、そのHPを表示させる。本来は画像が表

示されるべき部分なのか、画面の上のほうに枠だけがあり、小さく赤いX印が付いている。推奨ブラウザー ウィンドウズ インターネットエクスプローラー6と書いてある。パソコンに詳しくないのではよくは分からぬが、M A Cだとこのように正常に表示されない箇所があるということなのだろう。

会社概要を見てみると蓮見製菓はお菓子を四十年近くも作り続けているかなり古い会社だ。会社設立当初は本社も工場も埼玉県につたのだが、今から一五五年前に工場をこの千葉県に移転したとのことである。

今発売中の商品一覧、過去から現在に至るまでの発売商品年表、そのどちらにもこの間貰つたお菓子はない。どうやら本当に発売前の新商品なのかも知れない。

蓮見製菓はこの近辺では有名だが、それは市内に大きな工場があるからというだけで、実際に本物のお菓子を見たことのある者は少ない。

過去に発売されたお菓子の一覧を見てみるが、やっぱり全く知らない物ばかりだ。

いや……十年前に発売されたスナック菓子「焼きタ」、これは幼い頃に見た覚えがある。確かお店のお菓子売場で見たのではなく、町内子供会でオリエンテーリングに参加した際に子供達に配られたお菓子詰め合わせの中にあつたような気がする。妙に苦くて全然美味しいと思わなかつた記憶が連鎖して甦つてきた。

小さな頃に食べたお菓子をHPで見つけただけ、実に他愛のないことなのに何故だかちょっと嬉しいくなる。

寄り道をしてしまつた。別にお菓子のことを調べてているのではなかつた。

気を取り直し、目的の情報を探し始める。HP内のこれはと思えるような文字やボタンを手当たり次第にクリックしてみる。

「その他の活動」という文字が目に入り込んでみたところ、「環境問題への取り組み」、「福祉活動」、「文化・スポーツ活動」、

等々の項目を発見。

あるならきっとここだ。『文化・スポーツ活動』をクリック。

囲碁、将棋、バレー、バスケットボール、テニスなど、蓮見製菓内の文化部運動部の一覧が上からずらりと表示されている。

サッカー部の文字が横棒線で消されており、その横に「JFL昇格決定！」と書かれた青い文字が点滅している。そこだけリンクになつており、クリックすると別のウインドウが一枚開いてきた。真っ白なページに青く大きな文字で「蓮見製菓サッカー部 東北社会人リーグ優勝！ 全国地域リーグ決勝大会優勝！ 悲願のJFL昇格達成！」。そのまま下に通常サイズの文字で「地域リーグでほとんど負け知らず。毎節失点するものの、爆発的な攻撃サッカーで二位以下の追随を全く許さないぶっちぎりの優勝。その勢いはどまるところを知らず、全国地域リーグ決勝大会で全勝」。さらにその下には小さな文字で「蓮見製菓サッカー部はJFL昇格に合わせて来季よりハズミSCに改称します。今後も変わらぬ熱い応援をお願いします。これからも一緒に戦っていきましょう！ オフィシャルHP制作決定。予定URL http://xxxxxxxx.hazumi-i-s-c.jp」

そうだった。思い出した、JFLだ。

それにも、ハズミSCというのはそんなに強いチームだったのか……

予定URLをクリックしてみると、すでにオフィシャルHPはしつかりと存在していた。ただしそれでも利用パソコンがMACだからなのか、ところどころ画像が抜けてしまっている。風子はサッカーそのものはさっぱり分からぬし、全く興味もないでの、寄り道はせずに「選手紹介」の文字を見つけるやぐにそこに飛んだ。

画面が切り替わる。上から順番に選手全員の名前が背番号順に並んでいる。

写真がまったくないので、誰が誰だかさっぱり分からない。

とりあえず一番の選手名「加屋櫛雄平」をクリックしてみると、また画面が全部切り替わり、選手プロフィールが[写真付き]で出て来た。

背番号 一

氏名 加屋櫛雄平 かやのぐしゅうへい

年齢 二十八歳

ポジション GK

生年月日 一九八×年三月三日

血液型 A型

身長 一八七センチ

体重 七九キロ

出身地 茨城県

出身校 市立H橋高校

前所属チーム

愛称 カヤ、グっさん

特徴 昨年は多少不安定だった守備陣を神懸かりセーブ連発で何度も救つた。オネアスと並ぶJFL昇格の立役者。今年もチームの守護神に。

二十八歳にしては老けている、タレ目で愛嬌がある顔だ。

ブラウザの「戻る」ボタンで先ほどまでの背番号順一覧に戻る。続けて背番号二番の選手名をクリック。それほど多くのホームページを見たわけではないが、こういった場合には左端に常に選手一覧が表示されているものではないだろうか。非常に見にくいホームページだ。

三番

四番……

五番…… たいしたことではないが、自分と誕生日が同じだ。

六番……

七番……

本当にいるのだろうか、この中に……

十一番

十一番

十三番……

どくん。

風子は自分の心臓の音を聞いた。

十四番の選手の写真。

別に驚くほどのことでもなんでもないのに……
別に緊張するようなものではないのに。

背番号 十四

氏名 秋高鉄二あきたかてつじ

年齢 二十五歳

ポジション MF

生年月日 一九八X年七月一八日

血液型 A B型

身長 一八四センチ

体重 七〇キロ

出身地 北海道

前所属チーム

愛称 テツ

出身校 H流通経済大学

特徴 本職はボランチだが、どこでもこなせるユーティリティ性を持つ。JFLでも堅実な守備と巧みな攻め上がりに期待。得意のスルーパスでアシスト王を目指す。

間違いない、この人だ！

思わず立ち上がった瞬間、頭上でなにか風を切る音。がん、と壁に反射したそのなかが風子の顔面を激しく直撃した。風子の足下には、軟式野球のボールが転がっていた。

「おーい、大丈夫？ 家具壊れてない？」

弟の良信の叫び声。先ほどから家の前で近所の友達とキャッチボールをしていたから、おそらくどちらかの投球がすっぽ抜けてしまったのだろう。窓は大人の握り拳ほどのすき間しか空いておらず、狙つて出来るような芸当ではない。

「家具は壊れてないけど……」「

風子は鼻を押さえながら、窓を開けた。良信の友達が風子の風貌に驚いて、ぎやっと叫んだ。風子の押された手から鼻血が漏れ、手も顔も真っ赤。ぼさぼさの長髪なので、人喰い鬼にでも見えたのだろうか。

風子はもう片方の手に持ったボールを投げ、良信に返した。

「じめん姉ちゃん。……でもよう、自分でぶつけておいてなんだけど、姉ちゃんの運の悪さってすげえよな。お払いに行つたほうがいいかもよ」

2

確かに……運がないのがもなあ。

風子は地面に寝転がり、ふんわり浮かぶ雲を見上げていた。

寝転がるといつても自分の意思ではない。あまりの痛みに、倒れたまま身体を動かすことが出来ないのだ。

今日は普段と比較して穏やかな風が吹いているが、上空はかなりの強風のようで、雲が次々と形を変化させながら、凄い速度で流れている。

広い広い空の下で、風子は大の字になっている。

風子の全身はずきずきと痛み、どの感覚がどこの痛みなのか自分でも全く分からぬ。

何故このようにしているのか、勿論理由はある。自転車で下校途中、遙か前方から歩いてくる男子高校生が視界に入り、逃げようとも慌ててハンドルを限界まで回転させてしまったのだ。浮遊感、青空と地面とが反転し、地面に激しく叩き付けられ、自転車ごと転がり落ちた。五分ほど前の出来事である。

風子は制服姿の中高生を遠くに見ると、ついつい気付かれないうちに曲がって逃げようとしてしまう。それでよくアルバイトに遅刻しそうになる。

自転車に乗つて農道から転落したのは、今週に入つてからもう一度目だ。

今回、不幸中の幸いだったのは、傾斜のなだらかなところに叩き付けられたために、田圃の中に落ちずに済んだということだ。前回は田圃の中まで転がり落ちて、全身泥まみれになつた。しかしその代償として前回と比較にならないほど激痛に全身を襲われているので、やはりどちらが幸運かは人によつて判断の分かれるところかも知れない。いやいや、どちらも不幸だ。

自分の名前が良くないのではないか。『ふう』に入れ替えると「ふこう」だ。風のように育つて欲しいなどと以前に両親は話してくれたことがあるが、それもどうだか怪しいものだ。風子は二月五日生まれなので、音は單なる語呂合わせで、適当に漢字を当てただけではないのか。

もう五分以上たつているのに、まだ視界が回っている。右目と左目がそれぞれ勝手な方向を見ている。体の痛みは少しだけ治まってきたが、全身の痺れも酷く、肉体を動かそうと念じても全く主人のことを聞いてくれない。

いつまでもこんなところにいたら、アルバイトに遅刻してしまつ。気ばかり焦る。

今日は次の日曜日を休みにしてもらひよつと頼む予定でいる。土壇場のお願いなので、遅刻などしてしまつたら店長に話を切り出しつくくなってしまう。

突然、胸の上になにか重たい物が飛び乗ってきた。服の上からでも分かる重たく柔らかい不気味な感触。首をかろうじて少しだけ持ち上げることが出来た。眼球を精一杯下に向け、自分の胸のほうを見る。その重たく不気味な物がなんなか分かつた。それは黒くて大きな力エルだった。あまりの氣色悪さに、一瞬氣を失いかけるが幸か不幸か持ちこたえてしまつた風子には現実との戦いが待つていた。

まるで蝦蟇の油に対抗するかの」とぐ、風子の全身から汗がどつと吹き出した。起き上がって逃げ出したいが、肉体が痙攣するばかりで、全く身動きが取れない。

口を開いても、どつちが力エルだか分からないような呻き声が漏れるばかりである。もうこの数年で、女の子らしい悲鳴の上げかたなどすっかり忘れてしまつっていた。

風子が怪物の襲撃より救出されたのは、それから三分後のことであつた。

相手がまともに抵抗出来ないのをいいことに、いつしか力エルは風子の顔の上に乗つていた。そんな力エルをどけてくれたのは、滝川光男という佐久間家のすぐ近所に住んでいる老人だつた。手を引っ張られて助け起こされた風子は、どもり口調で滝川氏にお礼を述べると、まだ痛みの残る体に鞭を打ち、全力で自転車を走らせた。

アルバイトには五分遅刻した。

3

陸奥西部開発鉄道高原宮線尾花沢方面の四両編成電車。短い編成の電車でなおかつ進行方向に穂室市という小都市があるので、日曜日の昼だといふのに電車の乗車率は百パーセント近い。ボックシートの車両は、風子が野々部駅で乗つた時点ではかなりの席が空いていたのだが、隣に人が座つてきたら自分がどうなつてしまつか分

からないので、車両連結部分付近にずっと立っているつむじ、段々と電車が混雑してきた。

平日通勤時間帯の混雑に比べればどうということもないのだろうが、普段電車に乗ることのない風子にとっては、耐え難いほどの人口密度であった。一駅また一駅と、穂室駅に近付く度に車両内的人数が増加していく。

逃げ場所を失わないように、ずっと立っていたといふのに、それでもだんだんと気持ちが追いつめられていく。

風子は、穂室駅より二駅手前の野又新田駅で下車するつもりだ。

穂室駅の近辺はオフィスビルや若者向けのスポットがたくさんあり、規模こそ天地の開きがあるものの東京でいう渋谷原宿のような場所だ。日曜日なので、そこへ向かう電車の中は私服の若者が多い。男女ともお洒落な服に身を包んでいるというのに、風子はぶかぶかのオーバーオールのジーンズ、中には赤いTシャツ。どんなに服装に無頓着な田舎娘でも、これよりは遙かにまともな格好をしているだろう。

左右どちらの窓からも、見えるのは田園と遠くの山々ばかりの殺風景。ただ、少しずつ住宅、高い建物が増えて来ている。

車内アナウンス。まもなく野又新田駅だ。

風子が降りようと思っていたドアには二十歳くらいの男が一人寄りかかっていた。……どうしよう。降りられない。

ボックスシートの車両は通路が狭く、そこにも何人か立っている者がいるため、とても向こうのドアにまで移動出来そうもない。車両の連結部分にいるので、隣の車両を見てみると、やはり同じように若者がドア付近に群がっている。

ドアに向かつて歩き出せば、降りようとする意思を察してぞいでくれるかも知れない。と、数歩歩いてみると、一人の若者はお喋りに夢中で全く気付かない。

電車が停車し、ドアが開いた。やっと若者がぞいた、と思つたら、どつと人の群れが乗り込んできた。

降ります！ などと心の中で叫んでも伝わるはずもない。ドアは閉まつた。乗り過ごしてしまつた風子を乗せて、電車は走り出します。

仕方がない。次の駅で引き返そう。

しかし次の駅でも降りることは出来なかつた。最大限の勇気を振り絞つて、「あのう……」とか細く呟いた瞬間にドアは閉まつてしまつた。ドアが開いてから勇気を振り絞るまでにあまりに時間がかかり過ぎたのだ。

次の穂室駅でほとんどの乗客が降りたため、人混みに流されるようにして、ようやく電車から降りることが出来た。

向こうのホームに、反対方向に行くらしい電車が停車している。風子は急いで階段を登り降りし、ホームを移動したが、電車のドアに辿り着くまさにその直前、ドアが閉じてしまった。

風子を置いて、電車は走り出す。

溜息。本当に自分はなにをやっても駄目だ。電車の乗り降りすら、まともに出来ないなんて。

腕時計の針を見る。午後一時七分。

もう、開始時間を過ぎている。

せつかく今日の仕事を休みにして貰つたといつのに。

充分に余裕を持つて出たはずなのに……

ホームに置いてある時刻表を見る。次の電車が来るのは三十分後だ。これは不運ではない、単に自分が馬鹿だったのだ。

途方に暮れながら、ベンチに座り電車を待つた。

電車の到着まで時間を潰そうにも、なにも持つてきていない。駅構内には売店もない。

ホームの上を歩いている鳩の動きや模様を観察したり、数を数えたりなどして時間を潰した。

などとやつているうちに、退屈な數十分の時も流れ、ようやく野々部方面の電車がホームに到着した。六両編成だが、ほとんど誰も乗っていない。風子の乗り込んだ車両も、老人が一人座っているだ

けだった。

風子は腰を下ろす。この時間の野々部方面だし電車が混んでくることはないだろうが、でもなんだかボックシートは怖いので、ドアのすぐ横にある三人掛け横並びの席に座る。

ぶかぶかのオーバーオールに、何年も伸ばしつぱなしの長い髪の毛、大きなスポーツバッグ……単なる田舎娘というより、家出少女か訳ありの逃亡者みたいだ。

周囲の眺めを高いビルが埋め尽くしていたが、発車して一分も経過しないうちに、風子の見慣れた田園だらけの風景になる。

次の駅で老人が降りたため、風子は一人きりになった。なんだかとても不安な気持ちになつた。同時に情けない気持ちになつた。普段自分のことを見下す人間嫌いと思つてゐるぐせに、一人でいることが不安になつてしまふなんて。

十五分後、風子は再び野又新田駅に到着した。今度は誰も降車を邪魔する者はいない。

改札で駅員に切符を渡し、西口から外へ出た。

太陽が真上からぎらぎらと照りつけている。風子はあらためて、自分が汗だくなつてゐることに気付いた。ハンカチを取り出して、額や腕の汗を拭つた。

春の終わりの五月二十五日。初夏を通り越して、真夏日であつた。小さなロータリーには、タクシーが三台待機している。個人商店、小さな不動産屋、コンビニエンスストア、くらいしか店舗がない。あとは民家がいくつもあるだけだ。

駅の切符券売機横に、この周辺の案内地図があつた。そして、その地図上にこれから目指すべき場所を発見した。その場所をしっかりと脳に刻み込む。仕入れた情報の分だけ、嫌な記憶が流れ出いでつてくれればいいのに。たかだか電気信号の流れだというのに、脳味噌の仕組みとは何故にかくもままならないものか。などと虚しいことを思いながら、風子は一人、陽炎に揺れる道を歩き出す。

少しだけ歩くと、目的地はすぐ確認出来た。まだ離れてはいるが、

周囲に高い建物がないため、照明装置が見えていたから。

確かにインターネットのHPには、駅から徒歩十五分と書いてあつた。自分は鈍足なので普通に歩いていたら二十分以上かかるかも知れない。そう思つて、少し足の動きをはやめた。その甲斐もあり、歩き始めて丁度十五分で、目的地に辿り着いた。

華鳴市立鳥ノ山陸上競技場。

収容人数が一千人強という小さな競技場だ。

太鼓の音、人の叫びが聞こえてくる。

建物の入り口で、係の老人にとめられた。バッグの中に危険な物が入っていないかをチェックしていること。風子はバッグを開けて、すかすかの中身を見せた。続いてチケットの確認を求められた。オーバーオールの、胸の大きなポケットから薄っぺらい札入れを取り出し、その中に入っているチケットを見せた。一昨日、野々部駅前にあるコンビニエンスストアの発券機で購入したものだ。

老人の前に置かれている長いテーブルの上にもチケットが山積みになつている。確かに当日券は一百円高く、千円のはずだ。

「もう、後半始まっちゃってるよ」

老人は風子に何枚か紙を手渡した。JFLの日程表や、スポンサー企業のチラシのようだ。

「……は、はい。で、電車、おお、降り損ねて……戻ってきて……」「居眠りでもしちまつたのかい。こういうド田舎は電車の本数が少ないんだから乗り越しには気をつけないとね」

「どうぞ、どうもすんませんです」

風子は深く頭を下げた。

「はは。おれに謝つても仕方ない。ほら、早く行きな。本当はチケット代を半額にしてやりたいけど、おれにどうこう出来るもんじゃないし」

老人が立っているすぐ横に白く塗られたコンクリートの階段がある。細かく直角に折れながら、垂直に伸びている。階段を昇りきり、狭い空間から一步前になると、一瞬にして壮大な眺めに変わる。す

ぐ田の前には陸上のトラック、その中にコートがあり、なにやら試合が行われている。ぐるりと取り囲むように、遠くには山がそびえている。

強烈な日差しが芝に反射して、上からも下からも熱気が叩きつけられてくる。しかしここは非常に風が強く、汗だくなつていていた風子はむしろ涼しさを覚えた。

かき鳴らされる大きな太鼓の音。人々の絶叫。

……自分は一体、なにをしていいのだろう。

ここになにをしに来たのだろう。

なにを探しに来たのだろう。

田の前で行われているのは、JFL前期第十一節、ハズミSC対三徳製薬……サッカーの試合であった。

来る前は、観客席はコートの回りを一周しているのかと想像していたのだが、そうではなかつた。四辺のうちの一辺にしか入場できるスペースがない。四人掛けの長椅子が階段状に十段ほど設置されている。風子は今、その一番上の、通路部分に立つていて、背後は長い壁で、今出てきたばかりの出入り口や、トイレ、物置、機械室、放送席がある。

収容人数の非常に少ないスタジアムと聞いていたので、どんなに混雑するかと決死の覚悟をしてきたのだが、予想に反して客はほとんどいない。ぽつり、ぽつり、と人が座つていて、しかし両脇の人工密度は凄まじく、狭い場所に百人くらいがひしめき合つて、音頭取りの太鼓の音に合わせて声援を送つていて。

全て自由席のことなので、どこに座つてもいいらしい。こんなに空いているのに、何故込み合つている席に座るのか、風子にはその感覚がさっぱり理解出来ない。

ふと気付いてみれば、応援している人の多くが、選手達と同じような服を着ている。そういうえば、テレビで放送している野球も、たまにチームのユニフォームを着て応援している人が映るが、しかしここはその比重がやたらと高い。サッカーの応援というのは、そ

いうものなのだろうか。それとも、ここに来ている人だけが特殊なのだろうか。

陸上のトラックの中に、芝の生えたエリア、サッカー用のコートがある。その中で、オレンジのユニフォームとブルーのユニフォーム數十人が入り乱れ、一つのボールを追い、戦っていた。

向こう側の金網には、両チームの選手を応援する横断幕でびっしりだ。

駆け抜けろ青い閃光 三徳製薬

クラッショマン 義昭

気分は日本代表

東北最強 ハズミシ

決める 有村

轟け！ ゆうじ

ぶつちぎれ 高速ボランチ TETSU

選手の胸に書いてある文字は遠くてはっきり読めないが、オレンジ色のユニフォームを着ているのがハズミシのはずだ。

電車を乗り過ごすというヘマをやらかしてしまったせいで、もうすでに後半戦だ。

ハズミシはもう何点取ったのだろう。

スコアボードを探した。てっきり電光掲示板に得点表示がされていると想像していたのだが、まるで草野球のように地面に台が置かれているだけだった。そこに数字板が張り付けられている。その横には、学校の校舎で使っているような大きなアナログ時計が置いてあり、試合時間を表している。

果たして○ 五でリードされていた。

風子は自分の目を疑つた。スコアボードの読み方が誤っているのかと思い確認をしたが、結果がくつがえるわけではなかつた。

ハズミシはほとんど無敗でJFL昇格を果たした強いチームではなかつたのか。

国旗台には、国旗、両脇にチームの旗が上がつており、風に激し

くなびいている。離れていても、ばたばたという音が容易に想像出来るほどだ。風子の髪の毛は旗のなびく方向に合わせてあっちに引つ張られ、こっちに舞い踊り、落ち着かない。

風子はグラウンド上のハズミスのコニフォームの中に背番号十四番を発見した。

秋高鉄一……

遠めではあるものの、あのHPに載っていた顔だ、あの駅前で出会った顔だ。

随分と後ろのほうのポジションだ。ボランチというのは攻撃と守備のどちらかでいうと守備の人なのか。少しがっかり。後ろじゃあ、得点する機会なんて全然なさそう。

風子はサッカーのルールをほとんどにも知らない。相手ゴールにボールを入れれば得点。最前方にいるのがフオワード、後方で守るのがディフェンダー。「ゴールキーパーは手でボールを持つても反則にならない。その程度の知識しかない。

延々と突っ立っていても仕方がないので、席に座ることにした。チケットには全席自由と書いてあるので、どこに座つてもいいのだろう。風子はぐるりと周囲を見回し、席の空き具合を確認した。

人が密集しているのも嫌だが、一人きりでぽつんと座つても、目立ちそうで好ましくない。密集している場所から少しだけ離れた、人のまばらなところに腰を下ろした。

○ 五という得点差の理由が、ゲームを少し見ただけで素人の風子にも分かつた。相手のほうが圧倒的に、ボールのキープ時間が長い。宙に浮いたボールも、ほとんど相手が拾ってしまう。背の高さの問題ではなく、ボールの飛んで来る位置を予測する能力が相手のほうが高いように思える。

少し落ち着いたところで、先ほど係の人に貰った紙を見てみる。JFLの日程表、今日の試合のメンバーとフォーメーションの書かれた紙。やはり、秋高鉄一は後ろのほうのポジションだ。

風子のほうに、ビール缶を片手にした赤ら顔でほろ酔い気分の親

父がふらふらとした足取りで近寄つて來た。風子の一いつ隣の席に座つた。条件反射的に立ち上がり逃げ出したくなつたが、それも失礼なことのでぐつと堪えて体をベンチに押さえつけた。親父の足下にはバッグと紙袋が置いてあつたので、おそらくはトイレから戻ってきたのだろう。

風向きが一定でなく、絶えず変化している。酒臭くなつたり遠のいたり、ピッチ上の攻防よりも目まぐるしく変化している。

ピッチ上の勝負に視線を戻す。その瞬間、両応援席から絶叫にも似た大きな声があがる。ハズミSCのDF同士の横パスを、三徳製薬のFWにカットされてしまったのだ。迷いのないドリブルに、ハズミDF慌てて追うも間に合はず、相手FWはハズミSCのGKと完全に一対一だ。三徳製薬のFWは左足を振りぬいた。GKは至近距離からのシユートを、右足を横に伸ばし防いだ。反射神経といふよりは、ほとんど経験から来る勘による動きだろう。鈍い音とともに、ボールが真上高くに上がる。落下地点と差してFWが素早く詰め寄つてくるが、GKは軽く飛び上がり両手でボールをキヤッチ。GKのファインプレーに風子はほっと胸をなで下ろす。いつの間にか、両手を握り締めていた。手がじつとり汗ばんでいる。

「いでででっ！」

横から酔っぱらい親父の悲鳴が。風子の長髪が強風にあおられ、鎌首をもたげ獲物をしとめる蛇の「とく親父田がけてグサリグサリ」と突き刺さったのだ。

「ど、どうも……」

風子は髪の毛を押さえつけ、深く頭を下げた。

スタジアムの外にも風は吹いていたが、そよそよという程度で、扇風機の弱風程度もない。ところがこのスタジアム内ではどのよつな地形効果が働いているのか分からぬが凄い風で、汗が吹き飛ぶどころか肌寒いくらいだ。

三徳製薬のラフプレーに審判の笛が鳴り、試合が一時中断。その間、風子は改めてそれぞれの応援団を観察していた。どちらにも選

手と同じユニフォームを着ている者が多い。一体、どこでそんなもの売っているのだろう。そこら辺のお店でユニフォームが売られているほど、ＪＦＬというのは有名なチームばかりなのだろうか。

サッカーの試合なんて、男性客しかいないと思っていたが、意外に女性客も多い。密集しているところは、もう誰が誰だか分からぬい状態だが、離れたところを見れば、中年夫婦や若いカップル、女性同士。

一番前のフェンス越しに女の子が四人、全員背番号六のユニフォームを着ている。ハズミンの六番がボールを持つたびに、なんとも言葉にならない黄色い歓声を上げている。

インターネットのＨＰで写真を見たことがあるはずだが、よく覚えていない。選手までの距離が離れていて、顔ははつきりとは見えないが、きっと女の子に受けるハンサムな顔立ちなのだろう。なるほど人によつてはそういう楽しみかたもあるのか、と風子は感心した。

また、彼らが歓喜の声を上げた。しかしそれもつかの間、ハズミ六番がキープしていたボールはあっさりと相手に奪われてしまう。しかも、彼らの落胆の溜息が終わるか終わらぬかのうちに、そのままドリブルで持ち込まれゴールを決められてしまった。

六点差に広がった。

三徳製薬側の応援席から雄叫び、太鼓の音。巨大な旗が上下に大きく振られる。

「ただいまの得点は……後半十五分 三徳製薬 七番 阿部浩一選手のゴールでした」

若い女性のたどたどしいアナウンスが流れる。

ハズミン側の応援団は気を落とすことなく、熱い声援を送り続ける。もう試合も終盤、こんなに差をつけられていて、勝負は決まつていてるのに、なんでみんなこんなに一生懸命に応援が出来るのだろう。風子には理解出来なかつた。

ハズミンはなんとか一点を取つた、危険を犯してやや前方に

選手を集めているようだ。そんな中、ハズミ十番が味方からのパスを受け損ない、相手に取られてしまった。ほとんど人のいないハズミSCの陣地を、三徳製薬の九番がボールを少し長めに蹴りながら、猛烈な勢いで走つて行く。

また失点か。風子は諦めた。

その時、後ろから追い上げてきたハズミSCの六番が、先ほど軽いプレーでピンチを招いたことの汚名返上とばかりにスライディングタックル、ボールを奪い返した。相手の九番は、大袈裟すぎるほどに大きく宙を舞い、地に転がった。

また、両チームの応援席から爆音のような叫び声が上がる。ハズミSCの側からは歓声、三徳製薬の側からは怒声、罵声等だ。

「ぎやつ！」

風子のすぐそばで、歓声でも怒声でも罵声でもない叫び声が上がった。つい頭髪を強風から守ることを忘れ、また酔っぱらい親父に髪の毛が刺さってしまった。

「い」「ごめんなさい」

親父は、頭をぐりんぐりんと回しながら、片手を上げた。気にするな、ということらしい。

風子は立ち上がりと、自分の射程距離に誰も入らないよう、周囲に人のいない席へと移動した。背後に酔っぱらい親父の大きなげっぷが聞こえてきた。

審判の、長い笛の音が響いた。

試合が中断する。

審判は黄色いカードを高々と上げていた。ハズミの六番に向かつて。今のプレーが乱暴な行いと判断されたのだ。そして、その手を下げたかと思うと、今度は赤いカードを出した。

ハズミ側応援席から壮絶なブーリングが起こる。

外国人選手と思われる肌の黒いハズミ十九番が、審判になにやらゼスチャーをしたところ、その選手にも黄色いカードが向けられた。怒る十九番を、必死に十四番、秋高鉄一がなだめている。

赤いカードを出されたハズミの六番は、ピッチを出て行った。こうしてハズミは六点差で負けているのみならず、一人少ない人数で戦うこととなつた。

応援団や、六番ユニフォームの女の子たちから、審判への罵詈雑言が飛びぶ。

「へぼ審判」

「家餅のジャッジのほうが、まだマシだぞ」

「ボールに行つてたるうが！」

「倒れりやなんでも笛かよ！」

なんだろう、ボールに行つていたつて。風子にはどういう意味なのかさつぱりだ。

確かあの黄色い切符みたいのは、イエローカードといって、危険な行為に対する注意で、レッドカードといつのはもつと乱暴なプレーをした時に出るものではないのか。レッドカードの時には、退場になるはず。イエローだけが出る、レッドだけが出る、というのなら分かるが、イエローが出て続いてレッド、これはどういうことだろう。レッドよりもさらに悪質なので、イエロー一分を追加、ということだろうか。風子はサッカーのルールなどほとんど知らないのでいろいろと考えてしまつ。

ハズミは選手の交代をした。どうやらFWの選手を下げて、DFの選手を入れたようだ。

せめてこの点差を守りきるつもりだったのかも知れないが、しかし実力や人数差の問題は如何ともしがたく、さらに一一点を失つた。両チームへの熱い応援は続く。

先ほど審判への抗議かなにかで警告を受けていたハズミ十九番の黒人選手、彼がボールを持ちドリブルしようとしたところを、今度は青いユニフォーム、三徳製薬の選手がスライディングで転ばせてしまつた。

審判が笛を吹いて、ゲームを止める。

みんなぞろぞろと、三徳製薬のゴール前に向かつて行く。DFの

選手も、長身の一人が小走りに向かう。

十九番の選手は、自分が転ばされた地点にボールを置いた。審判がボールを置く位置を微妙に修正させる。そのそばにもうひとり、選手がいる。どちらが蹴るのだろう。「ゴール前にたくさんの中の選手達が『じちや』『じちや』と動いている。そこに向かつて、ボールを蹴るようだ。

ドン　ドン　ドンドンドン（太鼓の音）！

ゴール　ハズミ　ゴール　ゴール！

ゴール　ハズミ　ゴール　ゴール！

ハズミの応援席から、三徳製薬「ゴール」前に密集しているハズミの選手に向けて声援が送られる。

審判の笛が鳴る。

オレンジ色のユニフォーム、十九番の選手がボールに駆け寄り、右足で蹴つた。

ボールは綺麗な弧を描き、三徳製薬「ゴール」へと向かう。

三徳製薬のGKはキャッチしようと身構えたが、強風のため落下地点の予測を誤った。慌ててボールを追つが、相手マークを外してするりと飛び出したハズミの十四番、秋高鉄一が大きくジャンプ、頭を捻つて額をボールに打ち付けた。ボールは急角度で地面にワンバウンドし、ゴールネットを揺らした。

選手も応援席も、オレンジ色のユニフォームを着ている人間はみな叫び、喜んだ。ハズミの選手達が秋高鉄一に駆け寄つて行く。秋高鉄一は両腕を高く上げた。

激しい太鼓の音がかき鳴らされる。

ひょっとして、「ゴール……決めたの？」

風子は激しく手が汗ばむのを感じた。

観客席がざわつきはじめる。

サイドにいる審判の一人が、赤い旗を高く上げている。

応援席から、落胆に似た声が漏れる。

両チームの選手達は自分らのポジションに戻つて行く。

三徳製薬のGKが前方にボールを大きく蹴飛ばした。

いつまで待つても、スコアボードの数字はなにも変わらない。

今のは、ゴールではなかつたのか……

でも何故だろう。別に相手を倒したりといった反則をしたようにも見えなかつた。サッカーのルールは複雑だ、ちつとも分からぬ。審判が片手を上げ、長く笛を吹いた。

試合終了。

ハ〇の大敗だ。

両チームの選手たちは、挨拶を交わし合つたあと、それぞれの応援席に向かつた。両チームとも淡々としているように見えるが、その表情を見るとまとう空氣の全く異なることが分かる。

三徳製薬の選手は当然歓喜、拍手で迎えられる。

負けたハズミシの選手たちはすまなそうに頭を下げる。だが、三徳製薬同様に激しい拍手に迎えられた。

「次だ、次！」

「下向いてんじゃねえ！」

「次こそゴールだぞ！」

荒っぽい励ましの声。

周囲に合わせ、風子も選手達に拍手を送つた。

4

面白かつたといえば面白かつたような、虚しいといえば虚しいような、自分の気持ちのことながらなんだかよく分からぬ。分かつてゐるのは過密日程の旅行でもしてきたかのように非常に疲れていふといふこと。無理もない。電車に乗つたことなど数年ぶりだったし、スタジアムで競技観戦など生まれて初めての経験だ。

視覚聴覚を刺激する様々な見慣れぬ情報に、目も心も疲れてしまつた。

夕方五時過ぎに帰宅すると、着替えもせずにベッドにうつぶせになつた。

これは果たして趣味になるのか。明日への活力を貰うどころか、

全ての精氣を吸い取られたかのように氣怠い。試合を黙つて観戦していただけなのにこの様だ。大きな声で応援しているファンの人たちは大変だ。きっと、遠くから来ている人だつているだろうに。

風子の脳裏に、秋高鉄二のヘディングシュートが「ゴールネットを揺らした時の記憶が甦つた。みんなが集まつて「ゴール前でごちゃごちゃひしめきあつていて、離れた場所からそこを目がけてボールを蹴つて。集団から一人抜け出した秋高鉄二がジャンプ……

ネットを揺らした瞬間の、どつと沸いた周囲の歓声。自分も、とても手が汗ばむのを感じた。

あの時、自分はどういう気持ちを感じたのだろう。自分のことながら、よく覚えていない。

ただ、悪い気分ではなかつたように思つ。どちらかといえば、その反対ではないだろうか。

得点になつていたとしても、○ハが一ハになるだけなのに。素人が訳の分からぬままにただ観戦していてもこうした気分になるくらいだから、好きなチーム、好きな選手がゴールを決めればさぞ嬉しいだろう。

なるほどファンの人たちはそういう喜びを味わうために時間と金を使い遠くから観戦に来るのか。負けたから意味がないという訳ではないのだ。

でも結局、あの時のシユートはゴールとは認められなかつた。何故だろう。別に反則をしたように見えなかつたのに。……といつてもサッカーの反則なんて、選手を殴つたり蹴つたりしてはいけないのだろうな、等とその程度の認識しかないが。

なんだか釈然としない。

風子はベッドから起き上がり、一階へと降りた。

居間の隅にある、首振りディスプレイ型のiMACの電源を入れる。ジャーンと音が鳴り、起動画面が出てくる。スリープにしておくと起動が早いと弟の良信にいわれたことがあるが、そんな専門用語をいわれても混乱するだけだ。

WEBブラウザを立ち上げ、ハズミSCの公式ホームページへ。もうJIRはブックマーク登録してあるので、迷うことはない。試合速報をクリック。今日の試合についての情報が表示される。結果は風子の知っている通り○ハの大敗だ。

五月二十五日

晴れ

観客 ハ二三人

主審 萩原滋樹

副審一 安腹光太郎

副審二 加藤流三

第四の審判員 田之坂典弘

【データ】

FK ハズミSC 三 三徳製薬 十三

CK ハズミSC ○ 三徳製薬 七

ショート ハズミSC 五 三徳製薬 二十一

警告

ハズミSC 五分 渡辺輝彦 一十五分 秋高鉄一 四十二分

与那嶺怜一 六十六分 与那嶺怜一

三徳製薬 三十八分 都野寿 八十六分 阿部浩一

得点

ハズミSC

三徳製薬

十一分 柏倉秀樹 十七分 阿部浩一 三十五分 近藤健太 四

十三分 吉次健一 四十四分 吉次健一 六十分 阿部浩一 七十

七分 波田英二 八十二分 吉次健一

【総括】

序盤は若干守備的になりながらも、うまくボールを回し、優位に試合を進めることが出来た。しかしカウンターから一発を食らうと守備陣が崩壊。連携が整わないままに、全員の意識だけが前に前に向いてしまい、大量失点に繋がってしまった。

【佐倉監督のコメント】

非常に残念な試合だと思つていて。相手は確かに首位争いをしているチームだが、そんな中で序盤はよくやつてくれた。しかし我々はボールを回させられていだけで、一瞬のミスによりカウンター一発でズドンとやられてしまい、後はもう相手の一方的なペースだつた。

残念な試合だつたというのは、負けたことがではない。最初の内容のまま続けて負けたのなら、次節へと繋がる負けになつたはずなのに、それが非常に悔やまれる。でも下を向いたら終わり、修正点がたくさん出たことを成長できるチャンスと思って、前を向いて練習していく。

【轟佑司選手のコメント】

サッカーは何か起こるか分からぬ伊斯ポーツ。最初の決定機で僕が決めていれば、もしかしたらまつたく違つた展開になつていたかも知れない。決定力を上げるために練習するしかない。とにかく今日は完敗です。相手は本当に強いチームだった。ＪＦＣのレベルの高さを今日ほど実感した日はない。

【秋高鉄一選手のコメント】

一点取られてばたばたしてしまつ癖をはやく直さないといけない。今の監督のもと、やることは練習でしつかり確認しあつてるので、あとは強いメンタルをもつて実践していくだけ。僕らの方向性は決して間違っていない。

(残念ながら最後のシーン、岡崎選手がオフサイドを取られてし

まいました)

意地で一点でも返したかった。そうすれば、強豪相手に一点取つたという結果を持つて、次に望むことが出来た。サポーターのみんなにはいつも申し訳ないとと思うし、感謝している。次こそは必ず勝つて、勝利を分かち合いたい。

【加屋櫛選手のコメント】

八点も取られて、何も言ひことはありません。次頑張ります。

どうやら、あのペディングによるゴールと見えたシーンは、オフサイドという反則のために得点と認められなかつたのか。

それと、六番の選手がイエローカードとレッドカードを連続して貰つて退場させられた件。イエローカードといつのは、同じ試合で一枚貰うと、レッドカードを一枚貰うのと同じで、退場させられてしまう。風子が観戦を始めた時点で、もうすでに一枚貰つていたのだ。

色々な不明点が判明して、気持ちが少しすつきりした。

ただ、一番の疑問点は、「ハズミッシュは本当に強いチームなのか」ということ。

監督のコメントから、今日の対戦相手が強いのは分かるが、それについても為す術なしの○ハの大敗は酷いのではないか。

公式HPに本年度の試合結果が全て記録されていた。開幕戦で○○で引き分けたきり、あとは全敗している。それだけではない。開幕してから十試合以上も行われているというのに、なんと一得点もあげていない。

類を見ない圧倒的な攻撃力で、ぶっちぎりのナンバーワンで○FL昇格を決めたのではなかつたのか。そんな程度では通用しないほどに、JFLのレベルが高いということなのだろうか。風子は煙に包まれたように、すっかり混乱してしまつた。だがその答えはすぐに行はられることになる。「ハズミッシュ」で検索してみたところ、フ

アンのための掲示板があつた。

2000年7月20日 16時48分

あれ
せうたしのハサイドじやねえよ テツの一川だよ

2000年7月20日 16時59分

七八一
次 次

次は二十六番で、おもむろに腰を下す。

2000年7月20日 17時01分

ハ、ト、ハ、ト、言ひハ、ト、お、藝示一、木村三は、何の、
慢にもならんけどね。ほんとお前、弱すぎやつ。

200×年7月20日 17時06分

他サホは来んじゃねえ。うせえ。しちしち書き込むなバカ。別にお前が強いわけじゃねえだろ、このオタク野郎が。

200×年7月20日 17時13分
オネアスがいればなあ。一人で点取ってくれるから、みんなで守
るだけでよかつたのに。

2000年7月20日 17時17分

そ、うだ、けど、オネアスに頼つてたから、日本人が成長しなかつたんだぞ。たとえ降格しようと、オレは付き合ひうぞ、何年でも。チーフが成長していくのを。

などといった書き込みを見て、ようやく風子は理解した。

ハスミスの弱い点

去年までは社会人リーグという一つレベルの低い土俵で戦っていたのだし、オネアスという選手の個人技で点を取つて、残り全員で

守っていただけ。超攻撃型のチームでも何でもなかつたのだ。

オネアスのことを検索すると、舞うような華麗なドリブルはオネアスの翼と呼ばれ、数人掛かりでないとまず止められない凄まじいものだつたらしい。社会人リーグに外国人選手はほとんどいないので、これはもう反則級の強さであつたことだろう。相手選手が数人掛かりでマークしなければならない分だけ、ハズミ側には人數的な余裕が出来る。それでも毎試合失点していたというのだから、もしも日本人だけならば……などと想像してみるまでもない。現在も外国人選手が一人いるらしいが、蓮見製菓でアルバイトしていたことがきっかけで加入したというだけ、身体能力は高いがサッカー経験が浅く助つ人と呼べるレベルにはほど遠いらしい。

今日の八点差のボロ負けも当然の結果だつたのだ。

インターネットでサッカー用語集のページを探し、気になつていた単語「イエローカード」「レッドカード」「オフサイド」「ボランチ」について調べた。

なるほどなあ、と思わず感心させられたのがオフサイドというルールだ。聞いたことのある言葉ではあつたが、意味などは全く知らなかつた。

もしもこのルールが存在しなかつたら、フォーメーションを組んでどう効果的に敵陣を突破していくかという戦術的な面白みが全くなくなり、ゲームが非常に大味なものになつてしまふだろう。

他の用語を全然知らないせいもあるが、サッカーという競技は詰まるところオフサイドというルールがあればこそ成り立つているのではないかと思つた。

下平耕平、年齢二十六歳。ケーキ屋のアルバイト店員だが、人員が頻繁に入れ替わる中で七年以上も居続けていた古株で、待遇や発言権など実質的には副店長といつても過言ではないくらいだ。

下平の実家はそれほど遠くない。野々駅から電車で三十分ほど。

穂室という大きな駅の一つ手前にある南各村が最寄り駅だ。しかしながら徒步十分の木造アパートだ。かえって高校への通学が遠くなつたが、大地震がくれば真っ先に倒壊しそうな古アパートはその分家賃が破格の安さだつたし、なによりも早く親元から自立をしたかつた。中学二年の頃から不良友達と付き合つようになり、隣の中学校と喧嘩ばかりしていた。親はよく学校に呼び出されていた。父親は先生の前でも家庭でも決して息子を叱ることはしなかつた。呼び出されても、ただひたすら先生に謝るばかりだつた。主義でやるなら立派だが、単に息子が怖いだけだつた。アルコールの力を借りてでしか、誰に文句をいうことも出来ない父だつた。母親も似たようなものだつた。

いつも両親が自分に向けてくる怯えるような視線がたまらなく辛かつた。たまらなく淋しかつた。

その思いが不良行為をエスカレートさせていくことは、彼の場合、なかつた。そこそこガラの悪い生徒という地位のまま、ただ家から出たい思いだけが次第に大きくなつていつた。

実家でこんな家族と生活をして、自分が駄目になつていくのが怖かつた。

一人暮らしを開始した最初の頃は頻繁に友達が遊びに来たり、彼女が泊まりにきたりと賑やかだつたが、そのうちにまず友達が来なくなつた。下平がろくに口もきかず、勉強机にかじりついていたからだ。

彼は大学に進学したかつたのだ。

そんな様子であつても、彼女はたまに食事を作りにきてくれたし、泊まつて行くこともあつた。せつかく一緒の布団で寝ているというのに、付き合い始めた頃のように彼からセックスト求めるることはほとんどなく、たいていが彼女から誘う。しかもことを終えたあとに、愛や夢を語らう時間もなく彼はとつとと眠つてしまつ。起きている時もほとんど会話がない。手をつけないで歩くこともない。やがてこ

の状況に彼女が耐えられなくなり、一人の関係は破局を迎えた。

一人暮らしを始めてから約一年後、下平は無事に希望の大学に合格した。合格が決まるとすぐに現在働いているケーキ屋ノワゼットでアルバイトを始めた。そして学費を稼ぐつもりでいた。

しかし大学は遠く、スケジュール的にもアルバイトとの両立は難しかった。また、その頃はまだ時給が非常に安く、生活に手一杯でとても学費どころではない状況だった。

蝉の鳴く季節を迎える前には、退学届を出していた。

落ちこぼれが猛勉強してそこそこのレベルの大学に入つたというのに勿体ない、と会う人会う人にいわれた。後から思えば単に良い大学に入つて良い企業に就職して、親を見返してやりたかっただけなのかも知れない。

大学を続けたいなら、いくらでも方法はあつたはずだ。親に金を出して貰つてもいいし、大学の近くなら割のいい深夜アルバイトだつてある。しかし彼は親から離れたことで、親への反抗心も薄れてしまい、それにより大学に行く意味自体を見失つてしまつたのだ。結局そのままケーキ屋でアルバイトを続いている。

その頃は店長と、社員が一人、それと自分を含め五人のアルバイトがいた。ケーキを焼く技術を持つているのが店長とその社員だけだった。

下平は飾り付け、陳列、それとケーキ作りの簡単な補助をしていた。

こき使われるだけで、全然面白くなかった。しかし、慣れてきてある程度の要領をつかめていたし、少し自給もアップしたし、新しいアルバイト先を探すのも面倒だつた。

いつしか何年もの時が過ぎていた。嫌な社員は体調を壊してこの仕事から引退した。

いつしかケーキを作ることが楽しくなつていた。

ふと気付いてみれば、お店は現在のメンバーになつっていた。いつしか将来に不安を覚えるようになつっていた。

この仕事を捨てるべきか、それとももつと技術を盗んでいつか自分の店でも持とうか。

将来のことを考えると、楽しくもあり、不安でもあった。もしもお店を持てたらまずは店員一人くらいの小さな規模から始めよう。引き抜くならサクちゃんかな。

佐久間風子はなにかと自分を卑下するようなことばかりだが、下平は彼女のことを高く買っている。とにかく、仕事の飲み込みが早い。器用不器用の問題ではなく、単に楽しいと感じているからなのだろう。きっとこうした仕事に向いているのだ。

今も下平のすぐ横で、トレイにぎっしり敷き詰められたケーキにミントの葉を乗せていく作業を素早く正確にこなしている。

「いらっしゃいませ！」

レジのほうから明津恵美の透き通るような元気な声が響いてきた。続いて老婆の声。はっきりと会話の内容は聞き取れないが、どうやらケーキを買いに来たお客様ではないようだ。

下平は作業の手を休め、ドアの隙間からそっと顔を出して様子を見る。その下から真似して風子もひょっこり顔を出す。

明津恵美は、老婆に道を尋ねられているようだ。明津は親切丁寧に教えていたが、どうも老婆は理解出来ていらないようだ。明津は老婆の手を引いて店の外に出ると、遠くを指さしたり、身振り手振りで案内をしている。

下平は自分の作業に戻る。これからケーキを焼こうとしてたところだった。厚手の手袋をはめ、ケーキのたくさん乗った大きなトレイを両手で掴む。開いたオープンの中に入れる。

突然電話のベルが鳴った。

今日の面子を考えると、普段なら明津か下平が応対をするところだが、明津は店の外に出てしまっているためベルの音に気が付いていない。下平はすぐ手袋を取ろうとしたが、ふとその動きをとめ、風子に視線を向けた。

「……サクちゃん、電話に出て。おれ、手が塞がってるから。難し

そうな内容なら、如何と番号聞いて折り返しでいいかい？」

風子は突然のことに驚き、電話と下平の顔に交互に皿をやつた。やがて決心したように、数歩の距離にある事務机まで歩き、受話器を手に取り、耳に当てる。電話機の、赤く点滅しているボタンを押す。

「は、はい……」

少しの沈黙の後、

「あ、ああ、あの、はち……八時……は、はい、…………」
受話器を置いた。

おもろくは閉店時間を尋ねられたのだらう。

風子はがっくりと大きく肩を落としてうなだれている。

「あのさあ、サクちゃん、多分おれがなにをいわなくとも、自分自身よく分かっているよね。自分がもどかしくて、凄く辛いんじやないからって思つ。でもあえてこうよ。ここで働いているからには、これからいくらいでもこういつことはあるからね。……ちょっと練習してみよ!」まず、元気に店の名前をいついと。ほら、こつてみな「は……はい。ノワゼットです!」

「そり。お電話ありがとうございます、ノワゼットです!」

「お、おで、お電話ありがとうございますノワゼットです!」

「わうそり、いい感じ。つい別に電話応対のマニュアルはないから、ちょっと待らせたと思つたら、お待たせしました、とか出だしの言葉は自由に変えてもいい」

「……はい」

「あと、相手の顔が見えないんだから、しつかり相づちを打つこと。ちゃんと聞いてくれてのかつて相手が不安になるから。これはお店に限らず、電話の常識」

「……はい」

「ま、いわれるまでもなく分かっているだらうけど。でもとにかく大切なことだから。一度不快な思いをしてしまったお客様は、もう来てはくれなくなるからね。……店長がいない時にいつのもなんだ

けど、店長も自分もちょっと甘やかしすぎていたと思つ。性格上自分には出来なくても仕方ないなんて思わないでね。こんなのは慣れだから。ちょっとづつ慣れていこう」

風子は頷いた。

「はい、電話のベルが鳴つたぞ。さあ、受話器を取つた！」

「おで、おで電話のわ、ノワゼット、です。……い、いまのタイミングは……ズルいです……」

「なにやつてんですかあ、二人とも」

いつの間にか店内に戻つて来ていた明津恵美が腕組みして風子たちに訝しげな視線を送つていた。

「ああ、ちょっとトーク練習。恵美ちゃん、さつきのお婆ちゃんは？」

「野々市民ホールの場所を知りたいつていうので、教えてあげました。そのすぐ横に、お孫さん夫婦の家があるんですつて」

「電話して迎えに来させりやいいのにな。タクシーで行くとか」

「ああ、そうか、タクシー使えばつていつてあげればよかつたなあ。電話はかけたくないんだつて。いきなり行つて驚かせたいんだつていつてた」

また電話のベルが鳴つた。

「はい、ありがとうございます。ケーキショップ、ノワゼットでございまます」

明津は流暢に電話応対をしている。

風子は落ち込んでしまう。惨めになつてくる。自分などとも彼女に太刀打ちできやしない。電話だけではない。先ほどだつて明るく丁寧に道案内をしていたし、お店の印象にもプラス影響があるだろう。やはり自分などはなんの取り柄もない駄目な人間なんだ。

住宅街を抜け、田んぼへさしかかるうとしているところで、人の姿が視界に入ってきた。

一時間くらい前に明津恵美が道案内をしていた、あの老婆だった。まさか、こんな時間だというのにまだ市民ホールを探しているのだろうか。

「こちちはまるで方向が反対だ。

もうお孫さんの家に着いていて、別件でこちらに来ているのかも知れない。

ゆっくりと自転車を走らせる。

素知らぬ顔ですれ違った。

すこし進んだところで、自転車を止め、後ろを振り向いた。

他人のことだ……

どうでもいいじゃないか。

本当に道に迷っているのかどうかなんて分からない。

下手に声なんかかけて、自分の間違いだつたら恥ずかしいだけだ。もう、行こう……

風子はペダルを踏み込んだ。

他人のことだ……

急ブレーキをかけた。また後ろを振り返った。老婆の背中が小さくなつていぐ。

風子は自転車をユーターんさせた。

あつという間に、老婆に追いつく。

老婆と目があつた。

風子は口を開く。

「あ……あの、お、おばあ……」

「あら、さつきのケーキ屋さん……」

覚えられていた……

きつと自分の髪がほびほびでみつともないから田立つんだ。

「ま、ま、まだ、しみ、市民、市民ホール……」

「ええ。さつきの娘には丁寧によく教えてもらつたのに、なんだか

勘違いして覚えてしまっていたみたいで。もつ、すっかり耄碌しちやつて」

まるでテレビでも見ているかのような、淀みのない標準語。東京の人なのだろうか。この辺りに住む年寄りはみな東北弁丸出しだし、若者にしても標準的なアクセントで喋っているつもりでも、実際はかなりの訛があるというのに。

風子は自転車を降りた。

「あ、あっちだから、し、市民ホール……い、い、一緒に……」

風子は自転車を押し、歩き出した。

夜空には夏の星座が輝いていた。

7

遠金恵理香は機嫌が悪い。

また、つき合っていた彼氏に振られてしまったのである。
はたから見れば男を取つ替え引っ替えのいい身分にも見えるが、
彼女にはそのようなつもりは全くない。交際を続けたいのにいつも
相手から別れを切り出されて終わっている。振られた直後の遠金は
そつとうに気分が悪い。

畜生、やるだけやつて、逃げやがつてよ。だつたら最初から援
交で近づいて金を巻き上げときやよかつた。こつちばっかり金を遣
わせられてよ、あんなに貢いでやつたつーのに、あれが気にいら
ない、お前のこの態度が酷い、許せない、つてまるでそつちが被害
者かのようなこといいやがつて……逃げやがつてよ。今度会つたら
キンタマ引きちぎつてやる。……等といったような愚痴を、口を開
けば友人にぶつけている。一昨日の夜に振られてからというものの、
もうずつとこんな調子だ。谷澤達子も矢野舞子もいい加減うんざり
してしまっている。まあ、一週間もしないうちに、また新しい男を
見つけて機嫌が良くなるのがいつものパターンなのだが。

「だからさ、あんな男やめとけっていったんだよ。最初から遊びつ
て思つてた感じだよ」

「うるせえな。こつちはいつも本気なんだよ」

「ただけど、でも恵理香ならもつと良い男が見つかることで

「そうそう」

昼休み。学生食堂を出た三人は、通路を歩いている。

「放課後さ、カラオケでもいつて騒ごうよ。スッキリするよ。全部達子のおごりでさ」

「ええつ、なによそれえ」

谷澤達子が素っ頓狂な声をあげる。

「……カラオケなんかよりさ、もっとスッキリできるモノがいたよ」遠金は花壇沿いのベンチに腰をかけている佐久間風子の姿を発見した。

ちょうど弁当を食べ終えたところのようだ。弁当箱を布でていねいに包み終えるとなにやら両手をあわせてている。

「今時」こちそうさまのお祈りって、何時代だあいつは

遠金恵理香は通路の手すりにもたれて様子を見ている。

佐久間風子はバッグから本を取りだし、読み始めた。遠くてよくわからないがお菓子の写真が表紙のようだ。

「むかつくんだよな。こんな人目につきにくいくらいで。『ゴキブリみたいにカサコソ逃げまわりやがつて。……特にこっちがこういう気分の時は、ブチ切れそなくらい腹が立つてくんだよな』

遠金は上履きのまま、校庭へと出た。いきなり大声をあげて、走りだした。

「クマ、てめえ、ブチ殺すぞ！」

風子は漫画のような大きな動作でびっくりと跳ね起きると、えらい剣幕で迫つてくるの遠金の姿にさらにびっくりして、手早く荷物をまとめる走り逃げ出した。

「なんか恵理香、無茶苦茶やつてるよ」

「でも面白そう。行こつ」

残る一人も楽しげな表情で後を追う。

風子はすぐに追いつかれてしまった。手ぶらの遠金に対し、風子

はバッグが揺れて思うように走れなかつたからだ。

ちょうど陸上用の砂場のところ。風子は後ろから体当たりを受け、倒れた。砂利が口の中に入つた。なにがなんだかわからない「うひ」と馬乗りにならっていた。

「てめえ、なんで逃げんだよ」

「だつて……お、追いかけて……くるから」

「誰が逃げていいつていつたよ。六月五日、木曜日の昼休みは遠金に追つかれられても逃げていいつて、誰に許可もらつたんだよ。許可も得ずに勝手なことする資格なんて、おめえにやねえんだよ」「す、すんません。もう、に、逃げませんから、勘弁してください」「許して欲しいか」

「は、はい」

風子は頷く。

「じゃ、一ついうこと聞け

「な……なんでしょう……」

遠金は風子の頬を力一杯つねつた。

「なんでしょうじゃねえよ。聞いてから判断しようなんて生意氣なんだよ。はい分かりましただろ」

「はい……わ……分かりました」

遠金は風子のバッグを勝手に開けた。

ケーキ作りの本が入つていた。投げ捨てた。弁当箱が入つていた。投げ捨てた。

もうなにも入つていない。

なんだよ。面白そうなものがあれば、それを材料にいじめてやうと思つたのに。例えば日記帳とか。つまんねえ奴、なにもねえじやねえか。

弁当箱を拾い、包みを開けた。こんなので足つるのか、と想つほど小さい弁当箱。

空箱に砂場の砂をぎっちり詰め、蓋をした。

「あ、お弁当箱だ、どんなお弁当なんだらう

蓋を開けた。

「わあ、美味しそうなお弁当。なんだ全然食べてないじゃん、こんなに残っちゃってるじゃん。もつじき昼休み終わっちゃうのに。佐久間さん、ちゃんと残さず食べなきゃ駄目なんだよ」遠金は弁当箱を風子の顔に近付けた。

「そ、それ、す、す、砂……」

「違うよ。美味しいご飯だよ。ゴキブリには上等すぎるくらいの。……ほら、早く食えよ。残したりしたら、貧しい国の人々に悪いだろ。食えってんだよ！」達子、舞子、抑えつけて！

風子は体全体を暴れさせ抵抗した。しかし三人がかりに太刀打ちできるはずもなく、むりやり口をこじあけられた。

「はい、いただきます」

遠金は砂をすくつて風子の口に入れようとした。

風子は無意識のうちに、手にした砂場の砂をつかみ、遠金の顔面目がけて投げつけていた。

悲鳴があがつた。

風子の身が軽くなる。今まで馬乗りになっていた遠金は、自分の顔をおさえてのたうちまわっている。口と目に風子の投げた砂を大量に浴びてしまつたのだ。

「そいつ、おさえとけ！ 砂が目に入つたあ、痛え。畜生！」

また一人にがっちりとつかまえられる。

遠金は目をこすりながら、ゆっくり立ち上がった。風子の腹を蹴飛ばした。まったく攻撃を予期していなかつた風子の柔らかな腹に遠金の踵はやすやすとめり込なた。

風子は突然の激痛に身を前に倒した。今度は側頭部を蹴飛ばされ、倒れた。

砂を投げつけられた。顔に当たるとかなり痛い。風子は腕で顔をかばつた。

がら空きになつた腹部にさらに蹴りが加えられた。

風子は吐き気がこみ上げてくるのを堪えた。

四つん這いになつた。

砂を投げつけられた。

髪の毛を引っ張られ、起しきされた。

びんたをくらつた。

「お前があたしに砂なんかを投げてくるから悪いんだよ。謝んな」
今度は反対の頬にびんたを食らつた。

「てめえ、なんだよ、その田つきば。『キブリのくせしやがつて』
またびんたを食らつた。

「まだその目つきやめねえのか。睨んでんじゃねえぞ、生意氣なん
だよ」

髪の毛をひっぱられ、頭を掴まれ、砂場の砂に顔を叩き付けられ
た。

何度も、何度も、起しきされては、叩き付けられた。

「謝れ、謝れよ、てめえ」

遠金の膝が、鈍い音とともに風子のお腹にめり込んだ。

「ボケが」

意識が遠のきかけた瞬間、みぞおちにもう一撃を受け、風子は完
全に意識を失つた。くにゅりと柔らかく曲がったかと思つと、顔か
ら砂場へと崩れた。

「ちょっとやり過ぎだよ、やっぱいよ恵理香。睨んでんじゃなくて、
気を失つてんだよ」

風子は砂場に顔をうずめたまま、動かなかつた。

遠金は立ち上がつた。

倒れて動きもしない風子にまた砂を投げつけた。つま先でお腹を
蹴飛ばした。

「みんなお前が悪いんだ！」

三人は去つていつた。

風子は頭がぼうつとじりしまって、それからのことはよく覚えていなかつた。

午後の授業はちゃんと受けたのだと思ひ。こや、ちやんとお受けにならないだらうが、席には座つていたと思ひ。

なんとなく記憶がある。

しかし、自分の体や顔が傷だらけ、服もぼろぼろだ。
ひりひり、ずきずき、じんじん、痛みをあらわす形容句が全て当てはある。

誰にもなにもいわれなかつたのだろうか。尋ねられたとして、自分がどんな切り返しをしたのだろうか。

風子は自宅の、自分の部屋にいる。

すっかり日が暮れています。

電灯はついておらず、部屋は真っ暗だ。
階段をのぼつてくる音。

ドアが開いた。

部屋の電気がつく。

母が立つていた。

「やつぱり。今、アルバイト先から電話があつたのよ。自転車があるから、もしかしたらと思って見に来てみたら。あんた、無断欠勤なんかしちゃ……風子、ねえ、どうしたの、その顔」

母は風子の傷だらけの顔を見て驚いた。

「なんでも……ないよ」

「なんでもないことないでしょ。制服だつて、ぼろぼろじゃないの」

「電話しなきや」

風子はようやく立ち上がつた。

階段を降りて居間に行くと、父が帰つてきていた。

「あなた、風子が……。風子、誰かにいじめられたんじゃないの」

「……なんだ、中学に続いてまたいじめられてんのか。悪いことしないんなら堂々としてつやついのこ、コンコンしてつからこじめ

られるんだよ。毅然と振る舞わないから、戦おうとしないから、余計にいじめられるんだよ」

お父さんは相変わらずなにも分かっちゃいないんだ。今のはゲームなんだ。悪いことしてないんだから、とか、堂々していればいじめられないとか、いじめられているほうも悪いんだ、とかそういうものではない。

小学校の頃に、誰かを標的にして次々に上に乗つかっていく遊び、というよりいじめが男子の間で流行った。山になつてているのを見ると、男子は次々とその上におおいかぶさつしていく。下から死にそうな悲鳴が聞こえてきても知つたこつちやない。あとから祭りに参加する者は、下に誰がいるのかも知らない。ただ楽しいだけ。標的とされた者がどんなに辛かろうと関係ない。要はそんなものだ。

風子はアルバイト先に電話をかけた。

もの凄くどもりながらの口調で謝っている。

父は冷たい視線で見ていく。

「なんだか中一の頃からがらりと変わってしまった、嫌だわ。……

家族以外とだと、あんな感じにじどうもじうになつちゃつて全然ろくな話も出来ないみたいだし。アルバイト始めるつていうから、よくなると思つていたのに、ちつともだし」

「それまで苦難に会わずに過ごしてきていたつてことだ。おれたちが甘やかして育ててしまつたつてことだよ」

父親は電話を終えて一階に上がりしていく風子を見ている。

風子も立ち止まり、一人を見た。

娘に全ての原因があると思つてている父親。実の娘をなんだか気持ち悪いと思っている母親。

一度だって、なにが起きているのか、娘がどんなのか問いつめてきたことなんかないくせに。

心配なんかしていないくせに。

実情を知らないくせに、一般常識と根性論だけで父親ぶるな。偏見や世間体に凝り固まっているだけのくせに、心配しているふりを

して母親ぶるな。

風子は階段を上り自室に入った。

部屋の鍵をしめる。

心臓の音。

不安。

怒り。

動搖。

両手で机の上のものを全部払いのける。ガチャガチャと音がして、床の上にどんどん物が落ちていく。

虚脱感。

電気をつけた。

自分で散らかしたばかりのものを片付け始める。
あの写真立てが裏返しになって床に落ちている。拾う。なにか紙
がはさまっているのに気づく。

取り出してみる。

思い出した……

手紙だった。

未来の私へ

私はこれから死にます。

絶対にないと思うけど奇跡的に助かってしまって、生きたいと思つてしまつて……

そんな時のために自分に手紙を残して置きたいと思つります。
どんな死に方をしようとしたのかは、

今の段階で分かるはずがないけど、

もしも死に切れなかつたら、

とても痛く、辛く、惨めな気持ちになつたことかと思います。
死ぬ勇氣もないんだ。私は私のことを見損なうと思います。
死ねなかつたのならしじょうがない。生きていくしかないよね。
なら、探してみたら。

生き方。

無理ないポジション。

過去の手紙、過去の自分にちょっとした怒りを覚えた。悲観しているようで、どこか未来を信じている。

未来の自分、つまり今の自分に勝手に物事を託している。

そう……

死ねなかつたのだ。

いや……怖気づいて、はなから死ぬ気きなかつたのだ。

中学一年のある日、風子は山奥にある崖に行つた。そこから飛び降りて死ぬつもりだつた。

しかし選んだのは確実に死ねるような険しい崖ではなく、六、七メートル程度の、しかも草木がクツショーンになつてゐるようなところ。それでも大怪我は負つたが、死ぬにはほど遠く、腕と足を骨折しただけだつた。全く身動きの取れないでいるところを、翌々日に発見され、救助された。

両親にはさんざん叱られた。

大怪我によつて、暴力的ないじめは減つた。しかし陰湿ないじめはなおも続いた。

風子は本当の自分を見失つたまま、どんどん自分の殻に閉じこもつていく。どんどん性格が卑屈になつていく。でも、そのどこが悪い。誰だつていじめられたくなんかないんだ。痛いのなんか嫌なんだ。

風子は手紙を破ろうとした。しかし結局破ることが出来ずに机の引き出しにしまつた。

勢いよくベッドに倒れ込む。

布団を頭からかぶつた。

近藤悠子は空を見上げた。

まるでポスターカラーで塗つたかのよつたな混じり気のない青い空だったのが、急速にどんよりと曇つてきた。強烈な初夏の日差しにじりじりと照りつけられて辛かつたのが、おかげで少し楽になつた。建物の構造上、外よりも風が強く吹くため、太陽が隠れてしまふとそれまでにかいた自分の汗のせいでのひんやりと涼しくなる。曇つてきたとはいっても、今朝発表された気象庁の予報によると降水確率十パーセント、にわか雨にでも降られない限り試合観戦には問題ないだろう。

近藤悠子は光沢のあるオレンジの服を着ている。胸には青く大きな字で、HAZUMIと書かれている。

ここは、華鳴市立鳥ノ山陸上競技場。JFLに所属するサッカークラブ、ハズミSCのメインスタジアムだ。

悠子は去年から何度もここに足を運んでいる。

収容人数一千五百人。陸上競技兼用のこじんまりとしたスタジアムだ。座席は長椅子を並べただけの簡単な作り。陸上トラックの中に、芝の生えたサッカー用のグラウンドがある。そういうと、選手の姿が非常に小さくて観戦しにくしそうだが、実際は陸上トラックの幅がかなり狭く、その他余分なスペースもほとんどない競技場なので、かなり視界に大きく選手の姿を捉えることができる。

今日は六月二十一日。これからこの場所で、JFL前期第十六節、ハズミSC対FC島根の試合が行われる。

ピッチ上では両チームの選手たちがウォーミングアップメニューをこなしている。

素早く股上げをしながら、短い距離を行つたり来たり。

コーチが次々と蹴るボールを、ゴールキーパーが起きあがつては

キヤッチをしている。

選手がペアになり向き合つて、相方の投げたボールを頭や足で返す。相方はそれをキヤッチしてはまた投げる。

ゴール前に沢山のボールを並べ、シユートを枠に蹴り込む練習。体を一定方向に保ちながら、膝を高く上げて斜めに縦横にと動き回る。続いて、膝をあまり上げずに同じことを行う。

等々、それぞれのチームのウォーミングアップメニューが進行していく。

両チームのサポーターが太鼓の音に合わせ、選手の名を次々と叫んでいる。呼ばれた選手は手を上げて応えている。

やがてスタメン組はピッチを去つて、控え室へと引き上げて行く。リザーブの選手だけが残り、ボールの奪い合いなど簡単なゲームを行つてている。

華鳴市や野々市市は、周りを高い山に取り囲まれている盆地帯だ。遠くを囲む緑の山々は、とても涼しげに見える。しかし実際はフエーン現象や、その他の地形的な理由のために、夏はかなり暑い。そして冬は時すら凍りつきそうなほどに寒い。

真冬にはこの山々はすっぽりと白いベールに覆い隠される。周囲に高い建物がないため、観客席に座つていながらも、非常に素晴らしい眺めを楽しむことができる。景観に関しては日本の中屈指の競技場との評価を得ている。そして、サッカークラブのホームスタジアムとしては文句なしの日本一との評価だ。残念ながら日本一は雪に覆われた冬だけの話であるが、しかし四季を問わず見事な眺めであることに違ひはない。

近藤悠子はウォーミングアップをする選手や、声援を送るサポーターの熱い表情、取り囲む風景などを一通り撮影し終えると、まだ試合開始前だというのに、カメラ一式を片付けてしまった。一眼レフタイプの、大きなデジタルカメラだ。本体は型落ち品をインターネット通販で購入したもので、安価に手に入れられたのだが、別途購入したレンズセットが高価だった。画素数はそれほど多くないが、

CCDが大きいため画素数だけが売りの最近のコンパクトデジタルカメラよりも圧倒的に綺麗な写真撮影が可能だ。去年、親から借金して購入したもので、現在も細々と返済中である。

将来は、自分で撮影も記事も担当するスポーツ雑誌記者になりたいと考えている。

視界がちょっとかすんできた。眼鏡のフレームを指でつまんで、角度の微調整をする。どうもまた視力が落ちたようだ。微妙ながら眼鏡の度が合わないようで、ここ最近疲れ目が酷い。最近のデジタルカメラには液晶ディスプレイが当然のように付いているので、撮影時に眼鏡が邪魔にならなくて便利だ。

悠子は视力は悪いものの本を読むより体を動かすほうが好きな性格で、得手不得手は別としてどんなスポーツをするのも好き。でも運動部には入っていないので、体育の授業くらいしかスポーツに接する機会がない。だからサッカーは一度もやったことがない。

ここに通うようになつたきっかけは、前述した通り撮影もこなす記者を目指しているということと、近場で行われているスポーツ競技がこじくらいうしなかつたというだけの話だ。

初めはスポーツ競技撮影の腕を磨くことだけが目的だつたのだが、スタジアムに何度も足を運び、JFL昇格へ爆進していくチームとサポーターの作る熱気に触れていくうちに、すっかり自分自身もサポーターになつてしまつた。現在は、試合中は応援に集中したいので、練習風景くらいしか撮影しなくなつた。しかしそれでは撮影の腕を磨けないので、月に三、四回、隣の県にある大型運動場まで通つて、別のスポーツを撮影している。

やがてピッチ上にはリザーブの選手もいなくなつたが、それでも両チームのサポーターは太鼓の音に合わせて大きな声援を送り続けている。

Jリーグのクラブと違つてJFLは凝つた選手コードは少なく、たいていどのチームも似たような拍子で選手の名を叫んでいる。そんな中で、ハズミSCの選手コードは異色中の異色である。登録選

手全員に個別のコールがあるのだ。まだ社会人リーグの頃、熱心な応援団員が一人おり、いつしか選手が新加入するとすぐにコールを作るようになつていった。JFLに昇格した際にサポート活動は一般人主導となつたが、この伝統は受け継がれている。今年加入了ばかりの選手、しかもまだ一試合も出場していない選手にも応援コールがあるのだ。現在の応援団長の個人ホームページに行つてみると、少し淋しくて滑稽な雰囲気を感じなくもないが彼が一人で吹き込んだ選手別コールの音声ファイルを聞くことが可能である。

周囲の壁やフェンスには、選手を応援する横断幕がびっしりと張られている。この、田舎町の小さな競技場には、メインスタンド側にしか座席がなく、そこだけではとても張り切れない。社会人リーグなら良いが、JFLでこれはいけない。横断幕を張る場所がないなど、相手サポーターにも申し訳ない。と、今年の開幕前に、ハズミSCのサポーターが市に掛け合い、既存設備を傷つけない範囲で両チームの横断幕を張る許可を貰つたのだ。

ピッチの周囲は陸上のトラックで、そこには地元企業の看板広告が等間隔で並んでいる。

悠子はあらためて、観客席をざつと見回す。収容人数二千五百人のスタジアムだが、今日は四百人といったところか。座る席、態度、服装で分かるが、ほとんど全員がハズミSCのサポーターだ。相手サポーターは二十人程度のようだ。ハズミSCのサポーターは最近いつも四百から五百人くらいで、観客席の埋まり具合は対戦相手に左右される。少ない日には今日のようだが、多い時にはハズミSCのサポーター数を遙かに上回る人数が集まることがある。JFLは地域密着型ばかりではないので、ホームスタジアムよりアウエイの方がサポーターが集まるようなケースも起こり得る。遙か遠くであるはずの九州某人気チームとの対戦時など、どちらのホームゲームなのだか分からぬくらいだ。

「お待たせしました、これより審判、そして選手の入場です」

若い女性のアナウンス。スピーカーの質も悪ければ、女性の滑舌

も悪く、まるで小中学校で放送委員の女子生徒が下校アナウンスをしているかのようだ。「しんぱん」が「しゅんぱん」に聞こえる。

両チームの選手たちが隣同士並んで順々に出てきた。観客席からは、メインスタンド側であるため選手の背中しか見えない。選手達はピッチに入るとすぐに左右に分かれて広がっていく。選手全員がメインスタンドの方を向き、それぞれのサポーターに向けて両手を高く上げた。

サポーターの叫び声と、どんどんどんどんという太鼓の音の相乗効果でスタンドが大爆発する。

場内放送で選手紹介が始まつたが、実に酷いアナウンスであつた。分からなければ事前にルビくらい振つておけばいいものを、あまりに読み間違いが多すぎる。最近いつもこの女性だ。悠子がここに通うようになった頃の担当は辞めてしまったのだろうか。以前の女性の喋り方は、全く記憶に残っていない。黒子として無難に職務をこなしていたということなのだろう。今の担当は、声からして高校生か大学生のアルバイトなのだろう。それにしても、相手チームの名前を読み間違うだけならばアウエイチームへの洗礼とも考えられるが、ホームとして隔週でこのスタジアムで試合をしているハズミSCの選手の名前ばかり間違っているのはどういうわけだ。

一度ピッチ上に散らばつた選手達が再び集まり、それぞれ円陣を組んで声をかけあつた。そしてまたそれぞれのポジションに付く。センターサークルの真ん中に、オレンジのユニフォームが二人。ハズミSCのツートップ、轟佑司と有村耕平だ。有村は足下に置かれたボールを軽く踏みつけている。

どんよりと曇つた空の下、選手、そしてサポーターが試合開始の笛を待つ。

そして今、主審の笛が鳴つた。

ハズミSCボールによるキックオフだ。

有村が後ろにボールを戻す。バスを受けたMF田中英一に、FC島根の九番が予想以上の素早いプレスをかけて来た。田中は少し慌

ててしまい、適当にボールを蹴ることしか出来なかつた。ボールは迫り来る九番の胸に当たり、大きくコースが変わり、タッチを割つた。運が良かつた。ハズミソのスローラインだ。

悠子は試合開始直後から、大声で叫びっぱなしだ。どちらかといえば地声は低いほうなのだが、裏返つてやたらと甲高い。

田中英二が再びボールを持つ。彼は今年から加入了した、元Jリーガーだ。さつそく一人に詰められるが、田中は軽やかなボール捌きでフェイントをかけ、相手の股下を抜くボールを出した。自分も相手を避けてボールに向かおうとしたところ、対応できなかつたFC島根の十四番に足を引っかけられ、転ばされた。

主審が笛を吹かずにプレー継続させたことに、ハズミサポーターから激しいブーイング。

「うちの十番になにすんだよ！」

悠子も親指を下に立てた手を、前に突き出して叫んだ。

今日の観客のほとんどを占めるハズミソのサポーター、彼等は自分の応援でチームに初得点を、初勝利を呼び込んでやろうと必死で声を張り上げている。

メインスタンドの、ピッチに向かつて右寄りがホーム側の応援席である。コーナーリーダーや太鼓持ちなどのいる応援団を中心として、サポーターが密集している。悠子はそんな中の中、最前列に座つている。自然と声の大きくなるのも道理である。

ピンチを迎えたFC島根が慌ててボールを外に出した。ボールは高く上がつて、スタンドに飛び込んだ。右端の、周囲にほとんど誰もいない席でゆつたり観戦をしていた青年が、ボールをピッチに投げ返した。

ちょうどその青年と自分との中間にどことなく風変わりな少女の姿があつた。

なんだか、えらくダサイ服装だなあ。

長めのジーンズスカートに緑のTシャツ。それぞれ単体だけで見れば彼女に似合わぬもないのだが、上下があまりにもかみ合わない

さすがに。それに今頃ジーンズのロングスカートもない。

なにより凄いと思わせるのは、腰まで伸びた髪の毛だ。とても髪型と呼べるようなものではなく、切らずにいたところなんらかの形状を取りましたという感じ。なんだか強風に髪の毛がばたばた激しくなびいていて、吹き飛ばされそうで、見ていたらはらする。後髪を縛つて纏めているのは風対策のつもりなのかも知れないが、悲しいことになんの対策にもなっていない。前髪も風に煽られ弄ばれている。自分の髪の毛にいじめられているようで、痛々しいがそういう髪型を選んだ少女の自業自得というなのだ。

ほんと変わった娘だな。……あれ……なんだかあの顔、見た覚えがあるぞ。

眼鏡を微妙に動かしてみるもの、ピントがうまく合わない。

ああ、イライラする。今度、眼鏡を買い換えよ。

悠子は試合に注意を戻した。ちょうどFC島根の選手が放ったロングショートがハズミレジゴールに突き刺さるところだった。

悠子はがつくりと首をうなだれ、長い溜め息をついた。

その後、ハズミレはさらに追加点を許し、○一二で負けた。

今節も初勝利どころか初得点もかなわなかつた。

悠子が先ほど奇妙な少女の名を思い出したのは、帰宅途中の電車の中だつた。
偶然同じ車両に乗り合わせたのだ。

悠子の記憶にある髪型と全く違うので気付かなかつた。でも顔はよく覚えている。この距離だ、見間違えようがない。

そういえば中一の途中から髪を伸ばしてたつけ。そうだ、卒業式のときもあんなだった。

ほとんど乗客のいない車両。一人は車両の端と端だ。少女はドアにもたれるようにして立つていて。

悠子は座席に腰を降ろしていたが、少女の正体について確信を持つと、立ち上がつた。揺れる電車の中、吊革に掴まりながら、ゆつ

くつと少女に近寄つていぐ。

「佐久間さん？」

その声に少女はびくつと反応した。誰かが近づいてくることに気が付いてはいたものの急に声をかけられてびっくりしたという様子だ。少女は悠子のほうを向いた。

「近藤……さん」

少女は小さく口を動かした。

「ああ、やつぱり！ 佐久間さんだつたか」

少女、佐久間風子は反射的に逃げだそうときびすを返した。その瞬間、電車がカーブにさしかかつて大きく揺れた。少女は咄嗟に手すりにしがみつき、倒れそうになる体をなんとか支えた。

「大丈夫？ ……久しぶりだね。佐久間さんはほとんど話したことなかつたけどさあ、中一中二つでいつも敦子と一緒にいたから、よく覚えているよ」

悠子と阿尾敦子は小学五年の頃からの友人だった。しかし中学生になつてクラスが分かれ、それぞれにクラス内の友達ができたことにより、あまり親密でなくなつていつた。

「敦子ね、あたし風ちゃんに酷いことしちゃつた、つて口癖のようにいつもいつて、ずっと悔やんでいたよ。なにがあつたのかは知らないけど、それだけは伝えておくね。……せつかくこうして会つたんだから」

風子は悠子の両肩を掴んだ。その手はかすかに震えている。

「敦子から……なにを聞いたの？ ……どじまでも……知つているの？」

風子は弱々しく体を震わせながらも、恐ろしい形相で悠子の顔を睨み付けていた。いや、それは悠子を通り越して遙か遠く、遙か過去を見ているような視線だつた。

「だから詳しいことは全然知らないつてば。……それより、痛いよ」「い、ごめんなさい」

小さく万歳するように、慌てて肩から手を離す。

我に返つた風子は、もつすっかりおどおどしたいつもの状態に戻っていた。

電車が駅に停車して、何人かが降りる。車両には近藤悠子と佐久間風子の二人きりになつた。

悠子は腰を降ろした。

「佐久間さんも座つたら」

風子は促されるまま、悠子の隣に座つた。

「あのさ、佐久間さん、さつきサッカーの試合観てたでしょ」

風子は黙つている。やがて小さく頷いた。

ぼさぼさ髪の間から見える風子の目には、疑問符が浮かんでいることに気付いた悠子はバッグからHANESのレプリカユニフォームを取り出してみせた。

「東北社会人リーグの頃からのハズミサポ。といつても、一年くらい前からの新参者だけね。……試合場でさ、なんかあの娘見たことあるような気がするなーって思つてたら、やつぱりだつたんで、ほんとびっくりしちやつたよ。なに? 佐久間さんもサポなの?」

「サポつて?」

「サポーター。応援する人だよ」

そういうえば、インターネット掲示板で何度も同じにしてる言葉だ。

「どう……なんだろ?」

風子は自問する。

あらためてそんな質問をされると、そもそもなんでスタジアムまで足を運んで試合観戦をしているのかも分からなくなつてくる。

「試合観戦初めて?」

「三回目」

「サポだねえ、それはもう立派な。たとえ最初は他の目的で来てようど、何度も観に行つているうちにサポになっちゃうもんだよ。あたしがそのいい例だよ。あれじゃない、応援歌ももう頭に入つてんじゃないの。これ分かる? 決める~ オ~レ~」

「轟」

風子はうつむいたまま表情一つ変えずにぼそぼそと呟く。

「素晴らしい、正解つ。でも、こつ返さなきや。決めつ オーレー つていわれたらね、どどひへわわへづへじへ ビジビン ゆ・う・じつ…」

思わず絶叫してしまい、ついあたりをきよらきよる。自分達一人以外に誰もいないことにほっとし、一人でけらけらと笑っている。

「あの……そのコニフォームつて、ビービード……売つているの?」「ハズミの公式HP見たことある?」

風子は頷いた。

「そこの一一番下から、グッズ販売のページに行けるよ。今年のホーム開幕戦の時にはスタジアムでも販売していてね、あたしはその時に今年のコニーとタオルマフラーを買つたんだ。あの日は無料チケット配つて、一千人くらい集まつたなあ。ボロ負けしたけど。宣伝効果もむなしく客足は遠のくばかりだけどね、こつ弱くひや」

「そなんだ」

風子はそういうたきり、うつむいて黙つている。話振るだけ振つて、全然興味ないのかしら、と悠子は不思議がる。

悠子は別にお喋りではない。中学時代の同窓生と会つて黙つているのもためらわれたし、風子がほとんど口を開かないので、間をもたせるためには自分が喋るしかなかつたのだ。とはいつもの、会つて話は尽きぬという間柄ではないし、いつしか悠子も話題がなくなってきた。でも、風子との間の取り方が分かつて來たので、悠子は無理に喋るのをやめた。

「じとん じとん がたん」と、電車の走る音だけが聞こえてくる。
「じとん じとん じとん。

揺りているうちに、悠子にちよつとした疑問がわき、また口を開いた。

「ねえ、佐久間さんて、確か野々部商に進んだんだっけ」
風子は頷いた。

「公立とか商業高校つていうと地味なイメージあるけどさあ、あそ

この女子の制服つて深緑のブレザーに赤いチェックのスカートで可愛いんだよね。あたしは華鳴北第一だから、すうごい地味で参っちゃう

「う」

私立華鳴北第一高等学校。確か敦子と同じ高校……

「あ、あの……」「こん、近藤……さん、は……ほ、ほ、本当に……あ、敦子から……な、なにも、きき、聞いて……」

いきなり風子のどもりが酷くなつた。聞きとるだけで一苦労だ。「なんかそんないわれかたされると、なにがあつたのか興味持つちやうなあ。……『冗談。安心して。なにも聞いてないよ』

風子はほつとするべきなのかどうか、気持ちのコントロールが出来ずに悲しそうな顔で息を荒らげている。

「敦子とは中学の時はほとんど話さなかつた。あの娘は佐久間さんたちと、あたしはまた別の友達と一緒にいるようになつたから。でも高校が同じだつたんで、また一緒に通学するようになつたんだよ。中学の時の話になると、佐久間さんに悪いことしたつて話ばかりで。本当に辛そうな顔してた。さつきもいつたけど、詳しいことはなにも聞いてないから。……もう、聞きたくても聞くことも出来ないし」

「それ、どういう……」

風子のぼさぼさ髪の奥に輝く眼光に、悠子は耐えられず、ゆっくり大きく呼吸をした。

「会つた時から、いうべきかどうか、ずっと迷つていたんだけど、やつぱりいわない訳にはいかないか。……彼女ね、先月に亡くなつたよ。交通事故」

風子の反応を確かめるのが悪いような気がして、悠子は窓の向こうに視線をやつた。果てなく広がる田園風景が横に流れしていく。少しの間をおいて、悠子は続ける。

「見ず知らずの幼稚園の子を突き飛ばして助けて、自分は暴走トラックに跳ねられて……ほとんど即死だつたって」

「ばん。と、隣でなにかを殴る音。その音が一度、二度と続き、悠

子は思わず風子を見た。風子は膝の上に置いた自分のバッグを叩いていた。右手を高く振り上げては振り下ろし、左手を高く上げては振り下ろし。なにから逃れようとしているかのように、一心不乱に。

悠子はそれをただ黙つて見ていることしか出来なかつた。

2

「佐久間、お前どこの部活にも入つとらんよな」

風子は黙つて頷いた。

放課後の職員室だ。部活動の件で担任教師に呼び付けられたのだ。「お前の口は飾りもんか。口が付いとんならきちんと返事をせんか。もつさりした髪をしおつて。ええとだな、知つとるだらうが決まりではみんな部活に入ることになつていて。もう七月だぞ。分かるか? 部活選びの猶予期間はとっくに過ぎとるんだ。早くどこか決めろ、なんでもいい。どこでもいいからどうか入れ。決まりを守らんやつがあると、迷惑だ」

風子は黙つて下を向いているが、心の中で激しく拒絶をしていた。意地で毎日学校に通つてはいるものの、こんな学校に一秒だつていたくない。なのになんだつて部活動になど参加しなければならないのか。授業が終わつたらさつさと下校して、ケーキ屋でアルバイトをしていたほうがよほど社会のため自分の将来のためだ。

ケーキ屋の仕事のようにただ黙々と手を動かしているだけでいい部活でもあればまだしもだが、風子はなるべく他人との「ミニユーチューボン」が発生するような場にはいたくない。

真剣に部活を探すふりだけして、なるべく引き延ばそう。最悪でも、幽霊部員でいても文句の出ないような、雰囲気の緩そうなところにでも入ろう。自分のクラスには部活に行かずに帰つてしまふ者などたくさんいるのだし、どうにでもなるだろう。

とりあえず、善処しますと職員室を逃れたはよいが、いずれにしても面倒事が増えたのには違ひない。

いつも以上に憂鬱な気分で学校を後にした。

そういう気の持ちようが余計に不幸を呼び込んでしまうのだろうか。……自転車でアルバイト先のケー・キ屋に向かう途中、繁華街を徐行していると、真横から容赦なく蹴り付けられ風子は一瞬の空中遊泳をし、地面に叩き付けられた。

「おい」

遠金恵理香の声だつた。

佐久間良信は駅周辺の繁華街にあるスポーツ用具店で筋肉痛用のスプレー缶と軟式野球ボールを三つばかり購入した。

歩きながら、買つたばかりのボールを一つ、上に高く放り投げてはキャッチを繰り返している。

良信は野球部員だ。まだ中一なので、球拾いと筋肉トレーニングだけで、キャッチボールすらやらせて貰えない。部活終了後に一年生の仲間と勝手にキャッチボールをしていたところ、先輩に熱心さを褒められたので、翌日も同じようにしていたら、別の先輩にこつぴどく怒られ、空氣椅子三十分の体罰を与えられたことがある。そのように、先輩達の気分や価値観の違いにより酷い目に遭うので、一年生はみなしでも先輩に怒られる可能性のあることは決してしないように気をつけている。いついかなる曜日時間であろうと、校庭ではキャッチボールをしないようにしている。

最近良信は自宅前で友人とキャッチボールをすることが多い。

別に野球ボールを買ったからといって野球が上手になるわけではないが、新しい道具を持つのは嬉しいものである。なんだか上達した気分になつてくる。本屋で受験参考書を選んでいると賢くなつた気がするようなものだ。

良信の耳に届いてきた声が、ささやかな幸せに舞い上がった気分を、急転直下で地面に墜落させた。

「おい、クマ、黙つてんじやねえぞ！」

怒声。人混みの向こうで、姉が不良っぽい女子高生三人に取り囲

まれていた。三人とも姉と同じ制服を着ている。

またいじめられるよ……

気持ちがげんなりしていく。

姉には、絶対に親にいわないでつて口止めされている。しかし姉はいじめに立ち向かわずに黙っているだけなのだ、自分で解決する気がさらさらないのなら、せめて他人に頼れよ、他人を利用しろよ、といいたい。

姉は倒れた自転車の横に自分も転がつて、上半身を起こしている状態だ。どうせ自転車に乗っているところを蹴倒されたのだろう。「てめえ、あの時のこと、誰にも喋っちゃいねえだろうな」

良信は想像する。先日、ボロ雑巾のように服が破れ、痣だらけになつて帰つてきた時のことだろうか。

「……だ、誰にも……いつてない

「いつてないですだろ、何様のつもりだよお前。クラスの『ゴキブリのくせしやがつて。氣色悪い顔しやがつてボケ』

「すす、すんません。い、いつて……ないです」

この、最低のバカ姉貴！『ゴキブリ以下だ！』良信は思わず手にしていたボールを投げていた。姉の胸ぐらを掴んで引っ張り起こそうとしていたリーダー格の女子生徒の左頬に直撃。軟球だから威力はたかが知れているけれど、ビシリと鋭い音と同時に少女は身を仰げ反らせた。

お見事。と良信は心のなかで自分を褒めたが、実は単なる偶然だ。良信はあまり投球コントロールのよいほうではない。ついカツときてしまい、姉や通行人に当たつても構わない気持ちで思い切り投げたら運良く命中しただけだ。

「このクソガキ、なにしやがんだ！」

少女が左頬をおさえ、怒鳴つた。

「うるせー、ババア。バーカ。アホ。一家全員大デベソ」

良信はきびすを返し、自分の尻を叩くと、走つて逃げ出した。台詞といい仕草といい、まるで大昔の漫画だが効果は覗面だったよう

で、

「テツペん來た！」

少女もこれまた古い台詞を叫んで、少年を追つて走り出した。連れの二人が慌てて後を追つ。

一人残された佐久間良信の姉は、道に転がり落ちているボールを拾つと、両手で握りしめた。

午後九時半。アルバイトを終えて帰宅した佐久間風子は、一階にある弟の部屋に行き、ボールを返した。

「姉ちゃんさあ、高校に行つてもまだいじめられてたのかよ。まつたくだらしねえよな。しつかりしてくれよ。学校だけならまだしも、街中でまでいじめられてみつともねえつたらないよ」

「そんなこといわれても……。お姉ちゃん、これでも頑張ってるんだから」

「どこが。さつきの駅前のことしか見てないけど、でも分かるよ、全然頑張ってねえよ。嵐が過ぎるの待ってるだけじゃん。「ゴキブリとかいわれてつけど、「ゴキブリのほうがずっとマシだよ。……そりや、必死で痛みに耐えているつてことでは、頑張つてんのかも知れない、辛いかも知れないと、それだけじゃんかよ。全然解決しようつて気がないじゃん」

そういう立場になつたことがないから、理屈だけで好き勝手なことがいえるんだよ！

と風子は思つたが、それを口に出すことは出来なかつた。唯一普通に接せられる存在を、つまらない喧嘩で失つてしまつのが怖かつた。

「「めんなさい。……もつと頑張つてみるから」

……だから見捨てないで下さい……

風子は謝ると、素早く良信の部屋を出て行つた。

弟の言葉は自分のためを思つてのものであることは分かる。しかし、理解してもらえない心のもやもやをどうしても取り扱うことが

出来なかつた。嫌われたくないから本当の思いも話せないなんて、既に弟とも本当の信頼関係なんてものはないのかも知れない。この数年で、全部自分が壊してしまつたのかも知れない。

人間嫌いのくせに、世界で一人きりの孤独感、未来へのどうしようもない絶望感を胸に抱いて風子は自室に戻る。

机の上に置いてある写真立ては相変わらず後ろを向いたままだ。その写真の中には楽しげに笑っている風子と阿尾敦子とがいるはずだ。しかしもう一人とも、この世にはいない。

敦子は交通事故で亡くなつた。

そして……笑顔の自分も、もうこの世のどこにもいない。

3

前節で、JFLは前期日程を全て終えた。なんとハズミSCは一勝どころか一得点も出来ず、というJFL史上かつてない最低の結果を残し、リーグ戦を折り返すこととなつた。

今日は七月六日、JFL後期第一節。ハズミSCは、ここ華鳴市立鳥ノ山陸上競技場で熱海エスター^テを迎える。熱海エスター^テは去年からJFLに参入したチームで、守備をかなぐり捨てて殴り合いでしかけてくるような攻撃型チームだ。前期では三勝しかしていないが、無得点だったことは一試合もない。しかし無失点で終えたこともほとんどない。前期の対戦では、○ 五でハズミSCは敗れているものの、一番得点のチャンスがあるカードには違いない。いまだ無得点のハズミSCに、ゴールという実績と今後に繋がる自信を与えるために、周囲の期待の大きくかかる一戦である。

佐久間風子はスタジアムを吹き抜ける風を全身に浴びていた。座席の一番後ろに通路があり、その手すりにもたれかかっている。全て自由席とはいえ、風子の座る席のあたりはいつもがらがらだから、別に試合開始までこうしていても席の確保には困らない。

ピッチ上でウォーミングアップをする選手たちを見ている。

今日も暑い日だけど、そよそよと当たる風が肌に心地よい。今日

は比較的風が弱い。

「ねえ、佐久間さんじゃない？」

声の方を向くと近藤悠子が近寄つて来るところだった。今日はコントакトをつけているのか、眼鏡はかけていない。

「ああ、やっぱり佐久間さんだつたか。この前とは、またまた変わつちゃつてんだもん、最初気付かなかつたよ」

風子は光沢のあるオレンジ色の服に、ジーンズといつ姿。胸には大きくHAZUMIと書かれている。そう、ハズミのレプリカユニフォームだ。しかし悠子のいう大きな変化とは、その点ではない。

風子の、腰まであつた髪の毛がすっかり短くなつていた。後ろ髪も短く首の地肌が完全に露出している。前髪は軽く横に流しておでこを見せている。

「うひやあ、よく見るともの凄いイメージチェンジだ。どんな心境の変化？」

「かか、風で……じゃ、邪魔、だつた……から」

喋り方やふせめがちな目線といった、おどおどした態度は相変わらずだ。それでもだいぶ垢抜けた感じがする。

「そういう伸びし始める前はずつとそんな髪型だつたよね。戻したんだ」

数秒の沈黙の後、風子は頷く。

望んで元に戻したわけではない。一年ぶりだというのに美容院の女性店員に顔を覚えられていており、「久しぶり、いつものでいいの？」と唐突にいわれて、どう返事をしていいものか分からずについ頷いてしまつたというだけだ。

「ここさあ、いつも風強いもんねえ。この前の風子ちゃん、飛ばされる髪の毛に引っ張られて自分自身が飛んで行きそつたよ」

いつの間にか呼び方が風子ちゃんになつている。

「ユニフォームも買ったんだね。似合つているよ。可愛いよ」

「か、可愛くなんか……ない」

「いやあ、そんなこたあないよお」

男の太い声が二人の鼓膜を震わせた。声の発信源の方を見れば赤ちゃんを抱いた中年男性、その隣には一回り近く年下に見える女性がいる。一人ともハズミスのレプリカユニフォームを着ている。

「なに？ 彼女サポーターでビューなのか？」

男は風子を手のひらでさす。モジヤモジヤと生やしたあごひげの中に顔が埋まっている。丸々太った熊のような大男だ。

「違うよおじさん、ユーフォームでビュー」

悠子は答えた。

「一人とも、高校生かい」

「うん」

悠子は頷く。

「家族が蓮見製菓の社員とか」

「違うよ。単なる一般サポ」

「へえ、いくら県リーグのチームがないからって、変わってんなあ。こんな可愛らしい娘が一人して、日曜の真っ昼間にJFL観戦かよ。でもまあ、ありがたいことだ、どんどん来てくれよな、友達でも誘つてさ。後援会員になつて前売り券買うつともつとお得だよ。残念ながらべっぴんさん割引はないけどね」

「なんかおじさん、営業の人みたい。……いくら褒めたつてなんにも出ないよー」

「おれも、まあ服装で分かる通り、サポッちやサポだけどね、蓮見製菓の社員なんだよ。ここみみたいに、近場で試合のある時には、こうして嫁とガキ連れて応援に来るんだよ」

「いつも見てもねえ、この人、一昨年までは現役の選手だったんですよお」

傍らで控えめにしていた妻が、軽く笑みを浮かべ、口を開いた。

「へえ、凄いな。あたし去年からのサポだから分からんだけど、どこのポジションだったの？」

悠子は興味しんしんだ。

「ボランチ」

「うつそお、そんな太つてんのに……あ、ごめんなさい」

悠子は慌てて口元を押さえた。

「あはは。こんな太つてたら、どこのポジションだってつとまりやしない。現役引退して太つたんだよ。もともとが太りやすい体质だから、動かなくなつたら途端にこのありさまさ」

男は自分のお腹を太鼓のように叩いて見せる。それが面白かったのか、抱きかかえられていた赤ちゃんが笑い出した。

「食事は、ダイエット食しか作っていらないんですけどねえ」

ため息混じりに、妻も彼のお腹を叩いた。

「あ、あの、ボ、ボラ……チということは……あ、あき、秋高……選手と……」

風子が激しくどもりながら、不意に会話に入ってきた。

「おれの晩年は、まだ若造だった奴とのダブルボランチだつた。まあいつはおれの背中を見て成長したようなもんだ」

男が偉そうに語る。

「なに、風子ちゃん、テツのファンなの？」

「ま……前に、駅前でバッグ盗まれたのを、と、取り戻してもらつた……」

「へえ、あいつらしいな。直情型だから」

「分かつた、それがきっかけでサポになつたんだ」

「べ、別に、サポじゃ……」

「どこからどう見てもサポ！」

男と悠子がまるで示し合わせたかのように口調を合わせ、風子のユニフォームを指さした。

「そうか、いわれてみればユニフォームまで着て観戦に来ていればサポーターと思われても仕方がない。風子はどうしてユニフォームを買ったのか、自分でもよく分からぬいでいる。着ている人が多いので、かえつて目立たなくなるだろう、と理由付けをしていたのだが、ではそもそもなんで毎回こんなところまで足を運んでいるのだ

る「う」という疑問にぶつかってしまう。

「ま、しっかり応援してやつてくれよ。あいつら単純だからさ、可愛い娘が応援してやりや頑張っちゃうよ」

「ずっと応援するよ。こに上がれるようにな」

「ところが、ハズミは」入りは目指してないんだな」

「え、そうなの？ でもこFして優勝すればこ2に上がれるんじゃないの？」

単純な戦国ペリカンシードを思い描いていた悠子には、衝撃的な事実だった。

「いや、どにも目指しているわけじゃ ない。こFには大学だつているし、Jリーグチームのアマチュアだつているし。なんといつてもこに上がるにはいろいろな条件をクリアしないといけないんだよ。きちんとしたスタジアムを持つていいか、きちんとしたチーム運営が出来るか。下手すりや大赤字を抱える羽目になる。蓮見製菓はハズミを名乗つたまま当面こFで企業宣伝していくことを選んだんだよ」

「なるほどねえ。そういうや、Jリーグのチームつて、愛称みたいなのに都市名等を組み合わせてチーム名にしているよね」

「そう。逆に、企業名を付けちゃ駄目なんだ。去年加入した熱海工スターも、今年加入したF C島根も、最初からこ入りを目指しているから地域の名を付けているわけさ。現状のいろんな損得を考えて、蓮見製菓は今のスタンスをとっている。ま、いつかこ入りを目指さないとも限らないってわけだ。といつても、このまま負け続ければ、入れ替え戦決定だけだ。もしそれにも負けでもしたら、また社会人リーグに逆戻りだ」

「まずいじやん。おじさん、社会人リーグ相手なんだからつて気を抜いてたら絶対やられるよ！ まずは入れ替え戦を回避しないと。それには得点だよ。だいたいさあ、なんでここまで点が入らないの？ 高校生がジョビロと練習試合やっても、たまには得点するよ」

「……なんでだらうなあ。ちょっとずつ形になつてきてはいるんだ

けど、負ける度に負け犬根性もどんどん膨らんできちまつていいからなあ。まぐれでも一点入れば、大きく変わるかも知れないけど。

「いや、まぐれでも何点か入るだろ、普通。おれも信じられないよ。……もうじき試合始まるな。じゃあ、おれはいつもの席で観戦すっから。じゃな。応援頑張ろ!」

男は階段を降りて行つた。妻は少女たちに会釈して、後を追つ。

「じゃあね、面白におひちゃん」

悠子は手を振つた。

拡声器を使ってコールリーダーが叫んでいる。

「きょ～こそ「オルを決めて勝つぜえ～！」

ドン ドン ドン

オーラー（とサポの叫び声）

「ああおひや、お得意様の名を返上するぜえ～～！」

ドン ドン ドン

オーラー！

オオオ～～～

ドドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！
ドドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！
ドドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！
ドドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！

オーラー！

紙吹雪が宙に舞つ。

風子と悠子も手にした紙くずを高く放り投げた。

さきほど応援団の者が手分けして配つていたのを受け取つたのだ。

「今日の応援はすつ～い気合いが入つてゐるなあ。なんかさあ、今田ひそ勝つちやいそうな気がしてきたぞお」

悠子は周囲を見回す。このムードで、なんだか気持ちが弾んでくる。

さきほど蓮見製菓社員を名乗る中年男がいつていたように、得点さえあげられればチーム浮上のきっかけになるかもしない。そして、この熱海エスター戦がもつとも得点出来る可能性のあるカードなのだ。みな、それをよく分かっているのだろう。

今日もフェンスには選手の横断幕がびっしりと張られている。

主審の笛が鳴った。

ハズミSCボールでキックオフだ。

有村耕平は自陣へボールを戻す。強く蹴り過ぎて、田中が受け損ねてしまう。走り寄つて来た熱海のFWは、そのまま駆け抜けボールを追う。田中が慌てて後を追う。DFの倉谷隆良が慌てて上がつてボールを受けたが、熱海のFWのプレッシャーに焦つて処理をもたつてしまい、そのままかっさらわれてゴールを決められてしまった。

試合開始後わずか十秒足らずだ。

熱海サポーターから激しい太鼓の音が上がった。

「なにやつてんのよ、もつ

悠子はぐにゅりとクラゲのように脱力して、風子の肩にもたれかかつた。

「な、何点取られたつて……一点……入れてくれれば……」

風子の咳き声はサポーターの声援にかき消されてしまう。密着していなかつたら悠子にも全く聞こえなかつただろう。

熱海ゴール前での混戦、熱海のクリアボールを拾つた秋高鉄一は、後ろから押し倒された。ペナルティエリアのすぐ近くという絶好の位置でハズミSCがFKを得た。

田中英二がボールをセットする。主審に位置をもつ少し下げるよう指示されている。

ゴール前では両チームの選手達が密集し、審判に注意されない程度にささやかな小競り合いが行われている。

「また、なんか目を閉じて咳いてるよ。ナベテル、なんていつてんだろ」

悠子はオペラグラスから目を離した。

「目には青葉……」

風子は咳いた。

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ハズミサポーターの大声援。ゴールチャンスの大きいにあるセットプレーの際には、必ずこのゴールが使われる。

悠子も合わせて大きな声で叫んでいる。

風子は小声で咳きながら、手拍子を送っている。

ゴール ハズミ ゴールゴール！

大声を出せない分だけ、心の中では誰よりも強くハズミのゴールを念じていた。

……あれ……これってサポーターなのかなあ。

主審の笛が鳴った。

田中英二が熱海ゴール前の集団の中へと、ボールを蹴り込んだ。熱海の選手にヘディングクリアされ、これまた待ち構えていた熱海の選手に拾われてしまつ。熱海の素早いカウンターに、ハズミの選手達は慌てて後を追う。陣形を整えることどころか攻撃を遅らせることが出来ないまま、熱海のたつた一人の選手にどんどんボールを運ばれていく。

それから風子と悠子の口からため息が漏れるまで十秒とかからなかつた。

試合終了。

結果は…… いまでもないだろう。

4

教室でのみんなの反応は、当然といえば当然だった。
はじめは別のクラスの女子生徒が間違つて入つて来たのかと思つた。

しかし、このうつむき加減といい、暗い表情といい、歩き方といい、この身に纏つたオーラには覚えがない、

生徒達の頭蓋骨内側にある灰色の物質を「しかし」「まさか」「でも」「やはり」と様々な電流が巡っている間に、女子生徒は佐久間風子の席に座ってしまったではないか。

教室が一斉にどよめいた。

「もしもーし、あなた教室間違つてませんか～。何組の生徒ですか

」

お調子者の高木栄介が、腰低く走り寄ってきた。

「い……」B

疑惑が確信に変わったことで、また一斉に教室がざわついた。
佐久間風子が、あの別の生き物が乗つかつているかのよつな長髪
をばつさりと切り落としたのだ。

「おい、ブー！」のやつ、あんな可愛い顔だつたのかよ

「別人じゃねえの」

「いや、確かにあんな顔だつたよ。今まで部分部分しか見えなかつたから、よく分からなかつたけど。しかし髪切るだけで変わるもんだな」

「ほんと。すっげえブスだと思つてたら全然。反対なんだもんな」
みな思い思いを口にしている。

「ブー、なんで髪切つたんだよ」

種田健太が訊く。

「……サツカー見るのに……邪魔……だつたから。……ほ、本当は
ちょっとだけ、短くするつもり……だつたんだけど……」

「なに、お前サツカー観戦すんの？ デニン？ 遠いべ。仙台か山形
だろ」

「……ハズミンシ」

「わお、蓮見製菓サツカー部かよ。お前、どえらいオタクな趣味してんないな」

種田は国内外問わずサツカー全般が好きで、近所のチームという

「」とでハズミウシも名は知っていた。

風子の態度は全くの普段通りなのだが、種田があれこれと聞いてくるので応じて「」のひさしに自然と会話が弾んでしまった。

放課後。風子は女子トイレの鏡に向かっている。なんとはなしに「ゆ」「う」「じつー」の手つきを練習してみる。

ハズミウシのFWである轟佑司の応援は、最後の「ゆ」「う」「じつ！」の部分で手と指を素早く動かす。近藤悠子によると、それをサポ全員で行うのがミソなのである。得点力不足を急に憂いはじめた悠子は、先日の試合後、風子に居残り練習をさせた。

風子はじつと鏡に映った自分の姿を見る。

今日一日のことを振り返る。みんなの態度を思い出すと、くすぐつたいような心地よさに全身が包まれる。

自分次第で他人の自分への態度は良くも悪くもなるのだ。
ゆっくりでいい。

変わつて行こう。

どうやら自分には、JFL観戦が自分を変える役に立つているみたいだ。なら、まずは近藤さんみたいに、しつかり応援できるようになろう。

変わつて行こう。

痛みを少しでも和らげるために。

少しでも、他人にとつて無害な存在となれるように。

苦痛の少ない人生を送れるように。

びしり。といきなり頬をひっぱたかれるような鋭い音と痛みが風子を襲つた。足下になにか落ちる。濡れ雑巾だ。女子トイレのドアに、遠金恵理香ら三人が立つていた。

「お前さ、調子こじてるだね」

遠金が近寄つてくる。

「……そんなこと」

「じゃ、なんだこれ。えらいオシャレじゃん」

遠金は風子の髪の毛を思い切り引っ張った。

「気分いいか？　でもおかげでわたしの気分は最悪だ。どうしてく
れんだよ」

風子のすぐ皿の前に遠金の顔があった。薄笑いを浮かべながらも、
皿を吊り上がらせて風子を睨み付けている。

「そんなこといわれても」

「日本語分かんねえのかてめえー。どうしてくれるって聞いてんだ
よ！」

風子は振り回され、壁にぶつかった。

「ムカツクんだよ、てめえ」

苦痛に顔を歪める風子の腕を引っ張り、個室の中へと突き飛ばし
た。風子はまた壁に叩き付けられる。遠金は風子の髪の毛をぎゅつ
と掴み、体重を乗せて引っ張り降ろし、無理矢理に風子を跪かせる。
風子はもがいて抵抗をするが、構わず和式便器の中に風子の頭を
突っ込んだ。

「汚えゴキブリを消毒してやるよ。ここでごベロでトイイレ掃除でも
しゃがれ！」

遠金は風子の頭をがつちり押さえつけながら、肘でレバーを押し
た。激しい勢いで吹き出す白い飛沫の中に、風子の頭は隠れてしま
つた。風子はなおも全力で逃げようとするが、後ろから谷澤達子と
矢野舞子に押さえられて動けない。

水の流れがおさまると、ようやく遠金は風子の髪の毛を掴んで引
っ張り上げた。

風子は思い切り息を吸い込んだ。そして激しく咽せた。「ごぶ」と
音をたてて水を吐き出した。

「ちつとも便器綺麗になつてねえじゃねえかよ、ぼけ。もう一回や
つぞ。……そうだ、その前に気付けにいいもんやるよ」

遠金はポケットからたばこを取り出し口にくわえると、ライター
で火をつけた。苦しそうな表情で大きく呼吸をしている風子の髪の
毛を掴んで持ち上げ、軽く開いた口にたばこをねじ込んだ。頭と頸

をがつちり押さえ、たばこを吐き出せないよう固定した。谷澤も楽しげな顔で、風子の鼻を摘んだ。

「お前にや上等すぎるしろもんだ」

風子の目が見開かれた。トイレに押しつけられていた苦しさから、たばこの煙を深く肺に吸い込んでしまったのだ。頬が爆発したように一瞬膨らんだ。口も鼻も押さえられているため煙の出口がなく、また吸い込んでしまう。激しく暴れだした風子は火事場のなんとやらで遠金の手を振り解いた。

風子は涙目で、四つん這いになり激しく咳込んでいた。体勢を変え、壁に背を預ける。やがて咳はおさまり、風子はぐつたりとした様子で動かなくなつた。表情も朦朧としている。

「たばこも吸えねえのかよ、だらしねえ奴」

遠金はそういうながら、また風子の開いた口に火のついたたばこを突っ込んだ。

「先生、こっちです！ 女子トイレです！」

女子生徒の叫び声。他のクラスの生徒が、風子へのいじめを目撃して、先生を呼びにいったのだろう。遠金は舌打ちした。

その叫びに、遠のきかけていた風子の意識が戻る。またたばこをくわえさせられていることに気付き、指で摘んで口から出した。

「入るぞ！」

中年男性の叫び声。体育担当の教師だ。

「お前ら、なにやつとんだ！」

遠金達三人が立っている。その奥、個室の中では頭がずぶぬれの風子が、壁にもたれかかり、うつろな目をしている。その手にはたばこが握られている。たばこの先端から煙が上つている。

「先生、佐久間さんがたばこをこつそり吸つてたんですね。いつてもやめないので、バケツの水をぶつかけてやりました」

遠金は、隅に置いてあるバケツにちらりと目をやつた。

風子の意識が完全に戻つた。慌てて、手にしていたたばこを便器の中に捨てた。じゅつ、と音がした。

「おい、佐久間、遠金のいつたこと、本当なのか」

風子は口を開きかけるが、脳がすっかり混乱して言葉が出てこない。

「いいたいことがあるならいえ。黙つていろつてことは、罪を認めるつてことだぞ。どうなんだ」

冷静になつてくるにつれ、たばこの件の言い分ではなく、「この体育教師への怒りがこみ上げてきた。普段の行動から人間を判断する能力がないのか。いつた者勝ちなら、上手に喋れない人間は常に悪か。

「おいお前、先生に向かつて、その睨むような目つきはなんだ。たばこ見つかって、反省するどころか居直る氣か。この馬鹿たれが！」

佐久間風子には五日間の停学処分が下された。

5

指令塔 21

田中英一（ハズミシキヤプテン MF）

蓮見製菓サッカー部がJFL昇格を決め、戦いの舞台が移るとともにチーム名もハズミシキと改称した。大幅な選手入れ替えはない。田中英一は数少ない新規加入選手の一人だ。今回の「指令塔」では、元Jリーガーである田中英一に人生をそしてJFLを語つてもらつた。

——月並みな質問で恐縮ですが、田中選手がサッカーを始めたきっかけを教えて下さい。

田中 よくあるパターンかも知れないので、小さな頃は野球少年だった。でも僕の場合、ここからがちょっと違うんだね。あまり動

体視力が良くなくて、飛んで来るボールが怖かつた。野球ボールつて小さくてかたいからね。小学校3年、4年となつてくると、だんだんみんなスピードのある良いボールを投げるようになつてくる。そして、ついに恐れてたこと、ここ（右目）をぱちーんとやつてしまつた。別に脳にも視力にも、全く影響はなかつたけど、とにかく野球ボールが嫌になつて、それから野球には参加しなくなりました。でも体を動かすのは大好きなんですね。小学校の頃は猿と呼ばれていたくらい（笑）。ある日、校庭で同じ学年の子達がサッカーボールで遊んでて、仲間に入れて貰つたら結構面白くて。

—— で、すっかりサッカーにはまつてしまつたと。

田中 そう。田中英二伝説の始まりですよ。おれの生きる道はこれしかないぜ、って感じにすっかり夢中になつた。現金ですよね。

—— ボール恐怖症は、サッカーでは大丈夫だつたんですか？

田中 だつてサッカーボールなんて、野球ボールに比べりや柔らかいし、野球に慣れているとスピードもそんな出ないし、つて怖さは全く感じませんでしたね。ところが中三の時に、ここ（右目）をばちーんとやつてしまいまして、まあ痛いの痛くないのつて。サッカーボールを激しく舐めてた！ すまん、サッカーボール！ でも、恐怖症はもう克服してたんだろうね。痛かつたけど、平氣でプレー続けたよ。もう中三になつてたし、それに本当に好きなことをやつてるつて思いもあつたからだろ？ ね。そうだそうだ、思い出した、あの時、大好きな女の子が試合を見に来てたんだ。それで頑張つちやつたのかも。でもその女の子は、別のやつ旦當で来てたんだけど。

—— 高校サッカーでは大活躍でしたね。

田中　いや、あれはね、チームが僕を活かすサッカーをしてたつてだけの話。チームが調子よかつただけです。当時はそんなこと思いもせず、すっかり天狗になっていたけど。我いるが故に富一高あり、つて。

—— そして、Jリーガーになりましたね。失礼かも知れませんが、今の立場からその頃を振り返って如何ですか？

田中　別に失礼じゃないですよ。あの頃はねえ、僕の光であり闇なんですよねえ。ほら、知つていると思うけどトップの試合に一試合も出して貰つてないでしょ。まだ天狗みたいな高い鼻になつているままだつたから、こいつら馬鹿じやねえの、なんでオレを使わねえんだつて思つていた。でもいざサテに出して貰つたら、もう全然なの。鼻が縮んだというより、根元からナタかなんかでズバッと切り落とされたような感じ。高校で実績残したやつってさ、とりあえずどつかのプロチームに雇われはするものの、活躍出来るかどうかは全く別なんだよね。たとえばすんごい背の小さな選手がそうじやない。高校ではさ、ちょこまかとして、意外と通用したりするんだよね。でもJリーグでは、トップに全然出して貰えないうちに戦力外になつたりしている。だから逆にトップに出ているそういう選手つてのはすぐえなつて思いますね。生半可な努力や才能じやないつてことだもん。

—— そして、JFL選手になりました。

田中　そう。戦力外くらつてね。トライアウトにも参加したけど、誰の気も引かなかつたみたいね。結局選手同士のコネで、JFLチームを紹介してもらつた。別に仕事をしながらだけど、いいか？つて。いいわけねえよ。嫌だよ、働きながらなんて。才能だか努力

だかが足りなくて、どこにも雇つて貰えなかつたのに、練習時間もとれないんじや。でも、カミさんのお腹に二人目がいたし、無職つてのもやばいし。それで、契約した。ハズミと違つて市民クラブで、職場もコネで紹介して貰つたよ。働いて、夕方から練習して、帰つて寝て、起きて、働いて、練習して、その繰り返し。それで日曜は試合をして。辛くても、生活かかっているからやめられないし、サッカーから離れて職を探したほうが収入や将来性考えるといいのかもつて思つたけど、サッカーから離れることは自分からチャンス捨てちゃうつてことだし。と、さいの河原で石を積み続けなけりやらないような、えらいどんよりした気分になっちゃつて、精神科に行こうと思つたくらいだよ。でも病院に行く暇もない。時間配分が全く分からなくて、たまの休みも何していいのか分からぬ。でもだんだんとそんな生活にも慣れてきたけど。今では休みの日にはカミさんと子供と出かけたりしてる。この前、遊園地に行つてきましたよ。

―― そして今年から、ハズミの選手になりましたね。

田中 カミさんの実家にも近かつたし、JFL昇格したばかりのチームだから、より自分をアピール出来るんじやないか、自分が引つ張つていけるんじやないかと思つて。待遇もまあ以前より良かつたし、あ、こういうのって言つちゃヤバイすかね。でもまさか、ここまで点が取れないとは思わなかつた。去年までは外国人一人が点とつてただけみたいだから、今、チームは生まれ変わろうとしているんだと思う。個々の選手だけをみれば、ここまで勝てないような面子じゃない。チームの戦術がね、監督の言つてることは凄い理論が分かりやすいんだけど、実践するのが難しいのかも。浸透すればずつと強くなれると思う。外からの新しい血であるオレが、そういうところに貢献出来るんなら、ほんとのチームに来た甲斐があるつてもんだよね。

—— 最後にサポーターに何か一言をお願いします。

田中 これからもハズミ^{ハズミ}への応援をよろしくお願いします。みんなとても頑張っていますんで、一人でも多くのサポーターに来て頂いて僕らの勝利をアシストして貰いたいです。そして勝利の喜びをともに分かち合いたいです。はやく、得点出来るよう、みんなで一生懸命練習して行きます。多分、ファーストゴールは僕が決めるでしょう。

—— 今日は有り難うございました。

田中 いえいえ、いやいや。どうもお疲れさまでした。オレ、なに言つちゃってるか分かんないんで、しつかり編集をお願いしますね。

(5月8日 蓮見製菓野々部工場第一グラウンドにて)

6

風子は週刊蹴球を閉じた。蹴球はJリーグから少年サッカーまで、日本のあらゆるサッカーに焦点をあてていくマニアックな週刊誌だ。去年刊行したばかりだが、売れ行きがあまり芳しくなく、廃刊寸前と噂されている。

ここにはケーキ屋ノワゼットの奥にある畳敷きの休憩室。

休憩時間終了まで、あと二十分ある。

風子は立ち上がり、ドアを開けた。

「て、てんちょ……なにか……しましょうか」

「いや、いいんだよ。一時間しつかり休憩して、それからしつかり働いておくれ。しかし助かったよ、平日だっていうのにフルで入つてくれて。急に病欠が出ちゃったからね」

「ねえ店長、いま例の宅配業者から……れん……ら、らくが……」

メモを片手に、下平が入つて來た。風子の顔に氣付いた途端、突如顔が真っ赤になり、喋り方も非常にぎこちないものになつた。

「い、いち、いち……じ、じ、じかじかん……お、お、おお、おお、おく、おくれ……お……」

まるで風子だ。

「一時間遅れるんだね。了解」

下平は右手右足を同時に踏み出し、去つていつた。

最近、風子の顔を見るたびにこうだ。なんの冗談なのか、風子にはさっぱりわけが分からぬ。

「ねえサクちゃん、フルで入つてくれるのは有り難いんだけど、停学くらつたつて本当かい」

風子はためらいがちに頷いた。

「ま、サクちゃんのこと信じているけどね。友達を庇つたかなにかしたんだろう。……なにかを抱えてて辛いなら、相談にのるよ」

風子はしばらく無言だつた。去りかける店長の背中に、唐突に声を投げかけた。

「あの……て、店長は……に、人間……好きですか？」

「やぶからぼうに、しかも変な質問だなあ。……好きだよ。若い頃に私生活でも仕事でも、人に裏切られてこつぴどい目にあつて、すつかり人間不信になつてしまつたことはあるけどね。それどころか、なんで人間なんかに生まれてきてしまつたんだろうってノイローゼ気味になつてしまつたこともあるけどね。でも、いまは人間でよかつたつて思つている。……わたしだけの考え方かも知れないけど、人間を嫌いな人間にお店を経営する資格はないと思うんだ」

風子は若い頃の店長と同じだ。酷い目に遭つてすつかり人間嫌いになつてゐる。人間でよかつたなどと、これっぽっちも思えやしない。別の生き物ならばそんなに苦しむこともないのに。いや、そもそも生まれてこなければよかつたのに。でも、誰に頼んだわけではないが生まれてしまつたからには仕方がない、少しでも苦しまずにな

すむようにひつそりと生きてこきたい。

老婆の声が聞こえてきた。なにやら聞き覚えのある声だ。

「てんちよおー！」

滝川良枝の声に、店長は店へと出て行った。風子もその後に続いた。

カウンターの前に着物を来た老婆がいた。片手に紙袋を下げている。

「この前、このお店の一人の娘さんに、親切に道を教えて貰ったので、お礼にと思って。ケーキ屋さんにお菓子というのも妙かも知れないけど、でもどうかみんなさんで盛り上がって下さい。……あら、あなた……」

老婆は、店長の後ろにいる少女の存在に気付いた。

「あの時はどうもありがとう。……髪の毛切ったのね、とても可愛いいわ」

老婆はこっそり笑つた。

風子と店長は店の外に出て、老婆の立ち去るのを見送った。

老婆の姿が雑踏の中に消えた。

店長は店の中に戻つた。

風子は茫洋とした表情で、突つ立つていた。

我に返つた風子は、なんとなく空を見上げた。

風が吹いてきた。

蓮見製菓野々部工場第一グラウンド。

非常に見晴らしがよい。野々部市が三百六十度を小高い山々に囲まれた盆地であることがよく分かる。

このグラウンドはハズミンシがまだ蓮見製菓サッカー部だった頃から選手たちが練習用に使用している。

眺めも空氣も土の感触も良く、アマチュアチームとしては上等過ぎるほどのグラウンドだ。しかし晴れ続きの日限定だ。非常に水はけが悪く、少し雨が降ると一転して水たまりだらけの最悪なグラウンドへと変わる。関係者はなんとかしたいと思つていろいろなのだが、なにせ予算がない。

梅雨も終わり、ここ最近は運良く晴れが続き、非常に良好な状態が保たれている。

蓮見製菓の第一工場から、徒歩五分ほどの川沿いの場所にこのグラウンドはある。川沿いの道とグラウンドとの間に、十メートルほどの高い金網が張られ、ボールが川に飛び込まないよう対策している。それでも月に何個かは、ボールを川に流してしまつ。

せっかくの広大な敷地を無駄に遊ばせておいてもいいものかと部外者すらも思わず心配してしまつくらい、朝と晩は無人だ。耳をすませば悠久と流れる川のせせらぎと、敷地の向こうにある国道を通りのトラックの音が聞こえてくる程度で、田に見える動きどいつものが全くない。

いつも夕方の四時くらいになると、誰かがあらわれ、一人でボールを蹴つたり、ランニングをしたり。そうこうしているうちに、さらに一人、もう一人とやって来る。五時前には、仕事を抜けられない社員を抜かせば全員が揃う。カラーコーンやビブス、ボールの準備をし、グラウンドにラインを引き直し、など楽しげに大騒ぎし

ながら行つてはいるが、監督がひょっこりとあらわれて、そして本格的な練習がはじまるのである。

今日このグラウンドに一番にやつて来たのは与那嶺怜一だつた。通常は夜の七時か七時半には練習が終わる。その後、それぞれにストレッチなど肉体のアフターケアを行い、最後に全員が集まつて監督の「今日の一言」を聞いて、解散だ。

今日は通して六人の練習見学者がいた。熱心なチームサポーターが三人。ハズミスCと知つて足を止めて見ていた一般人二人、「なんだか分からぬがサッカーをやつてるぞ」と足を止めた一般人が一人。

サポーターは、女性が一人、男性が一人。女性は知り合いでないようで、離れた位置で、片方は声を張り上げ、片方は黙つて練習を見ている。男性は、五時頃にやつて来てグラウンドの隅っこに腰を降ろしている。黒縁眼鏡をかけた、太つた男だ。選手達がジャージに白いTシャツというラフな格好だというのに、男はただ一人ハズミスCのユニフォームを来てはいる。ノートパソコンを持ち込んでいて、練習風景を見てはなにやら入力していた。時折カメラを取り出して、撮影をしていた。

フェンスはあくまでボールが川に落ちないよう対策しているだけで、人の出入りを遮断するものではない。別にグラウンドに入つて見学することは禁止されていない。もちろんボール直撃の可能性があるというリスクは覚悟して背負つて貰う必要があるが。

今日は五時ちょうどから、きつちり三十分刻みでメニューが進んでいった。シユート練習、セットプレー時の攻撃と守備の練習、次節沖縄で行われるアウエイゲームのための戦術指導時間、その戦術を体に叩き込むためスタメン候補とそれ以外に別れて十五分ハーフの紅白戦。

紅白戦は、どちらも全く手を抜いていよいよには見えない非常に攻防の激しいものだつた。時間が短いので体力配分を考えなくともよかつたからだ。それにしても、まるでフットサルであるかのよう

に、互いにゴールがよく決まる。気負わなければ得点力があるということなのか、それとも紅白戦では攻めることしか考えずに守備がおろそかになっているだけなのか、それとも試合を控えた身で怪我をするわけにいかないので実は手を抜いているのか、なにせ味方同士のことなので端から見ていてもさつぱり分からぬ。ただいえるのはみんな非常に楽しそうだということ。

紅白戦の結果は、四六で非スタメン組の勝利だった。敗れたスタメン組は罰ゲームとして腕立てふせ三十回をさせられた。

さて、練習が全て終了して選手たちが解散すると、待つてましたとばかりに一人の女性ファンがそそくさと近寄つて行く。レプリカユニフォームにサインを書いて貰つたり、選手の写真を撮つたり、握手をしたり。

「テツさん、写真撮らせて貰つていいですか」

小さなカメラを手にした三十歳くらいの女性が、汗を拭きながら歩いている秋高鉄二に声をかけた。

「いいっすよ。どの辺に立ちましょ」

鉄二は特に営業スマイルを浮かべるでもなく、しかし邪険にすることもなく応じる。

「わしが撮つたるよ。ほれ、彼女の横に並べや

と、監督が駆け寄つて来て強引に女性からカメラを奪つてしまつた。頭髪にはかなり白いものが混じつているが、これでも四十代前半だ。

「……あれ、フィルム巻き巻きのシマミがないぞ、覗き窓もない。なんだこれ」

「デジカメだよそれ。電源入れりや画面が映るからファインダーがなくてもいいんだよ」

監督は独り言を呟きながらカメラをいじつている。唐突にフラッシュが瞬いた。鉄二は不安に思つて撮影した写真を、女性にチェックして貰つた。ビギナーブラックなのがある鷹はなんとやらぬか、いつそ不気味なほどに表情やアングルが素晴らしく巧みな一枚

だつた。夜のデジタルカメラ撮影は素人には難しいのに。

「よし、次はわしと彼女とのツーショットじゃ、ほらテツ、カメラ

「おれが撮んのかよ」

監督は女性と肩を組んでブイサインをしている。

佐倉成太監督は今年からハズミSCの指揮権を任命されている。JFL昇格に合わせて外部から招いた人材だ。佐倉監督は、ファンサービスを試合と同じくらい大切なことと捉えている。それは「Jリーグはそつあるべきだ」、という根底にある思いから来ている。チーム名が変わったもののあくまで企業名を名乗ることから、会社がJリーグ入りを目指していないことは明らかだが、しかしそれでは向上心を持つための材料を一つ失つてしまふ。自分が監督である以上はJリーグに上がる力をつけることを目標にしたい。現在J2の一つ手前にいる立場なのだから、まずはJ2を目指したい。会社の方針が変わった時、すぐその年に昇格を決められるような力を蓄えておきたい。

そして、Jリーグを目指すからにはファンを大事にする気持ちも育てていかなければならぬ。Jリーグは客が存在して成り立つプロのスポーツなのだから。結果を出すことが一番なのだが、それだけではいけない。

実際、運よくJリーグに昇格出来たとしても、補強によつてかなりの選手を入れ替わるだろう。今の選手は単なる蓮見製菓のサッカー部員だし、ほとんどの選手が入れ替わってしまう可能性だつてある。しかしそれでも、現在チームに対し行つてゐる意識付けは、チームの持つ性格として後々に受け継がれていくはずだと佐倉監督は考えている。

メンタル面が弱そうなチーム、ロスタイムの失点が多いチーム、雨に強いチーム弱いチーム、などあるが、個人個人の能力や性格の平均値としてなるほどそういう性質のチームとなることもあるだろう。しかし、それだけではないのだ。例え選手が全員入れ替わろうともチームに残る性格というものがあるのだ。チームというのはそ

れ 자체一体の生き物。選手は、その操り手でしかない。サポーターはチームという巨大な戦士を勝利に導くための、選手達の頑張りに声援を送ってくれるのだ。

自分も含め、ハズミーを離れることになろうとも過去に在籍していたことを誇りに思えるような、そんなチームにしていきたい。佐倉監督はそう考えている。

683 200×年7月9日 (水) 20:19 ジョニー
b3yuy86c

新人も入ったことだし、今日は久々に練習見学してきたYO。紅白戦やつてたけど、やっぱり友井芳樹はいい感じだった。来たばっかだからまだサブ組だつたけど、次節スタメン起用もあるかもよ。

与那嶺がルーレットやつて、方向感覚が狂つて反対方向に走つていたのには笑えた&ちょっと萎えた。

優斗は、もう怪我大丈夫みたいだ。紅白戦スタメン組で、随分動いてた。シート練習の時も一番枠に行つてた。

いちよお（何故か変換できない）練習風景の写真張つておくから、見とけ。

<http://xxx...co.jp/john>

684 200×年7月9日 (水) 20:35 名無しのサ
ポーターオッサエバ

乙

685 200×年7月9日 (水) 20:58 名無しのサ

ポーター オッサエバ

じょにい氏、乙彼山。

友井、不安もあつたけど良い補強だつたんだな。腐つてもヨリ一
ガ一つてことか。これで守備が安定するといいな。

686 200×年7月9日 (水)

23:02

m1×4j

7a

それよりテツをどうにかしてくれ。穴だ。

687 200×年7月9日 (水)

23:10

uj493

bv

<<686

アホか、テツに負担かかりすぎてる現状が問題なんだよ。

7a

688 200×年7月9日 (水)

23:22

m1×4j

ヨントスちつとも助つ人じやないじやん。

7a

689 200×年7月9日 (水)

23:52

uj493

bv

<<688

荒らしか、お前? なんにも分かつてねえな。もともとヨントスは助つ人じやねえよ。蓮見でアルバイトしてたサッカー初心者だよ。

690 200×年7月9日 (水) 23:53 jnyme

rv

ヨントス結構よくなってきたよ。もうちょっとよくなれば、プラス友井効果で、かなり守備安定するはずだよ。そうなれば、テツの攻撃参加も増えてくると思つ。

691 200×年7月10日 (木) 0:34 0qxb3

kb

そなれば、あと問題なのはヨナミネだけだな。

692 200×年7月10日 (木) 0:50 .jhvme

r v

穴つてほじじゃないけど、プレイが軽いんだよな。意識の問題。焦つてすぐ不用意なファールするし。あんなオドオドした沖縄人、見たことないよ。ばあちゃんがアメリカ人だけ? 顔は思い切り欧米面なんだから、もつとずうずうしくなりやいいのに。

693 200×年7月10日 (木) 1:48 0qxb3
k b

ここまで点取れないのに、DF補強だけってのも、ちょっとどうなのかなって考えちまうよな。今の状態じゃ、FWだけ補強すりやいいつてもんじやないのは分かるけど。

694 200×年7月10日 (木) 2:23 0qxb3

k b
誰もいなか。
おやすみ~。

2

七月十三日、日曜日。ハズミSCは沖縄のチームと対戦した。

沖縄まで行く財力も時間も気力も度胸もなにもない風子の唯一の情報源は居間のiMACだけだ。JFLの公式サイトより、本日の試合結果を知った。そしてその結果は風子を驚かせるものだった。スマアレスドローだ。

ハズミSCの試合に興味を持つようになつてからというもの、無失点であったことがなく、一得点もあげられずに負けてばかりだつた。相変わらず無得点ではあるが、それを差し引いても快挙と呼ぶに充分だ。

とはいものの、一体、どんな試合だつたんだろう。

攻めて攻めて相手を防戦一方に追い込んだのか、それとも反対に

防戦一方でなんとか守り切つた試合展開だったのか。それとも全体的にだらけていて、時間だけがどんどん過ぎていったのか。

まだ試合が終わって間もないでの、JFLの公式サイトにも、ハズミSCの公式サイトにも、勝敗の結果とメンバー・リストが書いてあるだけで、試合内容には一切触れていない。いくつかある掲示板にも、まだ現地組からの書き込みはない。

ハズミSCは開幕戦もスコアレスドローで引き分けているため、これで一だつた勝ち点が二になった。最下位に変わりはない。しかし、一勝のみで残り全敗という、ハズミSCと仲良しになれそうな鎌田製鉄FCに勝ち点一差に迫った。そのチームの挙げた勝ち点あ三が、どのチームからもぎ取つたものかは説明するまでもないだろう。

DFの渡辺輝彦がスターティングメンバーから外され、代わりに新加入の友井が入っている。Jリーガーを格安で雇つたとのことだが、今日の無失点は早速彼を使った効果が出たということだろうか。ただ風子は渡辺輝彦のことと比較的気に入っていたので、少し残念な気もした。

気持ちは変化するもので、サッカー観戦初心者だった風子は、知つていいというだけの理由で秋高鉄二ばかり見ていた。段々と選手のことが分かつてくると、FWの選手に注目するようになつた。なんといつてもサッカーは相手より点を多くとることで勝つ競技であり、FWはその得点を取る担当なのだから。しかしいくら試合を観戦していても一向にFWが点を取らない。いや、ハズミSCはチーム自体の得点がまだなので、FWの得点率もなにもないのだが、他のチームを見ていても、特にFWが一番点を取るというわけでもないようだ。それにより、勝利イコールFWの活躍というイメージがまず取り払われた。現在の風子はどうもDFというポジションに好感を持っているようだ。攻撃面は失敗すると単に残念で悔しいだけだが、DFはピンチを切り抜ける都度の達成感がある。もちろん失点すればショックだが、華のない黙々とした職人然とした態度に

風子は惹かれたようだ。DFは地味なものというのも偏見かも知れないが、とにかく彼女はそう思っていた。

3

四時限目も終わり、もう昼休みの時間だというのに、風子は一人黙々と体育用具の片づけをしている。女子の体育は月毎に選ばれた四人が当番として用具の準備や片づけをする決まりだ。七月は風子がその一人なのだが、他の三人は授業が終わると他の生徒らと一緒に教室に帰ってしまった。風子が彼女らを注意することなど出来ないと知っているのだ。

ハーダル走用のハーダルを両脇に抱えて二つずつ運んでいる。

四時限目の途中まで太陽にかかる雲も、今はすっかり取り払われ、強烈な陽光が地面を焦がしている。白い体操シャツも紺のハーフパンツも、すっかり汗が染み込んで重くて不快で仕方ない。早く片付けを済まないと、あぶり焼きだか蒸し焼きだかになってしまいそうだ。急ぎたいのはやまやまだが、肩が痛くなってきて、いつたんハーダルを地面に下ろした。

そばにサッカーのゴールネットがあり、その前にサッカーボールが転がっていた。風子はちょっと興味を覚え、ボールに近寄つてみる。

渡辺輝彦からのロングファイード、高山田優斗が絶妙な胸トラップ、そのまま駆け上がりグラウンドーのクロスボール、そこに走り込んだ轟佑司、躊躇なく右足を振り抜いた！

風子の右足は虚しくもボールをかすめただけだった。それどころか勢い余ってバランスを失い後ろに転げ、無様に尻餅をついた。年寄りのようによろけながら立ち上がり、痛めたお尻をさすつていると、突然すぐ後ろから笑い声が聞こえてきた。

「だらしねえなあ。そんな蹴り方じやあ、当たつても「コロンコロン転がるだけだぞ」

振り返ると、サッカーボールを小脇にかかえた男子生徒が、楽し

気にシワシワの笑みを浮かべていた。確か、二年生の鈴内達也だ。生徒会の書記かなにかの担当で、風子が入学して間もない頃に体育馆で演説をしてやたらとみんなを笑わせていたので覚えてい。

「ボールはね、こう蹴るの！」

鈴内は自分のボールを小脇に抱えたまま、風子が蹴り損ねたボールに小走りに駆け寄った。右足を後ろに振り上げ、そして振り下ろした。風子と同じことをしただけなのに、ボールはズバンと爆音のような小気味の良い音をたて、見事ゴールネットの右上隅に突き刺さった。

ゴールまでわずか数メートルの距離だし、別にネットに収まったからといって驚くほどのものではないが、その綺麗な蹴り方につい感心してしまった。瞬間に細かくシャツターを切つて白鳥の飛び立つ一瞬を撮影する技法があるが、まるでそういうものを見るような感じで風子の脳細胞には鈴内のキックが焼き付いていた。

「その顔は……ヴェルディだな！」

鈴内は風子の顔を両手で指さし、唐突にそんなことをいい出した。

「……なんです……それ」

風子はきょとんとした表情。

「違つたか。じゃ、近いからモンテディオ。それから……J1で一番近いから、鹿島かな、でも遠いからな……」

ああ、なんだリーグのチーム名か。

風子は首を横に振る。

「うーん、まさか代表にしか興味ないってことはないよなあ。そういうやつは自分でボール蹴つたりしないからな」

どういう理屈だ、それは。そもそも、ただ転がっていたボールをなんどなく蹴ろうとしただけなのに、何故日本代表以外のどこかのチームのファンでなければならぬのか。

とはいものの、実際にどこかのファンであることに違はない。

「ハズミン！」

呟く。

「え、知らねえ！ 地元サッカー団？ 社会人チーム？ サッカー
スピリッツのエディットモードで作ったオリジナルチームじゃない
よな」

「……JFLです」

「ああ、なんだ。ハズミつて、もしかしてあれか、あそこにお菓子
工場あるよな、蓮見製菓、あそこのこと？」

風子は頷いた。

「へえ、あそこってJFLだつたんだ。意外に身近なとこにあるも
んだな。Jリーグ昇格なんてしたら凄いよな、この県で初だもんな。
おれもあとでチェックしてみよつと。なに？ よく蓮見製菓、観戦
してんの？」

「最近になつてから、何回か……」

「お前、変わつてんなあ。女でJFLチームのサポーターだなんて

「……そう……なんですか？」

風子には基準というものがまったく分からない。それは男性の方
が比率は圧倒的に多いだろうけど、女性が応援し、観戦しているの
がそんなにおかしなことなのだろうか。

鈴内は自分の小脇に抱えていたボールを軽く放り上げて、額で受けた。そのまま額から落ちないよう、バランスを取っている。
「部活、どうか入つてる？」

風子は首を横に振つた。上を向いてボールと格闘中の鈴内に見える
わけがない。「いいえ」と付け足した。

「いまマネージャー募集してんだよね。転校して、いなくなつちゃ
つてさ。よければ来なよ。うち、部員多くないから、練習でだつたら
サッカーも出来るぜ」

やつぱり鈴内はサッカー部員だつたのか。

「か……考え……ときます」

風子は別にサッカーをしたいわけではない。ボールを蹴つたのだ
つて、バスケットボールや野球ボールを投げてみたのと同じ感覚だ。
「タツちゃん！ 待たせたな。ベツちゃんが、飯食うのに時間かか

つてさ」

鈴内の友達らしい男子が四人、駆け寄ってきた。

「じゃ、はじめっか。そうだ、今日は二二対三が出来るじゃん。それじゃ、今日は審判係はなしで。お前はおれたちのチームな」

鈴内は風子の腕を引っ張った。

あの……なんのことだか……

……体育の授業と後片付けとの日差しとで、へとへとなんですが

「スタート！」

鈴内を含む五人が一斉に動き出す。

「彼女、バス！」

風子の足下にボールが転がつて来た。なんだか分からずに一瞬躊躇したが、手を上げて合図をする鈴内にボールを蹴り返した。

「彼女、走つて、そつち！」

なんとなくルールが分かつた。後ろへのバスとドリブルだけで、相手側のあるラインに踏み込んだら勝ちなのだ。

しかし鈴内達也というのは、えらく強引な性格だ。だがそれが単に無邪気さから来ているだけということが、少し接しただけでよく分かり、憎めない。

風子はふと気付いた。

ここにいる人たちがみんな、自分に対しても普通に接してくれていることを。

自分から殻に隠つてなにも見ずにいたが、アルバイト先のケーキ屋だってそうじゃないか。一人意地の悪いのもいるけど、みんな普通に接してくれている。駅前で会ったハズミの秋高選手だって、この前スタジアムで会つた元選手のおじさんだってそうだ。

クラスでは現在の立場からの脱却は難しいかも知れない。立場関係というのは、出来上がつてしまつとなかなか覆すことは出来ないし、本人の努力だけでどうしようもない部分もあるからだ。しかし、初めて会う人となれば、本人の心がけ次第でいくらでも良い関係を

築いていくことは出来るのだ。

まずは、ケーキ屋のみんなと馴染むことからはじめてみよう。こ
っちから飛び込んで行つて、溶け込むことからはじめてみよう。

今日もアルバイト、頑張ろう。

予鈴が鳴つた。風子は体育用具を片づけている途中だつたことを
思い出した。五人の先輩に手伝つてもらつて、五时限目にはぎりぎ
り間に合つたが、お昼を食べる時間どころか着替える時間すらなく、
一人体育着姿のまま英語の授業を受けることになった。

4

ハズミSCは、他チームの都合による日程変更があり、七月十三
日、七月十九日とアウエイでの対戦が続く。

十三日は沖縄県で、今日十九日は栃木県での試合だ。

今、風子はJR東北本線の電車に揺られている。

隔週で観戦することに慣れていたので、ホームゲームがしばら
く行われないことにある種の禁断症状に陥つてしまい、栃木県なら
ば近いだろう、とアウエイゲームに行つて見ることにしたのだ。近
藤悠子にも声をかけたところ、どのみち彼女も一人で行くつもりだ
つたらしく、風子のほうから誘つてくれたことに喜んでいた。しか
し、悠子の親戚に突然の不幸があり、結局風子一人で行くこととな
つた。

最初は栃木県だから近くで楽だらうと思っていた。しかし、栃木
県といつても広く、しかもローカル線からローカル線へと乗り継い
で行くため、とんでもなく時間がかかるものだということを身をも
つて味わつた。電車移動は、後はもう東北本線（宇都宮線）に乗つ
て宇都宮に行くだけだが、宇都宮駅からさらにバスで終点までいか
なければならない。さらにそこから、二十分ほども歩くらしい。よ
ほど近くに住んでいない限りは、誰でも一日がかりになりそうだ。
普段は日曜開催が多いのだが、今節は土曜日でよかつた。だから

来る気にもなつたのだが。

車内アナウンス。

ついに宇都宮駅に到着した。

下車する。

勝手の分からぬ場所でのあまりの人の多さに、目眩がして倒れそうになる。悠子と一緒にハズミンの密集した席に何度か座ったことがあり、その経験のおかげでなんとか踏ん張ることが出来た。人生役に立たない経験はない。東京の人混みはこんなもんじゃないぞ、と一度も行つたことがないくせに、そう自分を励ました。

しかし、F県外にまで来てしまつとは。随分とのめり込んでしまつたものだ。

そういえば、近隣県ながらも生まれて初めての関東地方体験だ。F県を出たこと自体、記憶にない。仙台生まれらしいので、少なくとも宮城にはいたということなのだろうが、小学校の遠足もF県内だったし、中学校の遠足や修学旅行は仮病で行かなかつたし、F県以外のこと全く知らない。

さて、これからバスに乗るわけだが、バス停留所に書かれている路面図を見ても、何系統に乗ればどう行くのか、なにがなんだかさっぱり分からない。

牧歌的な小さな駅なら、今の状態の風子ならば人に尋ねることも出来たかも知れない。あまりに駅が大きくて、それだけで萎縮してしまい、ただただ困惑してしまつだけだった。

どれに乗ればいいんだろう。どこのバスも、どうしてこう分かりにくいのだろう。

スキンヘッドの小太りの男が、黄色いユニフォームを来てバスに乗り込んでいる。あれは昨日ホームページで見た、対戦相手のチームユニフォームに似ている。他の乗客も大きなバッグを持っていたり、旗を持っていたり。きっと、あのバスに違ひない。風子は駆け寄つた。と、突然バスのドアが閉まつてしまつが、運転手が風子の姿に気づいたのか、開けてくれた。

「あ、ありがとうございます」「風子は息を切らせながら運転手に頭を下げる。「このバス……清原球場に行きますよね」

「行きますよ。終点です」

風子は胸をなで下ろした。

思つていたよりも簡単に言葉が出た。だつたら最初から停車しているバスの運転手に尋ねておけばよかった。

再びバスの扉が閉まる。低い振動と共に、バスは走り出す。

「お姉ちゃん、ここ空いてるよ」

さきほどの黄色いユニフォームを着た、スキンヘッドの中年に声をかけられた。風子をバスに導いてくれた恩人ではあるが、あまりの顔の怖さに風子の心は縮みあがつた。こういう場だし、普通の容貌の人には話しかけられてもすくみ上がつてしまつというのに。結局風子は、恩人云々の理屈ではなく、単なる恐怖心から、男の隣に腰を降ろした。

「サツカーだろ？ 清原球場行きかを尋ねるなんて」とんでもない席に座つてしまつたのかも知れない。

「はい」

縮こまりながらも、なんとか返事をした。

「初めてかい」

「ここに来るのは、は、初めてです」

「いつもは？」

「いつもはハズミのホームで」

「ハズミサポかよ！」

「うわ、『J』『G』『J』めんなさい！」

つい口を滑らせたことを後悔した。

「おい、なに謝つてんだ。どこサポだろ？ 一人でも多く来て欲しいよ。JFJは観客が少なすぎるからな」

「はあ」

風子はハンカチを取り出し、額の冷や汗を拭いた。

「いい試合になるといいな」

「……はい」

「ハズミ、ちょっと強くなつてきているらしいからな。よくは知らんが」

「はい」

それきり男は口を閉ざした。

そのままバスに揺られ続け、気が付くと終点に到着していた。

風子はスタジアム入り口で千円を払い当田券を買った。中に入る。両チームともゴール裏に熱狂的なサポーターが密集している。近藤悠子と一緒に来ていれば、その中に加わっていたかも知れない。いや、多分そうなつていただろう。悠子はそういうところを好む性格だ。風子は初めてハズミSCの試合を観た時のように、周囲に人の少ない席を選んだ。隣の席にバッグを置くと、中からハズミSCのレプリカユニフォームを取り出して着る。

別に密集したところに行かなくたって、サポはサポだ。

最近風子にはハズミSCサポーターである自覚が出てきた。

当然といえば当然だが、スタジアムのムードがいつもと全く違う。ハズミSCのホームでは、多くて観客数が八百人くらいだったのに、その倍以上はいそうだ。ハズミSCサポーターは、全体の二十分の一、百人程度、圧倒的にアウエイといった雰囲気だ。とはいえる。ハズミSCのサポーターはホームでも四百から五百人くらいなので、かなり集まつたほうではないだろうか。

スタジアム自体も、いつも観戦しているところとは相当雰囲気が違う。目に付いたのが電光掲示板だ。それと座席の数。観客席がピッチをぐるりと一周している。席はかなり傾斜がついており、後ろのほうでも見やすそうだ。

主審の笛が鳴った。

試合開始だ。

開始早々から、ハズミSCはどんどん攻め、相手を防戦に追い込

んだ。DFが安定してきたということと、いい加減に得点しなければならないという苛立ちとの相乗作用だろうか。そう、とにかく相手より一点でも多く得点しなければサッカーは勝てないのだから、いつまでも無得点を続けてはいられない。早く勝利、せめて得点し、自信に繋げていかないと。

前がかりで攻めに攻め、ハズミンチは相手になにもさせなかつた。サンドバッグを殴るかのように、好き放題にミドルショートを打ちまくる。しかし相手に肝心なところでブロックされ、ベストな体勢からのシュートは全く許してくれない。そういううちに、不用意なパスをカットされ、縦バス一本であつたりと相手FWにボールが渡る。そして、ハズミンチ側のゴールネットが揺れた。運を天に任せて強引に先制点をもぎ取りに行く作戦は、前半十六分にして頓挫した。

以前の、自分達がなにをすべきかにおいて暗中模索といった状態のハズミンチならば、先制されたことによりかえつて闇雲に激しく攻撃に出ていたかもしれない。しかし現在はそこそこ守備が安定しているし、チーム内の役割もはっきりしてきているため、一点点差ならばもしかしたら……という色気が出てしまつていていた。これ以上の失点をしないよう慎重に行こうとするあまりに、やけにもつたりとした、ただ中盤と最終ラインでボールを回すだけのサッカーになつてしまつた。そして後半三十分に、また失点、慌てて攻め出すがもう時は遅い。

試合終了の笛が鳴つた。

○ 二でハズミンチは負けた。

今日は無風だが、夏の暑さとサポーターの熱気とが溶けて陽炎のようにゆらゆらと昇つている。

湿度が高く、じつとりとしている。汗で、服が体に張り付いて気持ちが悪い。

風子は空を見上げた。

青い空には綿菓子みたいな雲がぽっかりと浮いて、悠々と流れてい

いる。地上とは裏腹に、とても涼しそうであった。

5

佐久間風子は、昨夜、初めて自分からサッカーのテレビ観戦というものをしてみた。

中東のどこだかの国で行われていた、日本代表の試合だ。ライブで、番組開始は二十一時半「このあとすぐキックオフ」とテロップが出ているくせに、三十分待たされて試合開始は二十三時だった。今まで、たまたまテレビを付けたらサッカー中継がやっていたり、一階に降りてきたら家族の誰かが見ていたということはあったが、自分には単なる風景や雑音のようなもので、まったく意識したことになかった。

サッカーのルールや観戦の醍醐味というものが分かつてきたこともあり、自ら意識してテレビ放送を観戦してみると、まあそれなりに面白かった。でもなんだかしつくりとこないものを感じていた。
○ 三で日本が負けて放送が終わり、一階の自室でベッドの中でうとうとしていた時に、ふと気付いた。改めて実感した。やはり自分はサッカーが好きなのではなく、ハズミンこというチームが好きなだけだ。どのチームが強くて、こんな特徴があり、あんな選手が必要注意で、といった相手チーム情報だって、ハズミンの対戦相手だから興味があるだけなのだ。

昨日は栃木県への遠征のため（といつても結果は撃退されたが）、土曜日のアルバイトを休みにしてもらつたが、最近は基本的に土曜日はフル出勤して、日曜日を休むことにしている。以前は土日ともフル勤務だったが、JFLの試合は日曜日に多いため、シフトを変えて貰つた。

ホームゲームは隔週なので、試合のない日曜日は観戦資金をためる意味でも働いておきたいのだが、勤務日は曜日ではつきりさせないと職場に迷惑だし、他に日曜日をフルに働きたいという者がいた

ので、風子は日曜日を休むことになった。

風子の住む家のある田圃に囲まれた小さな住宅街を抜けて、狭い道路を少し進んだところに、地元民が「お寺の住宅街」と呼んでいる文字通りに昔からあるお寺を中心として発展していった住宅街がある。商店街もあり、静かながらもそれなりに活気がある。

風子は買い物用のバッグを右肩にかけ、お寺の住宅街を歩いている。バッグには買ったばかりの肉、野菜、魚、牛乳などが入つており、結構な重さだ。風子は自ら今日のお使いを買ってでたのだ。彼女の、家においての戦いは、まずは母に自分を認めさせること。買物をするなど、なるほど取るに足らない些細なことに違いない、しかし風子には貴重な一步の踏みだしなのだ。完全に失われてしまつていてるミニニューケーションを、まずは取り戻すといふことが。

母は世間体というものを、過剰なまでに気にする。風子はそんな母のために頑張りたいのではなく、母のその世間体第一主義を壊してやりたいだけだ。そのために、まずは母の懷に飛び込むこと。自分がもつとしつかりし、母を引っ張つていいくような存在になること。すべてでは、それから変えていけばいい。そしていつかは、父のことを見てやる。

立ち止まり、重たいバッグを右肩から左肩にかけかえる。重心がかたよつていたため、腰が痛い。確かに押入に大きなリュックサックがあるはずなので、それを背負つて自転車で来ればよかった。

また歩きだそうとしたとき、賑やかな子供の声にふと気付いた。ここは、しらゆり幼稚園の前。柵越しに園内に視線をやると、日曜日だというのにたくさんの幼児、そしてその中に混じつて五、六人の青年がいる。周囲には、幼児の保護者と思われる三十前後と思われる男女。

なにをやつているのだろう。

あ……

風子は心の中で、間の抜けた声をあげた。青年達の顔にどことな

く見覚えがあつたのだ。

どこで彼等を見たのか、すぐに判明した。

ハズミンの水田恭助と、田中英一、ピッチを走る姿を何度も田にしている。そういうえば、残る青年らも公式ホームページで写真を見たような気がする。

サッカー教室だろうか。いや……鬼ごっついや隠れんば、めんこやベーゴマで遊んでいるだけだった。

確か水田は右膝の怪我で調整中、田中は警告の累積で昨日は出場停止だつたはずだ。

後から近藤悠子に聞いたところによると、「出場メンバーに選ばれた選手は、平日の仕事のみならず土曜日曜もJFLの試合という大切な仕事がある。試合に出ない選手にも、住民への奉仕という貴重かつ大変な活動をしてもらいつつでチーム全員の立場を公平にしている。これは監督の考案によるもので、今年の春から毎週日曜日に実施されている。この幼稚園だけではなく、野々市と華鳴市の何所かで奉仕活動が行われている。老人介護、ゴミ拾い、サッカーチーム、等々。だからハズミンの選手は全員、リーグ戦が終了するまでは週休が一日しかないのである」

遊びといえばテレビゲーム、といった子供たちに、めんこやベーゴマは古いうちからむしろ新鮮なようで楽し気にはしゃいでいる。青年たちも負けじと楽しそうだつた。実は選手らの大半も、この奉仕活動で初めてこのような遊びに触れた。だから彼等にとってもまた新鮮なのである。

風子は柵越しにそつとその様子を眺めている。

なんだかとつてもほのぼのとしていて、見ていて悪くなかった。

「すす、すんませんっ！」

教師の怒声に振り返り謝りつつも、風子はとまらない。ジダンばかりのルーレットを見せ、また走り出す。しかし、両腕に缶ジュースを四本抱えているので、うまくバランスがとれず、たどたどしく危なげな走り方だ。ついに、廊下に爪先をつつかけて転びそうになり、ジュース缶を全部落としてしてしまった。転がる缶を慌ててかき集めると、また走り出した。

なんだって引き受けてしまったんだろう。

どうして断らなかつたんだろう。

自分に少し自信が付いていたというのに……自分は少しづつ成長してきていると思っていたのに……それは勝手な思い込みだったのかも知れない。

先日、髪型を変えたことで、風子は自分でも予期しなかつたような大きなイメージチェンジを遂げた。風子は比較的整つた可愛らしい顔立ちをしており、その正体が分かると、現金なもので男子からのいじめは激減した。しかし女子からの風当たりは余計に強くなつた。相対的には以前と変わらないとしても、風子は男よりも女のほうが陰湿で怖い生き物だと思っているので、余計に精神的苦痛が酷くなつた。

風子は一年B組の教室のドアの前に立つた。手が塞がつているので、少し下品だけどわずかなすき間に爪先を突つ込んでドアを開いた。

放課後の教室には、四人の女子がいた。

「ほうら、間に合つたじやん。クマちゃん、ありがとう、お疲れー」
萩村紀子の笑顔が息を切らせている風子を出迎えた。

「もう……絶対オーバーすると思つたのになあ」

笠原香は怒つたような顔でえらく悔しがつてている。

笠原香と梅村智子は、それぞれ萩村紀子と加藤るい子に千円札を渡した。

風子は理解した。

学校から少し離れた田圃の中にぽつんと存在している売店がある。そこにしか売っていないジュースを、十分以内に買って来ないと脅され、不本意ながらもいう通りに実行したわけだが、制限時間内に買つて戻つてこられるかどうかという賭けの対象にされていたのだ。

風子は彼女らに缶ジュースを渡した。

「あの……ジュースのお金は……」

風子は上目遣いでおずおずと萩村にいった。

「え、クマちゃんのおじつでしょ。さつきおじるつていつてたじやない」 いつてない。「じゃあね、ありがとう。あと、笠原もね。まいど~」

萩村紀子はお札を振り振り、加藤るい子と一緒に教室を出て行く。

「香、あたしらも帰る」

梅村の言葉に、笠原香はしばし無言であったが、突然席を立つと、風子に歩み寄り胸を強く突き飛ばした。風子はよろけ、危うく机を倒してしまいそうになつたが、なんとか踏ん張つた。

「この馬鹿。なにを頑張つて走つてんのよ。あんたのおかげで千円損したじやない。なんか恨みあんの? あたしが間に合うほうに賭けてたら、逆に手を抜いてゆつくり買って来るつもりだつたんでしょ」

「だつて、賭けてたなんて……知らなかつたから

「当然だ。知つていたら賭けにならない。脅しに従うか否かという別の賭けならば成立していただろうが。

「あんたのおかげで損したんだから、責任とつてよね

「責任つて……」

「あたしが損した分、あんたが出しなさいよ。あんたが悪いんだから当然でしょ。本当はそれに迷惑料を上乗せしてやりたいくらいなんだから」

笠原は風子のむなぐらを掴んだ。

「そんな……無茶苦茶だよ」

「なにがよ。無茶苦茶なのはあなたのバカ面でしょ

「……十分以内に買つて来てつて頼まれたから、買つて来ただけなのに……」

「なにを恩着せがましいこといつてんの。嫌なら断ればよかつたじやないの。引き受けたんなら、周囲に与えた損害の責任はちゃんと取りなさいよ」

支離滅裂だ。勝手に賭けの対象にしておいて。

本当にそんな不当な理論を正当な主張と信じて怒つているのか、それともただ風子をからかつて楽しんでいるのだろうか。

風子はスカートのポケットから財布を取り出した。

これでこの場を逃れられるのならば安いものだ。一瞬、そんな投げやりな気分になつてしまつたようで、気付くと千円札を一枚、取り出していた。我に返り、差し出すべきか断固拒絶するべきか躊躇しているうちに、笠原にひつたくられてしまった。笠原は、一枚を梅村に渡した。梅村は風子に少しだけ気の毒そうな顔を見せたが、結局それを受け取った。

「これで勘弁してあげるよ」

二人は教室を出ていった。

静まり返つた教室に、風子の呼気だけが聞こえている。だんだんと胸の鼓動が速くなつてくる。目が回つてくる。激しい後悔の念に襲われていた。視界が真つ暗になつた。

「最低だ……」

呟いた。

自分は問題から逃げ出してしまつたのだ。

強引にひつたくられてしまつたからなんて、言い訳だ。きっと自分は、無意識のうちに、笠原に選択権をゆだねていたのだ。自分は被害者で、全てを相手のせいにするために。

両手で握りこぶしを作り、黒板を叩いた。

第五章 秋高鉄一の一日

1

朝から蝉がうるせえな。

どうせお前らにや学校も仕事もないんだろう。ちつたあ寝坊でもしたらどうだ。

でもまあ、一週間の生詮じやあそぼむいつていられないのか。それにしても眠い。

まだ、この前の試合で負傷したスネがじんじん痛んでいるというのに、そんなことつゆも忘れてすぐ夢の世界に入ってしまいそうなほどだ。実際、半分夢の中でアブリバザミの声を聞いている。

「起きる時間よ…」

女性の声が四畳半の向こうから聞こえてくる。

「うむ。一週間の蝉は寝坊とはいえ出来るんだから問題なし」寝返りを打つ。

「わけわからぬこといつてないで、とひとつ起きる…」

秋高鉄一は飛び上がるよう上体を起こした。

近くの木にアブラゼミが何匹かとまっているようじ、じにじいと不協和音を奏でている。

枕元には妻の琴美がいた。瘦せ形だが、お腹だけぽつこつと飛び出している。現在九ヶ月と少々、もうじき出産予定である。

「……おはよ

「おはよう

二人は軽いキスをかわした。

「」飯、出来ているから

鉄一が布団から出ると、琴美は大きなお腹で布団をかたしはじめる。

「いつも思つけど、よく田舎ましもかけずに起きられるなあ

「かけてるよ。テツ君がまったく気付かないだけじゃない

そういうえば、蝉の声だけでなく、田覚ましが鳴る夢も見たような気がする。夢の中の鉄二はその音に我慢出来なくて、何故かヘディングでサッカー ボールをぶつけて田覚まし時計を碎き壊すと、再び眠ってしまったのだつた。

かたされた布団の敷いてあつた場所に、鉄一は座卓を用意する。琴美が次々と小皿を運んで来ては、座卓の上に置いていく。

ここは蓮見製菓の社員寮。あちこちガタの来ている、築二十年ほどの木造二階建てだ。間取りはすべて共通で、2Kしかない。もともと独身寮だつたのでしかたがない。

鉄二が顔を洗つてすつきりしたところで、食事開始である。

「では、キックオフ」

「キックオフじゃない！」

「……いただきます」

「はい、いただきます」

二人は両手を合わせた。

琴美には、どうにも自分の夫がサッカー選手なのだという実感がない。工場内の事務所で働いている印象のほうが圧倒的に強いからだ。職場が同じだつたし、彼女はろくにサッカー部の試合を観たことがないので当然といえば当然のことであつた。

しかし事実は事実。自分はサッカー選手の妻なのだ。朝食、お弁当、夕食、と毎日曜日に試合のあることを計算した、週の献立を考えている。試合が近場なのか遠征なのかによつても、微妙にメニューを変化させている。

琴美の先輩に茂原ななえというのがいる。蓮見製菓サッカー部時代の、ある選手の妻であり、琴美は彼女から色々と夫を管理するための心得というものを教えて貰つたのだ。遠征かどうかでメニューを変えるというのは、茂原先輩の提案だ。蓮見製菓サッカー部の頃は、東北地方内の移動でよかつたが、JFLは移動範囲が全国規模だ。「疲れない食事」か「爆発力を出す食事」かで、試合内容も変わつて來るのではないか。また、夫を危険から守れるのではないか。

サツカ一はちよつとした油断が大怪我に繋がってしまうから。琴美は、茂原先輩がそう強く主張するほど大袈裟な差はないと思つてゐる。夫への愛情という自己満足のつもりでやつてゐる。また、暗示的効果を狙つて、積極的かつオーバーに食事の効能を語るようにしている。

テレビでは、朝の情報番組がやつてゐる。

美人だが少し滑舌の悪いお姉さんキャスターの天気予報が終わると、鉄二は外に出る。十分ほどの簡単なジョギングを行う。汗だくで部屋に戻つて来る。軽く汗を拭うと、今度は十分ほどかけてストレッチを行う。少し残しておいたご飯を食べ、シャワーを浴び、髪を剃り、歯を磨き、髪を整え、スーツに着替える。

内勤だがそれなりに接客も多く、スーツはかかせない。

汗だらだらでお客と向き合つことのほうがよっぽど失礼なんじやないかと鉄二は常々思つてゐるのだが、ルールだしどうしようもない。クールビズがやたらテレビで取り上げられていた頃は、なんだくだらねえ、と馬鹿にしていたが、今ではそういうた有り難い風潮は早く日本の企業全体に普及して欲しいものだと思つてゐる。今日も照りつけるような強烈な日差しだ。

蝉がうるさい。

シャワーを浴びたばかりだといふのに、外へ出た瞬間にまたびつと全身から汗が吹き出した。

2

秋高鉄二は札幌生まれの札幌育ちだ。

小学生の頃、いつも体重は平均以下のくせに身長はクラスで一番高かつた。ひょろひょろとした、例えるならまさにやしのような感じで、栄養を取りすぎて上にぱっかり伸びてしまつたのか、取らなさすぎて横幅が増えないのか、健康なのか不健康なのかがさっぱり分からぬ少年だった。いずれにせよ、バランスの悪い外見であることに違ひはなかつた。

両親は心配してスポーツをすることをよく勧めてきたが、面倒、と鉄一はいつも断るのだった。外で遊ぶのは嫌いじゃない。むしろ、本を読むよりはよほど好きだ。よく公園でみんなと遊んだり、山に虫取りに行ったりしていた。決まつたスポーツをしなかつたのは単に毎日毎週の何時何分、と時間規則に縛られるのが嫌だつただけだ。

サッカーとの出会いは中学一年の時。公園にボールの扱いがもの凄く上手な小学生がいたのだ。リフティングをしていて、まずボールが地面に落ちない。そんな光景をよく見るうちに、ちょっと興味を持つて中学校の体育倉庫にあるサッカーボールでリフティングとやらを試してみた。一秒ともたず、落としてしまつた。なかなか難しい。見るとやるのでは、こうも違うものなのか。何度チャレンジしても、もつて三秒。一秒と三秒の違いは、単なる運でしかない。だんだんいらしてきて、しまいにはボールを他の用具に叩き付けて帰つてしまつた。

「こんな出来なくたつて、サッカーつうのは要はボールにボールぶちこみやええんだろ！」

翌日、まだどの部にも所属していなかつた鉄一はサッカー部に入部した。

入部したはいいが、下級生はろくにボールを使つた練習などさせて貰えない。先輩にしごかれて、筋力トレーニングをさせられるだけだ。勝手にボールを蹴つ飛ばして、かわりに先輩に頭を蹴つ飛ばされたこともある。

いい加減頭に来て退部しようかとも思つたが、顧問教師も担任もどうしても退部を許可してくれなかつた。後で知つたのだが、どうやら両親が出しゃばつて頼んでいたらしい。鉄一には健康になつて欲しいし、飽きっぽくて短気なところを直してもらいたい、どうかいきなり退部届けを持ってきても破り捨ててくれ、と。そう、鉄一は普段はのんびり屋のひょうきん者のくせに、一瞬にして激昂してしまう癖のある厄介な性格だった。

退部させてもらえないし、サボつても後でよけい酷い罰を受ける

だけなので、仕方がなく続けていた部活だったが、それがだんだんと苦痛でなくなってきた。体力がついてきたこともあるが、部活での手の抜き方を覚えて来たのだ。

夏になると、三年生が受験勉強に入るために引退した。嫌な上級生が一挙に半分もいなくなつたわけで、さらに気分が楽になつた。自宅では時折思い出したようにリフティングに挑戦してみるが一向に上達の兆しがなかつた。

夏休みも終わり、一学期になるとボールを使った練習をさせてもられるようになつた。試合形式の練習もさせてもらえるようになつた。

だいたいDFをやらされた。GKの時もあつた。鉄一は自分が得点したいものだから、バランスもへつたくれもなくどんどん前行つてしまつ。GKの時も、みんなの怒鳴り声に気付いてみれば、ドリブルで駆け上がつてしまつっていたこともある。そんなこんなで先輩の反感を買つたのか、FWをやらせてもらえることは決してなかつた。しかし、セットプレーだけでなく、流れの中でも守備陣が上がるべきタイミングというものがあり、不本意ながら守備をやらされ続けたおかげで、そういう感覚を養うことが出来た。なにしろ、そのタイミングを見て駆け上がれば誰からも怒られないのだから。とはいっても、流れからの駆け上がりでゴールを決めたことなど一度もなく中学時代は終わつてしまうのであるが。

鉄一が十何通目かの退部届けを書こうか書くまいか迷つていたある日のこと、また練習でGKをやらされていたのだが、やけくそ氣味に乱暴に蹴つたボールがそのまま遠く向こうのゴールへと吸い込まれてしまつた。部内での練習とはいえ、これが鉄一の初ゴールである。このゴールがなかつたら、この後の人生は全く異なるものになつていただろう。ともかく、その件もあって、部活を継続する気になるのだった。

ある日、先輩たちに頭の形が変わるくらいぼよよにぶん殴られたことがある。

先輩の一人が、物陰からサッカー ボールを頭にぶつけられたのだ。
鉄二が犯人だろ？？ということで、制裁を受けたのだ。

鉄二が疑われた理由というのが一点ある。「ボールをぶつけられた先輩は、普段鉄二ばかり厳しくしごいていたことと」「こういうことをするのは秋高くらいしかいない」という、法治国家としてはなんとも乱暴なものだった。しかし誰ぞ知らず、本当に犯人は鉄二だったので、本人は殴られて文句もいえなかつた。

一年生になつた。

リフティングの技術は相変わらずだ。去年よりも、一秒二秒延びた程度だ。

さて、後輩が出来たわけだが、誰もが意外に思うほど鉄二は後輩に優しく接した。別に人気取りをしたいわけではなかつたのだが、優しい先輩と思われて悪い気はしない。お調子者魂が頭をもたげ、いつしか主将になりたいと考えるようになつていた。自分が主将になつて、「一年はボール触っちゃ駄目」だのなんだのといつたくだらない風習を廃止してやる。もつと良いサッカー部にしていこう。そんな理想に燃えていた。

また、夏がやつてきた。三年生が引退する。

ついに完全に先輩がいなくなる。いよいよ自分の天下だ。おれは主将だ。キャプテン TETSU！ と勝手に考えていたら、新主将にはなんと権守孝が任命された。

「権守は主将なんて嫌がつっていたし、自分、なりたいつていつてたじゃないすか？」

鉄二は人事を決めた元主将に抗議した。

「それでおさまるべきところがあんだよ。あいつは向いてる。お前は目立ちたいだけで、しかもサッカーの技術も全然駄目だろうが。任侠みたいな人氣があつても、チームを統括すんのとは別なんだよ

サッカーの技術全然駄目、

サッカーの技術全然駄目、

サッカーの技術全然駄目……

その一言がなかつたら、まつたく違う人生を歩んでいたかも知れない。素人よりはマシという程度のくせに、自分に自惚れて、いつかサッカーへの興味もなくし、高校生になつたら違う部活を選んでいたかも知れない。

権守は非常に真面目で良い奴だけど、鉄一は彼のことが嫌いだつた。鉄一は先輩に浴びせられた痛烈な一言がきつかけでがむしゃらに頑張つて練習をしたので、一応レギュラーという地位は確保していたが、やはりFWをやらせてもらえることはなかつた。でもこの頃には、点を取ることだけがサッカーの面白さではないことが分かつてきていたので、特には気にならなかつた。

中盤だろうと、最終ラインだろうと、魅せるプレーは出来る。サッカーの楽しさを味わうことは出来る。そう考えるようになったのは、自分に実力がついてきたからではない。岡田忠成という同学年のDFがあり、彼の放つ輝きに魅了されたのだ。

体の張り方、入れ方、ポジショニング、とにかくマンマークに強く、FWの個人技による突破などまず許さない。まさに鉄壁と呼んで過言でない存在だつた。守備だけではない、全体の状況判断が的確で、チャンスとみるや流れからでもどんどん攻め上がつていく。「秋高、カバー頼む！」と、駆け上がり、それどころかゴールまで決められてしまつと、鉄一はなんだか踏み台にされたような悔しさと同時に、守備陣の醍醐味というものをしみじみと感じるのだった。鉄一は常々、「おれとあいつからサッカーを取つたら、おれはただのイイオトコだが、あいつにやなにも残らん。顔を取つたら、あいつにやサッカーが残るがおれにはなにも残らん」などと吹聴していたものである。

まだ、サッカーとずっと付き合つしていく人生になるなど思つてもいなかつたし、近いからというだけの理由で、深く考えずに自宅と同区の公立高校に進学した。ちなみに神童岡田忠成は、埼玉県にある私立のサッカー名門高に行つたらしい。一年ほどたつた頃、岡田は交通事故に遭いサッカーの出来ない体になり、また札幌に戻つて

きたという噂が流れてきたが、その後誰も彼の姿を見た者はいない。大怪我というのはテーマかも知れないが、少なくともリーガーにはならなかつたようだ。

鉄二は高校でもサッカー部に入った。ある程度の実力は身についていたし、部員の数も多くなかつたし、一年は半年間ボールに触っちゃ駄目などという馬鹿げた風習もなかつたので、控えの身分ではあつたがすぐに試合の登録メンバーに入れてもらうことができた。高校生になつても細身の体格は相変わらずだつたが、全身にしつかりとした筋肉がついてきており、見た目以上に体重は増えていた。中学の頃は周囲にサッカー上手が多く、あまり目立つことは出来なかつたが、ここはそれほどレベルが高くないようだ。頑張った分だけ、どんどん他人を追い抜くことが出来そうだ。手応えを掴んだ鉄二は、一年生のうちにスタメンになつてやると闘志を燃やした。

この頃から、あけてもくれてもサッカー三昧の生活になつていった。残念ながら一年生のうちにスタメンになることはかなわなかつたが、しかし努力の甲斐もあり実力はかなり向上した。一年生になつてからは、かかすことの出来ない存在になつっていた。この頃のポジションは、主に右ウイングバックであった。

比較的顔立ちが良いので、女の子から告白されること度々であつたが、時間の無駄だとばかりに冷たく断り続けた。手編みのマフラーも手袋を渡そうとしてくる娘もいたが、鉄二は断固として受け取りを拒否した。しかし食いしん坊なのでチョコやクッキーなど、食べ物はいつも大歓迎だった。

サッカー三昧の生活を送つているとはいいうものの、名門校ではないのでスタメンである自分の実力というものがいまひとつ分からない。練習試合も県大会もほとんど勝つことがないのだが、自分が弱いのか、チーム全員が弱いのか、それとも相手が強いのか、どうにも分からなかつた。

自分を試したい。努力してきた結果を確認したい。そんな理由で、道内ではサッカーの名門とされる大学に進学した。

大学でも自分の実力はそれなりに通用した。スタメンから外れることはあっても、ベンチからも外されることはなかつた。名門校でも、自分の実力は通用する。鉄二は勉強そっちのけで、ますますサッカーに没頭した。

そして数年の歳月が流れる。卒業を控え、卒論や就職活動に忙しいなか、友人からJリーグの入団テストのことを聞いた。興味を覚え、受けてみることにした。

結果は散々であった。技術はあるがセンスがない、もう十代ではないから伸びしろがない。と面と向かつて現在と未来とに対して駄目だしをくらつた。「永遠に」にいや、カスチームが!」と叫んで試験場を飛び出すものの、その道のプロの判断なのだ、悔しいがその通りなのだろう。

とりあえず、人間生きていいくには食わねばならない。食つていいくためには金が要る。金を得るためにには働かねばならない。と、就職活動を継続したものの、まだまだ不況の真っ只中でなかなか内定が決まらない。一生を左右するかも知れない問題だ、希望する会社のレベルを落とすかどうか悩みどころであつた。

そんなある日、サッカー部の飲み会に久しぶりに参加した。気分がぐさくさしていたので、単なる気晴らし憂さ晴らしだ。O.B.が何名か来ており、その中の一人である、東北の製菓会社で働いている先輩に就職活動のままならないことを打ち明けているうちに、「ながら、うちで働くのかないか」と声をかけられた。かれこれ三年ほど前の話である。

3

「おはよう

鉄二「はいつも朝の八時二十十分に職場につく。仕事は九時からの

でちょっと早い。特に昨日の仕事を整理するわけでもなく、ただいたずらに時間を潰すだけだ。

「おはよう

「元気な若い女性の声。普段は同期入社の桜庭周夫が一人いるだけなのだが、今朝は彼はまだ来ておらず、かわりというわけではないだろが吉野江美の姿があつた。鉄一より一歳年下。鉄一の妻である琴美とは、同期の仲だ。」

「吉野、今日は早いな」

「なんかめちゃくちゃ早く起きちゃつてさあ。ゆっくりと会社に歩いてこよつと思つたんだけど、あたしつてゆっくり歩く」と出来ないのよね。予想してた通り、えらく早く着いたやつた」

「おれも、ゆっくりよく噛んで、つてのができるねえなあ。琴美に、もっとちゃんと噛めつていつもいわれるんだけど、噛んでるとすぐ口の中から食べ物が消えちゃう」

「あ、それなんか分かるなあ。分かるけどスポーツ選手なんだからそういうのちゃんとしたないと駄目でしょ！ 琴美だってそりや心配するよ」

「はい。気をつけまーす」

「で、琴美はどうなの？」

吉野はお腹をなでた。

「順調。もう、こんなだよ」

鉄一は、吉野のお腹の前で大きく手を動かした。

「自分のお腹でやりなさいよ、そういう仕草は。九ヶ月だっけ？」

「そう」

「じゃ、あとちよつとじやない。テツ君も、いよいよパパかあ

「そうだな。でも実感は全然わかないけどね」

「女はね、自分のお腹の中で命が生まれて育つていくんだもん、そりや出産前から実感つてもんがあるんだろうけど、男は育てていくうちに、だんだんと実感がわいてくるもんなんだよ。多分、生まれたばかりの時なんか、猿みてえこれがおれの子供がよつて思つよきっと」

「ひょつとして経験者かお前？」

「そういうもんなの！」

続いて、子供に付ける名前の話題で盛り上がりつつあるうちに、いつもより少し遅れて桜庭周夫が出来してきた。

八時五十分には全員揃つた。

七名だけの小さな部署だ。

主に庶務課のような仕事をしている。他、広報活動や応援の手配、人数が足りない時には自ら応援に行くこともある。イベントの企画を任せることなどもある。

それなりに忙しく、その日に終わる仕事ばかりではない。鉄一はサッカーの試合があるため、どうしても自分の担当になつた仕事を手放さなければいけない時がある。中途半端な状態の仕事を引き継いでくれる同僚には、本当に感謝している。

4

今日は三時に仕事が終わつた。木曜や金曜など、試合が近付いてくると、早く終わらせてくれることが多いのだが、今日は火曜日、珍しい。

蓮見製菓野々部工場第一グラウンド

一番乗り。

ボールを二つ、両脇に抱えて持つて来た。
ドリブル練習。

相手をイメージし、それに合わせて自分の動きも変える。大きな相手。小さな相手。スピードのある選手。もたもたして取り囮まれる前に、強引に抜く。独走だ。

GKが飛び出し、体を横に倒しながらボールを奪おうとする。その一瞬前に、つま先でボールをちゃんと浮かす。見事なループ。

ボールはGKの体の上を越え、ゴールの中に転がり入った。
ハズミSC先制点！
優勝です！

つてそんなわけないか。

一人きりでいるのも、思つたより退屈だ。

久々にリフティングに挑戦してみる。

十秒ともたず、ボールが落つこちてしまう。中学生の頃にくらべれば単純に何倍かに伸びているが、たつた数秒の違いしかなく、全く成長していないも同然だ。試合の際のボールさばきはそれほど下手ではないと思うのだが、リフティングだけが何故こうも上達しないのだろう。

そのうちに、一人、二人と集まって来て、五時から全体練習が始まった。

5

「はなやん」の店内がえらく賑わっている。テーブルも座敷も一杯だ。はなやんは野々部駅のそばにある焼肉屋である。

満員なのは人気店だからというわけではなく、もともと狭い店に、今日は団体客が入ったというだけの話だ。

ビールの匂いが肉を焼く煙に燻されている。

「コウさん、ビール注ぎます」

轟祐司は、先輩の空になつたジョッキを目がけ、ビール瓶を伸ばして来た。有村耕平はジョッキを傾けて、その行為を受け入れた。

「ほんとは女の子の酌がいいんだけどねえ」

有村耕平はしみじみと呟いた。

「コウさん、それ酷いっス。いろんな意味で」

「え、なにがさ」

「おれのごつい手じや嫌だつての分かりますけど、ほら、おれ幹事じゃないですか。本当は女の子が何人か来るはずだつたんスよ。間際でキヤンセルされましたけど。おれの手腕のいたらなさに、おれ自身が落ち込んでんですから、追い打ちかけるようなことをいわないでくださいよ」

「なんだあ、女の子が何人か来る予定だつた? あほ、そりやいた

らなさすぎだよ。お前サッカー馬鹿で、女の子とろくに話も出来ないから、きっと陰で気持ち悪がられてんだよ。一応社交辞令で行くといったものの、お前みたいなのがたくさんいるんじゃあ断つちゃおうかってドタキヤンされたんだよ。幹事に向かねえやつだな。幹事つてのは、女性を何人集められるか、集めた女性でいかに男の気を良く出来るか、どどのつまりはそれだろうが。お前いつも女の子と話す時、なんだかワンテンポずれてるけど、きっと頭の中で相手のいつてることサッカー用語に置き換えてんだる。まあ、安心しろ、今度彼女らに、祐司はサッカーだけじやない、結構スケベだつていつてやるから

「いいつすよ、なにを人の悪口をそもそも恩着せがましく……。つーかさあ、追い打ちかけるなつていつてんのに、畳み掛けるように捲し立てやがって。コウさん、あんた人でなしだ！」

「おーっ！」

と有村が首を轟と反対の方に向け、激しく拍手をしている。全く轟の悲痛な叫びなど聞いやしない。ついさきほど座敷席でゲームをやっていて、業平橋とヨントスが罰ゲームでショートコントを見せられることになっていたのだ。やつとネタ作りが終わり、披露することになったのだ。

だがそれは、誰をも不快な気持ちにさせる最低最悪レベルのコントだった。素人でも、もう少しみんなを笑わすことが出来るだらうに。

コントを終え、業平橋とヨントスは席に着いた。ヨントスは受けたかどうか分からぬといつよりも、そもそも笑わすことが目的といつことを理解していなかつたようだ。あまりの堂々とした態度から、そうとしか思えない。

「いや、日本の夏は本当に蒸し暑いね。最初さ、みんなムシャツイムシャツイいつているから、え、どこに熱い虫がいるのって探しচやつたよ。探したら、道にでんでん虫がいたからさ、わたし最初、でんでん虫のことムシャツイだと思つてたよ。最初もなにも、真実

知ったのつい昨日の話

楽しげに喋っているヨントスの顔を、水田恭助は啞然とした表情で見ている。

「……おい、ヨントス一人で喋らしてるほうが、よっぽど面白いぞ。キュージ、お前がセンスないんだよ。もつと相方がブラジル人なの活かせよ！ 面白いネタがないならさ、ケツに犬の顔でも描いておいて、突如ズボンとパンツ降ろして、うーウン！ てやってりやいいんだよ」

「それただの変態芸つすよ！」

業平橋球児が抗議の声をあげる。

「ネタがないならぬで、勢いで笑わすのが芸人だろ？が！」

「おれ、芸人じやないす！」

「おれが新入りの時なんか、もつと凄い」とやらされましたよね、瀬賀さん」

水田は身を乗り出して、サッカー部OBの瀬賀太郎に声をかけた。「ええ、そうでしたっけ」「ええ、そうでしたっけ」

瀬賀太郎はとぼけてみせる。

「映画ワイルドウルフ水田恭助物語が作成されたら、絶対にはしょられるシーンですね。映倫に引っかかること間違いし。……ねえ、瀬賀さん」

「近い席だからって、いちいちボクに振らないでくださいよ」

瀬賀太郎は、非常に物腰が柔らかく、誰に対しても敬語で接する。しかし、言葉遣いと性格は一致しないことを水田恭助は嫌とうほど思い知らされている。

「近い席だから振つてんじゃないですよ。瀬賀さんがやらせたんじやないですか。一発芸を拒否したら、そうですかスタメンに興味ないんですか、とかいつて」「記憶にないなあ……」

瀬賀はにこにこと笑みを絶やさない。

同じOBでも、瀬賀の隣に座っている木場直樹は外見的にも内面

的にもまるで正反対だ。瀬賀が現役引退して筋肉が落ちて痩せてしまったのに対し、木場は現役引退して別人かと思えるほど大幅にボリュームアップした。瀬賀は物腰の柔らかさと裏腹にちょっと意地が悪いところがあり、木場は顔のいかつさと裏腹に気配りが行き届き、人に親切である。しかしどちらのOBも、後輩から好かれていることに違はない。

木場は、秋高鉄二とサッカーの話に夢中だ。

「だからよ、ここでお前がこいつ……プレスかけるわけよ。仮に失敗しても……ほら、業平橋がこう動いておきや、ヨントスにもそんな負担かからない」

熊のような大男、木場はテーブルの上に置いたおちょこを選手に見立てて講釈をしてみせる。

「いや、それは理想論ですよ。相手がそう動くとは限らない。……おれなら、こいつ」

秋高鉄二もおちょこを動かしてみる。

「そりや、いまと変わらんだる。行き詰まつてんだよ」

「いや、もつと連携を深めたほうがいいですよ。変にこじらない」

「余裕ないだろ。本当に入れ替え戦に行くぞ。……まあ、おれたちがあれこれいってても仕方ねえか」

「監督次第ですからね。……」一から来た友井、あいつの能力次第によつちや、それに合わせて全体のシステムを変更するみたいなこといつてるし

「今までの熟練度はどうすんだよ」

「木場さん矛盾してますよ。一か八かみたいなこといつといて今度は熟練度ですか」

「なんでもいいんだよ、おれはよ。入れ替え戦行きさえ回避出来れば」

「みんなそう思つてますよ」

「そういうえばよ、お前、駅前で高校生の女の子のバッグ取り戻してやつたことがあるだろ」

「ああ、もう何ヶ月も前だけど、なんで知つてんですか」

「その女の子がよう、お前のことが気になつて、なんとなく試合観るようになつて、すっかりサポーターになつちまつたようだぜ。コニフオームまで着てや」

「へえ、嬉しいな。お礼について喫茶店で「コーヒーおじつでもらつたんですよ。そこで色々話したんですけど、凄い変わつた、面白い娘でしたよ。髪なんか、こつ、獅子舞みたいな感じで」

「いや、短めの髪で、とんでもなく可愛い顔してたぜ。確かフーコちゃんて呼ばれてたな、一緒にいた女の子に」

「とんでもないは大袈裟でしょう。しかし木場さんは女の子の名前は絶対忘れないですね。奥さんにぶん殴られますよ」

「お前こそぶん殴られてんじゃねえのか。もづじき産まれるつてのに、倉田、じやなくて琴美さんに全然気遣い出来てなさそだもんな。女の子だつたら名前はじー子ちゃんとかくだらねえ」といつて、イライラさせてんだる」

「失礼な。ちゃんと氣を遣つて接しますよ」

だいたい飲み会は水曜日に行われる。金曜だと、日曜の試合に差し支えがでるからだ。

みんなおおいに飲んだようだが秋高鉄一は酒にはほとんど口を付けなかつた。日課である就寝前のジョギングを、どんな日であれかかしたくないのだ。

今日は練習を早めに切り上げて、六時から八時までの飲み会。しかし鉄一はお開きになる三十分前に、席を立つた。みんな出来上がりてくるので、強引に日本酒の一気のみをさせられではかなわない。それに、八時閉店のケーキ屋にも寄りたかった。親睦を深めるためとはいえ、自分で焼き肉屋で皿い物を食べるのも気が引ける。

ケーキショッピング、ノワゼット。小さいが、意外に品揃えの充実したケーキ屋だ。周囲にケーキ屋がないため市場独占状態だが、それにおいのことなく、価格、品揃え、接客態度など、どれをとっても

問題がない。

栗のモンブランと、いちじるのショートケーキを一つずつ買った。ドライアイスと一緒に箱に詰めてもらっていたりと、店の奥のほうで電話のベルがなった。

「フリーちゃん出て！」

若いが野太い感じの男の声。

「はい」

フリーちゃんと思われる女の子が電話を取ったようだ。ちょっとたどたどしい感じだが、大きな声だ。やけに威勢がいいな。頑張っている感じで気持ちいいね。あれ……フリーちゃんて聞き覚えがあるような……この声、どつかで聞いたような……まあ、いいや。気のせいだろう。

鉄一は店を後にした。

6

少し時間が短かったとはいえ、今日もせんざん全体練習で汗をかいたというのに、飲み会を終えて帰宅するとすぐジョギングに出かける。体をしつかり疲れさせて、深い睡眠を得たいのだ。鍛錬法であり、健康法であり、習慣付いておりこうしないと眠れない。

雰囲気で酔えるタイプなので、酒はほんの少量しか飲んでいない。ジョギングから戻ってきて、寮の前で軽くストレッチ、部屋に入つて今度は床に寝そべってのストレッチ。これを怠ると、単に披露を蓄積させるだけになってしまつ。

「シャワー浴びて来て。」『飯並べとくかい』

琴美が壁にかけてあつた座卓の脚を伸ばす。

食べて来たとはいえ、肉と枝豆だけだ。必要な栄養を摂取出来ていない。だから、普段と同じ夕飯のメニューを少量づつとつたいいのだ。

鉄一がシャワーを浴びて四畳半に戻つて来ると、座卓の上には小皿がたくさん。煮豆、ほうれんその「まあえ、ひじき、冷や奴、

里芋の煮物。

簡素な食事を終えると、も「ひじきじじい」とばばあになる札幌の両親に、近況報告の電話をした。両親は元気そつだった。

秋高夫婦は十一時頃に、布団に入る。

少し会話を交わすと、今度は思い思いに好きな雑誌を読み、十一時半頃に部屋は真っ暗になる。そしてまた、就寝前の軽い会話が始まる。

「……じゃ、しゅうと君はどうだ？」

「それも駄目」

「ひうる君」

「どんな漢字よ」

「はつと君」

「あのや、サツカーから離れてよ。それになんで男の子と決めつけるの」

「じー子ちゃん」

「殴るよ」

一人は生まれてくる子の性別を確認していない。事前に知つておいたほうが子育て用具の準備には便利だろう、しかしそれは親になる楽しみの一つを捨てたようなものだ。これから大変なことは分かっている、だから少しでも子育てを楽しめるように工夫していくたい。そう一人の見解は一致している。

暗闇の中、鉄一の寝息が聞こえてきた。

琴美も追いかけるように由らの夢の中へと入つていった。

1

「やっぱりいいわあ、友井は。いぶし銀といつかなんというか」
近藤悠子はしみじみと呟く。

八月十七日、日曜日。JFL後期第十七節。

友井芳樹。加入したばかりのDFだ。J1のチームで能力的、戦術的な問題で使われていなかつた選手であつたが、それを今回格安でレンタルしてきたのだ。JFLレベルでは、役立つに決まつている。サポーター達は友井のモチベーションの低下を危惧していたが、どうやら大丈夫そうだ。

ハズミSCは開幕から前節までずつと三・五・一の布陣だったが、今節は四・四・一だ。

CBをつとめるのは友井と、J2からたびたびオファーのある岡崎だ。4バックの真ん中としてはJFL最強といつても過言でないだろう。

しかしサッカーは十一人対一人で行う競技である、二人だけで守備出来るものではない。全体としてもよく耐えたほうだが、結局後半三十六分に相手のセットプレーから失点してしまい、現在〇一でリードを許している状況だ。運悪く失点したものの、全体的な内容としては格段によくなっている。もう少し守備陣の連携がよくなれば、前線も活性化してくるに違いない。そうハズミSCサポーターに期待を抱かせるゲーム内容だ。

近藤悠子の隣には、佐久間風子が座っている。悠子の恥も外聞もないような叫び声に比べればまだまだだが、風子も他のサポーターと一緒に応援の声をあげたり、無意識のうちに色々と言葉を発するようになってきていた。「ゆ」「う」「じゅ」「じゅー」も、悠子から十分に及第点を貰っている。

サポーターの必死の応援も虚しく、タイムアップを告げる笛が鳴

つた。

今日も負けてしまった。

秋高鉄一の、ポスト直撃のミドルショート……」最近の試合で一番惜しいと思えたシューートシーンだった。残念といえば残念だが、ボランチである鉄一が流れの中であそこまで上がれたのだ、あそこまで相手を崩し、フリーな状態からシューートを打つことが出来たのだ。一部のサポーターからは激しいブーイングが起きたが、ほとんどのサポーターは選手達に拍手を送った。

「今日も負けちゃいましたねえ」

風子は、若い男に声をかけられた。

試合前にサポーターの交流会が行われるのだが、最近風子は、悠久子と一緒にだからとはいえ、その輪の中に入つて行けるようになつた。今日も、お店の余りものの焼き菓子をたくさん持つて配つたところ、喜んで食べてもらえた。男は、その中にいた一人だ。

風子は応える。

「はい。……でも、どんどん良くなっているのが分かつて……なんだかわくわくしますね」

風子は帰宅し、一階の自室で着替えを済ませると、重たい体に鞭打つて、一階居間のiMAGICで本日の試合詳細を確認する。公式ページで試合の流れ、監督や選手のコメントを読んでいると、あらためて今後への期待感がわいてくる。

トップページのお知らせ欄に、秋高鉄一選手、第一子誕生と書かれていた。

結婚、していたんだ。

子供は女の子だった。

笠原が突然金切り声を張り上げた。

バッグの中身を全部机の上に出し、中を覗き込んでいる。続いて、

机の中身を全部床にぶちまたた。

「どこにもない。誰か、あたしの財布知らない？　体育の前には、絶対にあつたんだよ、バッグの中に！　誰か盗んだんじゃない？」

「クマじやねえの？　なんか笠原のバッグ漁つてたような気がすんだけど」

遠金恵理香が、小指を耳に突っ込んでかきながら、氣怠そうな表情をしている。

当然全員の視線が風子に集中する。佐久間風子は反論せず、黙つて自分の机に手を突っ込んだ。教科書やノートなど授業道具を取り出して机の上に積んでいく。単にないことを証明したかつただけなのだ……

風子の手に財布が握られていた。

「あたしの財布だ！」

笠原が叫んだ。

「やつぱりだ。ついにこいつ、人の財布に手を出しあがった。最低な奴！　泥棒！」

遠金が表情を急変させ、樂し気な笑みを浮かべて、はしゃぐように叫び出した。

風子は席を立ち、笠原に歩み寄つた。

「誰かが……入れたんだと思う」

笠原は奪い取るように、自分の財布をつかみ取つた。とほとんど同時に、風子の胸を突き飛ばしていた。風子はよろけ、床に尻餅をついて倒れた。

「あんた、この前の」と、まだ根にもつてたの？　ねちねちして、気持ち悪い。ほんとに嫌らしい性格！　だからいじめられるのよ「根にもつなんて……そんなこと、思つてない。それに……財布だって、盗んでいない」

「盗んでないわけないでしょ。なんであんたの机の中にあるの？」

「誰かが……」

「誰よ。 いつてみなさいよ」

「それは……」

「ほら、 いえやしない」

当たり前だ。 誰が貶めたい本人のいるところで、 他人の財布を盗んで机に入れるものか。

「人のせいにしようとして、 ほんと最低だね。 恥ずかしいと思わないの？」

「知らない…… 本当に……」

全員、 特に女子の冷たい視線が鋭い刃になつて、 風子の心臓を斬りつけてくる。

「犯人は佐久間じゃない！」

小橋雄太が立ち上がつた。 がりがりで色も白く、 まさにもやしという表現の似合う男子生徒だ。

しんと静まり返つた教室で、 小橋は続ける。

「おれ、 またお腹壊してよう、 体育の授業に大幅に遅れちゃつて。 体育着を取るために教室に来たら……」

小橋は携帯電話を取り出した。

なにやらボタンを操作すると、 ノイズ混じりの音声が流れ出した。

「…… んだよそんなこと。 笠原がクマから金をぶんどつたつてい

うじやん。 だから、 クマの机に財布入れとけば絶対信じるつて。 笠原、 単細胞だしさ」

「クマのやつ、 隠して自分のもんにしちゃうかもね。 財布見つけたーつて」

「そんな度胸ねえよ、 あんなやつ。 おろおろした挙げ句、 正直に差し出すよ。 誰かが入れたんだとかいつて」

「信じるわけないよね。 そしたら、 笠原怒っちゃうよねえ」

「あいつ凶悪に底意地が悪いからさ、 クマが犯人だと思つても思わなくても、 いきつかけとばかりに、 クマのこといびりはじめる

だろうね。財布がそのままなくなっちゃったっていいや、そしたら笠原さまみりだ。あの女も、むかつくながらな。あいつ、顔がいじめられっこみたいだから、自分がいじめられないようこいつも他の誰かを標的にしてたいんだよ」

聞き間違えようはずもない。それは遠金たち三人の会話だった。

「ふざけんな小橋、馬鹿野郎」

遠金は小橋の携帯電話をたたき落とした。

「録音してんじゃねえよこのアホ！」

さりに遠金は小橋の顔を握り拳で殴りつとする。風子が間に割つて入った。顔面をグーで殴りつけられた風子の顔が苦痛に歪む。たた、と後ろによろけた。

「わ……悪いのは……そっちだと思つ」

風子はきつと遠金に視線を見据えながらいった。

「つるせえな、おめえぶつとばすぞ」

遠金は声を荒らげた。

「ちょっと遠金さん、わしきの声、どうこういふこと？ あたしの財布がそのままなくなつてもざまみりつて、どうこういふこと？ 詳しく教えてもらいたいんだけど」

笠原香が頬をひきつらせていた。

まだ体が震えている。
怯えているのではない。
なんと表現すればよいのか分からぬ感情が頭の中を支配している。

なんだろう。
この感覚。

自分は、変わってきている。

それが、果たして成長と呼べるようなものなのかは分からぬ。
だけど自分は今、このまま進んで行きたいと思つてこる。

この先にあるものを見たいと考えている。

自分に戦いを挑みたい気持ちだ。昨日、一分前、一秒前の自分に。

3

風子はようやく入る部活を決めた。一学期になり、担任が毎日のようにうるさくいつてくるようになったからだ。

以前、一年生の鈴内達也がサッカー部に入るようすすめてきた。だが風子は、運動部に入るつもりは毛頭なかった。自分にとつてサッカーとはハズミの観戦以外にはない。

そもそもスポーツそのものに、あまり関心がない。だから、サッカー部のマネージャーになることにも興味はない。

風子が選んだのは、プラスバンド部だつた。

最近まで、部活に入るのなら幽霊部員でも通じるようなところがいいと思っていた。参加するつもりが全くなかつたからだ。しかし今は違う。精一杯部活に挑戦してみるのも悪くないと考えている。アルバイトの時間が削られてしまつのは痛いが、仕方がない。

放課後の廊下を歩いていると、遠金達三人と出会つた。三人は憎々し気な表情を隠しもせず、風子にぶつけている。風子は黙つて通り過ぎた。

足音が追つてくる。ちょっと怖くなつて歩調を速めるが、背後の足音もテンポが速まる。

ついて来ている……

「お、彼女、部活決めたんだつて？」

階段への曲がり角のところで、鈴内達也と出合つた。

「プラバンだつて？」

いつたいどこから仕入れた情報だ。

「はい」

風子は頷いた。

後ろが気になつて仕方がない。

「もう九月だし……中学の頃からやっていた人が多いそうなので大変だと思いますけど、気にせずに自分のやつてみたいことをやってみようと思って」

「そっか。しつかり頑張るんだぞ一年生」

鈴内達也は風子の頭に、ぽんと手を置いた。

「はい」

鈴内達也は去つて行つた。

風子は後ろを振り返る。遠金達の姿はなかつた。

4

「おい」
駅前通り、アルバイト先に向かうため自転車を押して歩いていると背後から呼び止められた。

振り返つてみるともなく、遠金達だつた。

「今日は、さんざん口けにしてくれたねえ」

遠金はひきつった笑みを浮かべている。

「別に、そんなこと……」

「記憶力がねえのか、てめえは！ 思い切り馬鹿にしたろうが」「……していい……」

「笠原と大喧嘩になつちまつじ」

「そ、それは気の毒だけど、でも……」

「自分のせいじゃないみてえな顔してんじゃねえよ。こつちこつこ」

遠金は強引に風子の手を引っ張つた。自転車が倒れる。風子はなおも引っ張られ、慌ててなんとかバッグだけ拾い上げた。

風子はすぐ近くの小さな薬局の中に引っ張りこまれた。

「なんか一つかっぱらへ。そしたら許してやるよ」

耳元で遠金が囁く。

「そんなこと……」

「それで水に流すつていつてんだよー」

囁き声の語氣が強まる。

「……出来ない」

風子は小さく、だがきつぱりといった。
いきなり両の頬に平手打ちを受けた。

遠金はそばの棚から目薬の箱を一、二個掴み取り、風子のバッグを開いて入れてしまった。

「おじさん、こいつ、万引きします！」

狭い店内で、遠金は叫んだ。

一つ隣の島で陳列をしていた男性店員が飛んできた。
「ま、万引きって……君ら」

風子のバッグを見た。

「か、勝手に……押し込んだだけじゃない」

風子は目薬を取り出し、もとの位置に戻した。

「てめえ、適当なこといつてんじやねえぞ」

遠金は大声を張り上げた。

風子は棚のすき間にきらりと光るものを指さした。

防犯カメラだった。

「これに映っているだらうから……」「やべえ！」

遠金たちは脱兎のごとく素早く逃げ出してしまった。

「きみ、今の娘達と知り合って？」

「いえ……知らない人です」

その後、学校で何事もなかつたことから、どうやら通報はされなかつたようだ。

「あ、ありがとうございます、ケーキショップ、ノワゼットです。
……はい、お、お世話になつ……なつております！……はい。
……はい。さて、左様ですか。はい……では戻り次第折り返すよう伝
えます。失礼します」

受話器を置いた。

長い溜め息。溜め息は溜め息でも、安堵の溜め息だ。

風子は小さくガツツポーズを作った。

ケーキ作り補助の仕事に戻る。

トレイにぎっちりケーキを詰めて店頭へ出る。角度に注意をしながら、陳列していくのだ。

数名の客が、レジ前に並んでいる。今日は林聖一人きりなので、すぐに行列が出来てしまつ。

「お、お次、お待ちのかた、こちらのレジにどうぞー。」

風子は元気よく声を出した。

6

つま先に針で刺されたような激痛を感じた。
上履きの中に画鋲が入っていた。

以前は常に注意を払っていたのだが、最近はこうした攻撃もなく、すっかり油断をしていた。

教室に入ると、風子の机に彫刻刀かなにかで深く文字がほられていた。「死ね」と。

机の中に残しておいた教科書やノートは、全て、表紙にカッターで切り裂いたあとがあつた。

筆箱の中を見ると、鉛筆は全て芯が折れている。シャープペンの芯がケースに入っているが、これも全て折れている。外に出してから折つて、また戻したのだろう。

風子は引き裂かれた教科書を開いて授業を受けた。

まともな筆記用具がないため、まったくノートをとることが出来なかつた。

7

風子は体育用具室に来ていた。

「部活のことで話をしたいので、放課後、体育用具室で待つていい」という担任の伝言メモが机に置いてあつたのだ。不自然に思いながら

らも、結局来てしまつた。職員室に確かめにいくより、体育用具室のほうが近い。もしいなければ、そのまま職員室に行けばいいのだから。そう自分にいい聞かせていたが、おそらく距離が逆でも風子の行動は変わらなかつただろう。

用具室の扉を開けたが、案の定といふべきか先生の姿などどこにもなかつた。

扉を閉めようと手をかけたところで、背後から声をかけられた。

「誰を待つてゐるのかなあ？」

上級生と思われる男子が三人。

一人、見たことがあるのがいる。そうだ、遠金とよく一緒にいた。確か竹田といふ名だ。

三人とも柄が悪そうだ。

風子は嫌な予感を覚えた。

「……先生に……呼ばれて」

風子はおずおずと答えた。

「へえ」

竹田は薄い笑みを浮かべている。いきなり風子の腕を掴み、用具室に引つ張り込んだ。残る一人も後に続く。

ドアが閉められた。竹の棒で門がされた。

「おれたちがさ、先生だよ」

竹田はまた、風子の腕を掴み、引き寄せた。

「教えてやるよ、いろんなことをよ！」

竹田は風子の顔に容赦のない拳の一撃を浴びせた。最初の一撃が強烈なほど、相手はあっさり抵抗を諦める。獲物は、体操マットの上に崩れた。竹田は気味の悪い笑みを浮かべた。

竹田は少女の上にのしかかつた。

風子のスカートに手をかけて、上にまくりあげようとする。風子は抵抗するが、また容赦のない張り手をくらつた。

遠のきかける意識の中、男たちの声が聞こえる。

「竹田、独り占めすんなよ」

「わかつてゐるよ。それよりおさえる」

今度は横山が、風子の上に馬乗りになつた。

竹田は風子のスカートの中に手を突っ込み、下着を直接引き下ろそうとしている。

風子は声が出ない。横山の肥満した体に乗られているというのもあるが、それだけではない。恐怖で萎縮しているものもあるがそれだけではない。心中に、どこか他人事のような、冷めた、全てを諦めた自分がいた。

ああ。

またか……

結局、どう頑張つたて、なにも変わらないんだ。
もう、どうだつていいや。

竹田達の下品な笑い声。

自分に馬乗りになつてゐる横山のよだれを垂らしそうないやらしい表情。いやらしい息遣い。

中学時代の記憶が頭の中を駆け巡る。

阿尾敦子の恨めしげな表情。

少年達の楽しげな笑い声。

もう蹴らないで、おとなしくしてゐるから……
なんでも、いうとおりにしますから……

すすり泣き、懇願する自分。

またあの繰り返しだ……

いや……

違う。

違う！

もう、あの頃の自分じゃない。

唐突に、風子は叫んだ。なるで言葉になつていかない大声を張り上げ、体をよじり、暴れた。

足を振り回した。竹田の顔面に直撃しようで、鈍い呻き声が聞こ

えた。

風子はなおも叫び続けた。暴れ続けた。

風子に馬乗りになつていた横山が、たまらずマットから転げ落ちた。体が自由になつた風子は、足下にあるものを手当たり次第に拾つては竹田達に投げつけた。横山がソフトボールの直撃を顔に受け、鼻血を噴いた。

「おい、やめろでめえ！」

怒鳴る竹田は、ハーネドルをぶつけられ足にひつかかって転んだ。風子はまたソフトボールを投げた。ガラス窓の割れる音。

「な、なんだよ、こいつ、大きな声出さないからって……おとなしくやらせてくれるからって聞いてたのに、話が違うじゃんかよう」竹田達はなおも獣のように叫び続ける風子の正気の沙汰でない形相におそれをなし、たまらずに退散してしまった。

それでも風子は叫び続け、手当たり次第に周囲の物を蹴飛ばし続け、投げ続けた。

どのくらいそうしていたのか自分でも分からない。

気が付くと一人きりだった。

暮れかけた夕日が窓から差し込み、全てをオレンジ色に染めていく。

風子は力抜けたように、ロールケーキのように巻かれている体操マットの上に座り込んだ。

焦点の定まらない、うつろな視線。

風子は淡い光と静寂の中に包まれていた。

第七章 「キブリ食べたことがありますか

1

先日遠金恵理香によつて笠原香の財布が盗まれるという事件が起きた。それは風子の周囲の態度に多大な影響を与えた。

みんなで風子のことを責め立てた後ろめたさや恥ずかしさのためか、風子へのあからさまないじめと呼べるようなものはほとんどなくなつてしまつた。

遠金恵理香達にしてもそうであつた。周囲の空気が空氣なので手が出しにくいのか、目が合ひ度に睨みつけられはしたが、特になにをしてくることもなかつた。だが、先日の体育用具室での一件がある。油断は出来ない。

「はい、オレンジジュース。……つぶつぶ入りの」

風子は大橋道矢に缶ジュースを渡した。

「お、おう……さんきゅ……」

大橋道矢は、ちょっとばつが悪そうに受け取つた。

「他になにか」

「い、いや……ありがとな」

別に使い走りをさせられているわけではない。購買部に行くついでだから、と自分から買って出ただけだ。

「おう、サッカーマニア！」

教室の壁の窓に鈴内達也の姿。仲良しの大木弘と一緒に廊下を歩いていた。まったくの見ず知らずの時に、校庭で一回サッカーをしただけなのに、彼はよく風子に話しかけてくる。風子は別にサッカーそのものに興味はないが、JFLチームのサポーターであることが、彼にとっては十分にマニアックな趣味に値することなのだろう。

「どうも……こんにちば」

風子は軽く会釈する。

「どう、部活は」

「……まだ全然ですけど、マイペースでやつてます
「上手になつてさ、おれ達の試合を応援に来てよ。ぎょい～ん、で
けでけでけつて」

鈴内達也は、妙な声を発しながら、エレキギターだかベースだか
を弾く仕草をとつた。

「プラスバンドなので、そういう楽器はないんですけど……」

「あら、そんなんだ。まあいいや。じゃ、またね～」

鈴内達也は大きく手を振つて去つて行つた。

「ねえ、佐久間さん、タツちゃん先輩と知り合いなの？」

江藤佳枝、小林大子、森川拓美に取り囲まれた。

「……一緒に、サッカーやつたことがあるくらい」

「羨ましい！ 今度やるときは、絶対誘つてよ！ 別にサッカージ
やなくつても、なんでもいいから！」

森川拓美は風子の両肩を掴んで激しく揺さぶつた。

「は、はい……機会があれば……」

鈴内達也が面白い言動で有名人なのは知つていたが、そんなに女子にもてるとは知らなかつた。

「絶対よ、約束よ、あたし達友達よ、友達裏切るんじゃないわよ」

「はあ……」

なんと答えたらしいものやら、風子は困つてしまつた。

2

レス厳禁！ ハズミシについてみんなが思い思ひのこと
を語るスレ 【パート1】

726 : eiji : 200x / 09 / 21 (日) 02 : 16 :
08 ID : EKX3Ia1wq

ほんと弱いよな～。

727 : ハズミ命 : 200x / 09 / 21 (日) 02 : 24 :

56 ID : Kze432qox

明日こじそ点を取るぞー。

728 : てつ : 200x / 09 / 21 (日) 02 : 43 : 1

9 ID : o1b7smI5z

どうも、テツです。バスケ部からお呼びがかかったんで移籍します。

729 : SAM : 200x / 09 / 21 (日) 10 : 10 :

14 ID : bBydxx7xxo

この前、試合前の交流会で女の子がお菓子を持ってきてくれた。このスレ見ているかどうか分からぬけど、あらためてお礼ゆわせてください。

おいしかったです。

ありがとう。

730 : 怒りのおじさん : 200x / 09 / 21 (日) 16 :

39 : 02 ID : g12ps3pc1

メガホンじゃなくて手を叩け。耳障りだ。特に真後ろでやられるど。メガホンは声出すことに使え。あと、前に誰もいないからつて、席をがんがん蹴飛ばしてんじゃねえよ。繋がってるから、響いてくるんだよ。大人なんだから、最低限のルールくらい守れよ馬鹿野郎。ゴミもきちんと持ち帰れ。田舎物どもが。

731 : H&E : 200x / 09 / 21 (日) 17 : 09 :

42 ID : cqms77cos

一番後ろの席のあたりでさ、この前の2失点目の直後、「うわ、くせえつ」って思った人、ごめん。犯人才レ。

732 : FW原理派 : 200x / 09 / 21 (日) 19 : 5

8 : 5 1 ID : u q m v b c n 8

そろそろトドロキたん得点の三カーン。

7 3 3 : 吹雪 : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 2 0 : 3 4 : 1

5 I D : i x e h y a y t v

この前、帰りに駐車場のとこで財布落としたことに気付いてさあ。引き返して探してたら、手伝ってくれる人がいて、おかげでびぶの溝に落ちてたのを見つけられました。

名も言わずに立ち去った、11番のレプリカユニーを着ていた、ぽっちゃり体型の、色白の、チョビヒゲの謎の人。おれと同じくらいだから、身長170くらいの人。ほんとにほんとにありがとうございます。今度絶対見つけだして、なんかおごらせてもらいますからね。

7 3 4 : : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 2 1 : 0 4 : 0

4 I D : b c o k r o h 9 3

別にサッカーでなくてもよかつた。何でもよかつた。

いじめられ続けるのが嫌で、逃れたかつた。

好かれなくてもいいけど、構わない存在、意識されない存在になりたかつた。

自分を変えるしかないけど、どうすればいいのかも分からなかつた。

自分が異端だから目立つ。趣味があれば、なにかが変わるかも知れないと思った。

そう思っていた時、ひょんなことがきっかけで、ハズミンの試合を観に行くようになった。

応援することを通して、いろんなことを見つけられた。

前向きに成長していくことの大きさを教えてもらつた。

以前からのサポーターには悪いけれど、このチームが弱くてどん

底の状態の時に出会えてよかつた。

一緒に、少しづつ成長することが出来たから。

735 : 絶対残留 : 200x / 09 / 21 (日) 22 : 32 :
48 ID : qrtbtb3h5pm

オレの予想した初得点シーン。6バックなんかにしてきて、超守備的に行くと思いきや、全員で攻撃してんの。超攻撃的で、相手は防戦一方、でもなかなか得点出来なくて、あとちょっとでスコアレスドローかつて時に、テツからの折り返しを、駆け込んだヨントスがオーバーヘッドボレー。

3

梅村智子の足下に、ボールペンが転がってきた。

「拾ってくれよ、それ」

遠金恵理香の言葉に、梅村智子は一瞬の躊躇、複雑な表情を見せたが諦めたようにしゃがんでボールペンを拾うとしたといふ、誰かに蹴飛ばされてボールペンはさらに転がった。

「ごめん、気付かなかつた」

為井奈美絵がここにこと笑っている。

梅村は這いつくばるようにして右手を大きく伸ばしてきた。悲鳴をあげた。手を踏まれたのだ。

「ちょっと、なにふざけてんの、手なんか伸ばしてきて!」

橋本美紀は振り返り、怒鳴った。だがその口元には、うつすら笑みが浮かんでいる。ぎゅっと手の甲を捻られた梅村はまた悲鳴の声をあげる。

最近よく見る光景だ。

クラスの女子の半数近くが、まだ飽きもせずに誰かをいじめている。

実は梅村智子を新たな標的になるよう仕向けたのは、友人であるはずの笠原香だった。佐久間風子に攻撃の矛先が向かなくなつたこ

とにより、いつ自分にそれが向いてくるのかと恐れ、先手を打つて根回しをしたのだ。遠金とのいざこざがきっかけで、風子にカツアゲめいたことを行つたことがみんなに知られてしまつたが、そのときの責任をすべて梅村にかぶせてしまったのだ。

佐久間風子の足元にボールペンが転がつて来た。風子はボールペンを拾つた。遠金恵理香の表情が、睨み付けるようなどげどげしいものに変化した。風子は構わず、遠金の席へと向かつ。ボールペンを机の上に置いた。

「余計なことすんじゃねえよ」

「もう、やめよつ……そういうこと。人の気持ちを……もう少し考えて……」

「うるせえあ。なにを小学生みたいな幼稚な正義感振りかざしてんだよ、鬱陶しい。てめえ、またいじめられたいのかよ！」

「それで自分が恥ずかしくないのなら、そうすればいい」

あのいつもおどおどとしていた佐久間風子に、そうピッシャリといわれて、遠金恵理香は一の句を告げなくなつてしまつた。唇や頬をひきつらせている。

「梅村さん、大丈夫？ 手、踏まれてたけど」

風子は心配そうに梅村に手を伸ばしたが、しかしその手は強く払いのけられた。

「気安く触らないでよ！ 自分がいじめられなくなつて、ほつとしているんでしょう！ ちょっと前まで、うじうじしていたくせに、なにを偉そうに高いところから見下ろしてんの？ ほんと頭ぐる」

「余計なことだつたのだろうか。

他の人が酷い目にあつても、ほつておけというのか。
それが当たり前のだろうか。

今まで自分ことで精一杯だつたが、こつして少しだけ余裕ができると、ほかの人のことが目に付いて、あれこれと気にしてしまう。だがやはり、それは余計なことなのだろうか。加害者だけでな

く、被害者にとつても。

「てめえ、これっぽっちかよ、」の野郎

廊下の角を曲がった水のみ場のあたりから、声が聞こえてきた。

風子は足をとめた。

「だつてもうそんなお金……」

気弱な感じの、男子の声。

「どつかで盗んでくじや、いくらでも金なんか作れるだろ。馬鹿かお前は」

「いいから金持つて来いつつてんだよてめえー」

頬を殴るような、鈍い音が聞こえた。

どうしよう……

他のクラスの生徒の恐喝現場に遭遇してしまった。

心臓の鼓動が速くなつてくるのが分かる。

情けなくなつてきた。

ある程度の言動を取れるようになつてきたとはいへ、それは勝手を知る自分のクラスだったから。こういう場面に遭遇しても、おろおろするばかりで、なにも出来やしないではないか。

「おい、お前らなにしとるか！」

先生の怒鳴り声が聞こえたきた。

4

朝のホームルームも終了し、もう一時限目の授業が始まる直前。風子の姿は教室にはなかつた。つい先ほどまで、自分の席についていたはずなのに。

教室の校内放送用のスピーカーから、ガリガリと音が出た。チャイムもなにもならさずに、突然に彼女は喋り始めたのだった。

い、一年B組……佐久間風子です。

みなさん聞いて貰いたいこと、考えて貰いたいことがあります。

生きる意味って考えたことがありますか。

みなさん、どうして生きているのでしょうか。

生きるって、なんでしょう。

生きるとこ「うことは、自分が楽しむことですか。

自分が楽をすること、要領良く生きて行くことですか。

自尊心を満足させることですか。

気にいらない人を攻撃することですか。

なにかの感情を人にぶつけるからには、当然相手がいます。吹き出す負の感情の、はけ口の対象にされてしまった人が、どんな気持ちで学校に来なければならぬか分かりますか。

いまよりほんのちょっとだけでいいんです、隣の人に寛しくなつてみませんか。

相手がどんな気持ちでいるのか、想像してみませんか。

そうすれ……

佐久間、お前なにやつているんだ！

自分のしていることが分かっているのか！

がちやがちやといふ音がし、そして無音になつた。

「おーおー、クマスケのやつ、やつてくれたよー！」

1年B組の教室はどうと沸いた。突然のアトラクションに、みんな楽しそうに笑っている。

「遠金、お前のことじつてたんだぜきっと」

「一番ブー子のことじめてたもんな」

「ついに爆発しちやつたな、あいつ。退学する気じゃねえの？」

「いやだよ、こんなんやつてくれるんなら、毎日来てくれよ」

遠金恵理香は無言で立ち上がると、風子の机に近寄り、蹴り倒してしまった。倒れた風子の机から、中身が飛び出て床に散らばった。遠金はなおも無言のまま自分の席に戻った。

両手のひらで自分の机を力の限り叩いた。

一年B組の担任は、一時限田はD組での授業を行う予定であったが、急遽自習の時間に変更した。彼はいま、職員室で自分の席にいる。そのまま前には佐久間風子が立っている。

「全くお前は……」お茶をすすつた。「一学期にはトイレでタバコを吸つて停学になるし、問題ばかり起こす奴だな」「すみません」

停学の件は風子は無実だが、この先生にいいわけをして分かつてもらおうなどとは思わない。

「なにがすみませんか。謝つて済む問題か。放送室ジャックなぞして、やつていいこと悪いことの区別もつかんのか。だいたいお前はだな……」

風子は延々と続く先生の説教を黙つて聞いていた。自分の主張そのものは間違つていないとと思うが、ああいう場で、のように述べるものではない。風子は、今回の件は全面的に自分が悪いと思ってる。しかし、自分でも理解できないが、そうせずにいられなかつたのだ。ことを大袈裟にしてやりたかったのだ。

三十分ほどたち、説教がようやく一段落した。

「どうだ、反省したか」

「はい。……最初から、よくないことは分かつてました。反省した上でのぞみました」

「馬鹿かお前は、それは反省しとらんつてことじゃないか」

「そもそも何故こいつことをいいたくなつてしまつたのかをよく考えてみて下さい。……生徒一人一人から、田をそらさないで下さい。いいやすい生徒にだけいつてあとは知らぬふりするのもどうかと思います。そういうことがしつかりと出来ないのなら、教師という職業が向いていないんだと思います」

「生意気いうなこの!」

先生は目をかゝと見開き、立ち上がつた。

頬を張る音が響いた。

「親のスネかじつとるガキの分際で教師の仕事を云々するな。なにも分かつていないくせに」

すっかり興奮してしまっている。

「安喰先生、今時体罰はまずいですよ、すぐ問題になっちゃうんですから」

「親にいにしへけるなら、いにしへりやいにんですよ」「誰にもいいませんから。……では、失礼します」

「おい、佐久間、待て！」

風子は担任の制止も聞かず、立ち去った。

職員室のドアを開けた。

そこに、遠金恵理香が立っていた。

「ちょっと面貸せ」

口元には軽い笑みが浮かんでいるが、目は充血し、怪物のような異様な狂気を帯びていた。

6

「舐めたこと、いつてくれたねえ」

体育用具室に、佐久間風子と遠金恵理香の姿はあった。
遠金の言葉に、風子はただ沈黙している。

「あたしのこといったんだろ」

「誰にどうとかじゃない」

風子は口を開いた。

「自分の気持ちとして、いわずにいられなかつた」「でも、あたしのことだろ」

「そうかもしれない」

「ふざけんなよ、てめえ」

遠金の目が吊り上がつた。拳を振り上げ、殴りかかってきた。

直後、遠金の手は驚愕に見開かれた。突き出した手を、風子につかまれたのだ。もう片方の手を振り回すが、それも腕を掴まれてしま

また。

「離せ、この馬鹿」

佐久間風子は遠金の予想よりも遙かに腕力があった。火事場の馬鹿力というものが、はたまた普段の肉体労働の成果か。しかし遠金には腕力がどうこうではなく、抵抗してくること自体が信じられなかつた。いつも黙つて殴られ、土下座して謝つていたクマが。クラスのゴキブリ女が。

手をなかなかふりほどくことが出来ない。しかし荒っぽいことに慣れている遠金である、風子に前進し体当たりを浴びせた。風子はバランスを失い、よろけ、後ろの壁にぶつかった。遠金の手が自由になる。その瞬間を見逃さず、風子の髪の毛を掴んだ。こうすれば、顔面を壁にぶつけてやることも、顔面に膝蹴りを叩きこんでやることも出来る。と思ったのも束の間のこと、風子の手が伸びて遠金の髪をつかみ返した。と同時に、風子は残る片手で自分の髪の毛を掴む遠金の腕を激しくしめあげた。遠金は激痛に耐え切れず、風子の髪の毛を離してしまった。

今度は、自由になつた風子が遠金をついた。先ほどとは反対に、遠金が壁に背中を叩きつけられた。うめき声をあげる遠金。遠金のすぐ眼前に、風子の顔があつた。

「今まで、自分がなにをしてきたのか……考えてみて」

風子は遠金の顔を見つめている。風子の顔のあまりの表情のなさが不気味で、遠金は全身に鳥肌が立つた。

「やられたほうが悪いんだよ！　お前が馬鹿で、どんなにかつてことだよ！」

吐き捨てるようにいうと、遠金は風子から田を反らした。

風子はため息をついた。

めにはあおば やまほとじぎす さつがつお

静まり返つていた用具室の中、もの凄い音が響きわたつた。風子

が遠金の頬に渾身の力を込めた平手打ちを放つたのだ。

遠金はたまらず、もんどうり打つて床に倒れた。遠金は真っ赤になつた頬をおさえた。いつも見下していた相手に、冷たい表情で見下ろされ、遠金は軽い錯乱状態に陥つてしまつた。

「よしお、よしおー！この前の女がいるよ。早く来て！ 犯つちまつてよー！」

よしお、竹田の下の名前だ。

しばしの沈黙の後、風子はおもむろに口を開いた。

「……遠金さんの仕業だということは分かつていたけど。……でも……どうして、あんな酷いことを……」

「せして不幸でもないくせに、自分を不幸だと思ひこんで、じめじめして、戦おうともしない。そんなに自分を不幸と思ひこんで酔いたいんだつたら、本当に不幸してやりや満足だらう。……そう思つたんだよ」

遠金は風子と視線を合わせようとしない。

「そんな理由で……」

「あたしがなんでこんな嫌なやつになつたかなんて、てめえにや分からぬだろ！ む前、レイプなんかされたことないだろ！」

「あるよ」

風子は淡々とこつた。だが、過去の記憶に一瞬苦痛の表情を浮かべた。

遠金は啞然とした表情で風子の顔を見つめていた。
風子はゆつくつと語り出す。

中一の時、風子は同級生の男子数人に強姦され、処女を失つた。きっかけは、親友であった阿尾敦子との、ちょっとしたいさかいだった。風子に恨みを抱いた阿尾敦子は、男子に風子を襲つようけしかけたのだ。

男子に写真を撮られた。ばらまかれたくなればいふことを聞けと、ことあるごとに呼び出され、性欲処理の玩具にされた。

あまりに恥ずかしく、屈辱的なことであつたため、レイプされたことまではいえなかつたが、しかし親や先生にいじめられていることを相談した。

先生はいじめの現場をなにも知らず、様子を見るといつたきり、結局最後までなにもしてくれなかつた。

親に、学校に行きたくないと伝えたが、「戦わないから舐められるんだ」と無理矢理に連れていかれた。レイプされたことを黙つていてよかつた、こんな親では、それも自分が悪いことにされてしまう。

風子は何度も自殺を考えたが、どうしても死ぬことが出来なかつた。

そうじつしているうちに、もつ何ヶ月も生理が来ていないこと気に付いた。最初はストレスによる生理不順だと思っていたが、段々と不安になつてきた。

男子生徒らに打ち明けた。

みな最初は笑つて相手にしなかつた。本氣でいつていることが分かると、「おろす金なんかあるわけねえだろ!」と、彼らは風子を床に叩きつけ、血を吐くまでお腹を蹴飛ばし続けた。

その後も、風子は陵辱を受け続けた。

やはり生理が来ない。

お腹はまだまったく変化はない。しかし、変化してからでは遅い。恥ずかしかつたが妊娠検査薬を買ってみた。

結果は陽性だつた。五回検査し、五回陽性だつた。

当然といえば当然だつた。最初に生理が来ないことに気付いた段階で医者にかかるべきだつたのだ。

結局、同じ県に住んでいる祖母に、親には内緒にしてもうつて金を借り、中絶手術を受けた。

自殺すら出来ない自分の勇気のなさが腹立たしかつた。宿りつつも生まれることのない哀れな魂をつくつてしまつた。風子は悔やんでも悔やみきれない気持ちだつた。

ほんの数ヶ月で、風子はすっかり陰気な性格へと変わってしまった。クラスの男女全員からいじめられるようになるまで、さほど時間はかからなかった。

「でたらめいつてんじゃねえよー！」

遠金は叫んだ。

「……本当は、一生誰にも見せたくないんだけど」

風子は制服の裾をたくしあげ、お腹を出した。

遠金は思わず呻いた。吐き気を催し、口をおさえた。

へその周囲の皮膚がひきつれている。肉が裂けるほどに蹴られたのだろう。しかも赤黒く痣が残ってしまっている。

それだけではない。右腹から、左胸にかけて、肉が盛り上がり赤い線になっている。すっかり精神錯乱状態になつて相手の男子を刺し殺うとナイフを持つて襲いかかつたことがある。ナイフをもぎ取られ、興奮した男子に返り討ちにあつた。その時の痕だ。

「生きたゴキブリを飲み込まれたり、燃え尽きるまで背中に蚊取り線香を置かれたり……どんなに苦しいか、想像……出来る？」

風子は頭を抱えた。呼吸が乱れている。

もう殴らないで。

蹴らないで。

なんでも……いうことときますから。

「多かれ……少なかれ、人は……生きていれば理不尽な辛い目にあう。だからって、関係のない人間を攻撃していい理由になんか……ならない。……本当に地獄にいるかのような苦しみを味わつたのなら、そんなに苦しい思いをしたんだつたら！」

風子は遠金のお腹を蹴飛ばした。遠金は悲鳴をあげ、こみ上げる嘔吐感にまた口をおさえる。

「そんのは、たいしたことじやない、ただの肉体の痛み。……遠

金さんだつて、そんなん……ちつきいつたよつうな酷い目にあつたといふのなら、体も、心も、とても痛かつたはず。……でも、本当に痛かつたら……本当の痛み、辛さを知つてゐるなら、他の人と同じ目にあわせよひなんて思うはずがない。……きっと、その時に本当の苦しみといつものを感じなかつたんだ」

遠金は風子の顔を見上げた。

遠金は無表情に淡々と語る風子に恐怖した。

「だから……今から本当の苦しみつてものを、教えてあげるよ」

風子はドラム缶を思い切り蹴飛ばした。

がん、とこゝう音以外に、本来聞こえてくるはずのない音がした。聞いたことのない、奇妙で、不気味な音。

風子の足首が、本来曲がるはずのないほつこく曲がつていた。あまりの激痛に、風子は床にぐずおれた。

遠金は腰をふらふらさせながら立ち上がった。

「ば、馬鹿じやねえのかこいつ……自分で自分の足を折つちまこやがつた……」

遠金はふりつゝ呪取りで体育用具室を去つていつた。

風子は襲い来る凄まじい激痛をこらえてただもがくばかりだった。

7

「いよいよだなあ」

木場直樹がいった。

ピッチ上では選手たちがウォーミングアップをしてくる。

「そうですね」

木場直樹の隣には佐久間風子。脇に松葉杖をかかえている。風子の隣には近藤悠子がいる。

華鳴市立鳥ノ山陸上競技場、観客席の最前列だ。

風子の足の骨は、ほぼ治癒しているものの、まだ松葉杖はかかせない。

結局、携帯電話で救急車を呼んだり、職員室にいる先生に声をかけに行つたのは遠金恵理香だつた。

風子はあまりの激痛に涙目でお礼をいうのが精一杯だつた。

所詮は肉体の痛みだと格好をつけた直後だというのに、最悪に自分がみつともなく、恥ずかしかつた。脅かすためにドラム缶を蹴飛ばして、まさか自らの骨を折つてしまつなんて……

その一件から、すでに一月ほどが経過した。

遠金は以前ほどの荒々しさはなくなつて來た。おとなしくなつてきた。あまり喋らなくなつてきた。そして、つい先日、他県の高校に転校していつた。親の転勤が理由とのことだが、実際のところはどうなのか分からぬ。

遠金には全く恨みはない。別に同情も感じない。過去、同じような目にあり、自分はこうなり、彼女はあんなつたといつだけのこと。立場が逆でもおかしくなかつたのだ。奇妙な仲間意識すら感じている。といつても、もう会うことはないだろうが……

骨折してからも、風子はハズミSCのホームゲームには足を運び続けた。しかし願いも虚しく、ハズミSCは無得点記録を更新し続けた。

今日十月二十六日は、JFL後期第十三節、エアーズ和歌山との試合だ。

来期からJ2が一チーム、JFLが二チーム、とそれぞれ枠が増えることにより、今年のJFLでは入れ替え戦を戦わなければならぬのは下位一チームだけでよい。そして、現在ハズミSCがその最下位である。下位一番目である鎌田製鉄FCFCとは、最近まで勝ち点差がほんの僅かだったのだが、しかし鎌田製鉄FCが前々節、前節と連勝してしまつたため、少し離されてしまった。もしも今日、鎌田製鉄FCが引き分け以上、もしくはハズミSCが引き分け以下ならば、その時点でハズミSCの今期最下位が決定する。そうなれば、社会人チームとの入れ替え戦。それに敗れれば社会人リーグへ

と降格する。最近の守備陣を考えれば、社会人チームには負けないような気はする。だがサッカーはなにが起こるかわからないし、相手だってモチベーション高く挑んでくるだろう。最初から引き分け狙い、PK戦狙いで挑めたら、そうそう相手守備を崩せるものではない。普通に考えても不安要素がたくさんあるというのに、しかもハズミンチは魔女の呪いでもかかっているのか今年一得点もあげていないので。

一得点でもあげられれば、呪縛から解放される。そうなれば、この守備陣だ、負けるわけがないと思えるのだが。

風子、近藤悠子、サポーター達、そんな同じ思いを胸に、今日もこのスタジアムへと集まっている。

ハズミンチ、エアーズ和歌山の選手達がピッチ上に広く散らばった。

センターサークルの中央にボールが置かれる。

主審が手を上げる。笛がなつた。

ハズミンチボールでキックオフ。

開始早々からハズミンチの動きがどうにもぎこちない。点を取らなければ入れ替え戦行き決定、ということが焦りを呼び、冷静さを失わせてしまっているのだろうか。

バスは簡単にカットされてしまうし、相手のプレッシャーをなんとか凌いでも、ただ自陣でのろのろとボールを回すだけだ。出しこころがなく、適当なロングボール。相手にとられ、縦バスの速攻であつという間にピンチになる。ハズミンチのサポーターからは、自滅にしか見えない。

十分、二十分と時間が流れしていく。開幕時の守備陣だったたら、もう何点取られていたかも分からない。

「なんだか、もやもやするなあ」

近藤悠子はじれたそうだ。

「だな。こんなメンタルじゃ、入れ替え戦だつて厳しいぞ」

木場直樹が呟く。最近木場直樹と一緒に観ることが多い。秋高鉄

「一日く木場直樹は可愛い娘が好きなのだ。もちろん奥さんがすぐそばでしつかり見張っている。

「入れ替え戦なんて行かないよ。絶対勝つんだから！」

「そうだな、すまん」

「どうせ、鎌田製鉄FCなんてこれから負け続けるんだから。ハズミは今日から連勝。入れ替え戦なんかしないよ」

予想なんか願望なんかはたからはさっぱり分からない方だが過去の結果を考えれば、誰もが願望としか受け取らないだろう。

自分たちの動きの悪さから、結果、相手から怒濤の攻撃を受けることとなり、ピンチに次ぐピンチで、一瞬たりとも気の休まる暇がない。

入れ替え戦が……降格が近づいてくる。ハズミのサポーターからすれば、胃に穴が空きそうなほどストレスのたまるゲーム内容だ。

しかし、守備陣の奮闘と神様の分けてくれた幸運とで、ゴールを割らせることがだけはなんとか阻止し続けた。
そして、前半終了の笛が鳴った。

8

「じゃ、後半は6バックな。この前のやつやるから」

監督がどんでもないことを実際にやらつとこつてのけたため、最初みんなの頭の上に疑問符が浮かんでいた。段々とみんなの顔が蒼白になつていった。

「点取らなきやいけないのに、そんな……駄目ですよ」

田中英二がキャプテンとしての任務を果たす。殿の乱心を止めなければ。

「馬鹿、攻撃的6バックだよ。この前練習で何度もやってみただろ。とにかく全体をコンパクトにする」と、DFもボランチも全員FWになつたつもりでやること。いつ「とはそれだけだ」

「あれ、単なる遊びでしょうー」

「最初はな。ただ、行けそうなことを実感した。……驚かせてやれ。

面白い試合になるぞ」

別にメンバーを代表してではないが、田中英一は深いため息をついた。

ながーく息を吐いたと思うと、今度は深く息を吸い込んだ。
ながーく息を吐いたと思うと、今度は深く息を吸い込んだ。

「みんなもやれ。ほら、吐いて……」

田中は全員に何度も深呼吸をさせた。田中はいつの間にかにんまりとした笑みを浮かべている。それを見ているうちに、みんなの顔にも笑みが浮かんできた。そして、誰からともなく声をあげて笑いだした。

「こうなつたらさ、楽しむしかねえよな。がちがちしてちや楽しめねえからな。……勝てるかどうかなんて、誰にも分からん。相手だって頑張っているんだし、サッカーツてそういうもんだし。今日も失点するかもしれない。でも最後までボールを追いかけて、ゴールを田指そうぜ。もし今日負けたって、入れ替え戦に勝ちやいいだけだ。もし落ちても、強くなつて上がってくればいい。……みんな一緒にさ。そんだけのこつた」

超高校級として騒がれた過去のある元Jリーガーの、いわば社会人リーグ残留宣言であった。移籍先だってあるだろうに、しかしこれが彼なりのキャプテンとしての責任の取り方だった。

みんな無言でキャプテンの顔を見つめていた。前半開始前とは、あきらかに選手達の目の輝きが違っていた。

9

主審が手を上げる。後半開始の笛が鳴った。
ハズミSCは、後半と同時に選手交代を行った。

高山田優斗〇U-1。

水田恭助IN。

センターサークルでボールを持ったエアーズ和歌山のFWが、ま

ず後ろにボールを戻す。おいかけるハズミの轟。どのサッカーの試合でも共通の、平凡な始まり方。しかし思いのほか激しい轟のプレスに、エアーズ和歌山のMFは焦り、ボールを足下におさめる際にもたついてしまう。一気に轟が間合いを詰めるが、相手の焦つて蹴ったボールは運悪く轟に当たつて大きく飛んで行き、タッチラインを割ってしまう。エアーズ和歌山は、すぐさまスローイン。ほとんど一直線上に並んでいるようなハズミの守備陣の中から、岡崎健吾が巧みに飛び出しカットした。そして前線へ大きくフイード。ハイボールを処理しようとしたエアーズ和歌山のDFに、ボールだけを見て走り寄ってきた轟がぶつかって倒してしまつ。主審は轟に近寄り、イエローカードを出した。

「ああもう。……だいたいなによ、あのハズミのディフェンスは。ボランチが引き過ぎて、6バックじゃん。ボランチの位置に、司令塔の英二がいるよ。点取らなきやいけないのに、ガチガチに守り固めちゃって、なに考えてんの？」

近藤悠子はもどかしそうに叫ぶ。いらいらしてしまつて、タオルマフラーを引つ張つたり縮めたりと意味のない行動をとつてしまつている。

「あの監督、酒飲み話を本当にやつちまつとは。……悠子ちゃん、まあみてな。勝負の結果はそりや神様だつてわからんねえけど、面白いものが見られるぜ」

「いわれなくたつて最後の最後まで観るわよ」

しかしやはり悠子にはなにを考えての布陣なのかが分からぬ。面白けりやいいつてものじやない。

隣で風子は両手を組んで、祈るような気持ちで観ている。

両サポーターの必死の声援がピッチ上の選手達に届く。

エアーズ和歌山の七番、羅田圭一がボールを持った。JFL屈指のドリブラーだ。ドリブルの速度はさほどでもないが、とにかく器用で簡単にはボールを奪われない。ハズミのほぼフラットに並んだDF六人のうち、二人がさつと飛び出して取り囲み、ボールを奪お

うとする。羅田は自分を追い抜いていく味方の動きに反応して、ヒールでハズミSC側へ軽く蹴り出した。しかし、そのパスはエアーズ和歌山には渡らなかつた。残るハズミSCのDF陣に奪われたのだ。ヨントスから秋高鉄二にボールが渡る。そして鉄二から、やや自陣に戻り気味だつたFW有村耕平に。

田中英二は片手を高く上げた。

ハズミSC、反撃の狼煙だつた。

その直後、観客席、そして相手チームの選手は信じられない光景を目にする。

ハズミSCのDF選手六人全員のオーバーラップ。前方の味方を追い抜き、駆け上がる。

DFにボールが渡ると、FW、MFはややバランスを取り後方へ、瞬く間に、DFと、FW、MFとが完全に入れ替わつた。

観客席にどよめきが起きた。

「テツ！」

近藤悠子は叫んだ。

完全にマークする相手を見失つたエアーズ和歌山の選手達。秋高鉄二がバスと見せかけたフェイントでDFをかわし、一気にドリブル。ペナルティエリア内に入る。相手GKと一対一だ。GKは飛び出しスライディング氣味にボールを奪つた。鉄二は足を払われ、宙を舞い、地に落ちた。

主審の笛が鳴つた。

ハズミサポーターからブーイングが起こる。

だがこれは、PKだろう。得点機会阻止だ。ハズミのサポーター、選手達の胸は高鳴つた。

しかし、結果は予期せぬものだつた。

倒された鉄二にイエローカードが出されたのだ。

シミュレーション。PKを貰つたためにわざと倒れたという主審の判定だ。

ハズミSCのサポーターから、壯絶なブーイングが起こる。

「わざとなら、ああまで痛そうな顔しねえよ、テツは器用な演技のできるタイプじゃねえ」

鉄一は腰をさすりながら、自陣に戻っていく。

ハズミSCのポジションは全て元にもどっている。

エアーズ和歌山GKがキックし、ゲーム再開だ。

6バックの一人、友井芳樹が絶妙な勘と経験で落下点を予測、相手FWのほうが大柄だというのに、しつかり相手のゴールキックを奪つた。地に立つたまま、落ち着いて頭で田中へとバス。田中は胸でトラップした。

田中と轟とでボールをキープしている間に、再びDF全員がオーバーラップ。さきほどと比べれば対応されてしまつてはいるが、やはりマークのズレにより混乱している。その守備の間を縫つて、ボランチの位置にまで下がつたセンターウィンの轟が飛び出し、友井芳樹とのワンツーで相手を買わし、シユート。エアーズ和歌山のキーパーは反応出来ない。しかし、ボールは惜しくも枠の上へと飛んで行つた。

だんだんとエアーズ和歌山の攻撃陣が薄くなつてきた。いや、守備陣が厚くなつてきたのだ。ハズミSCに点を取られたチームはまだどこにもない、スコアレスドローならばまだいいが、もしも点をとられたら……そんな気持ちが大きく影響してしまつてはいるのかも知れない。いつのまにか、前半のハズミSCのように、全く楽しんでいなさそうなサッカーをしてしまつてはいる。

反面、躍動感にあふれるのはハズミSCである。

自陣に引きこもる相手に、ハズミSCは波状攻撃で何度もエアーズ和歌山ゴールを脅かす。

自陣深くボールを回す相手に、DF全員オーバーラップは全く効果がないし、ハズミSCだつて体力消耗する、しかも失点のリスクが大きすぎる。サッカーというよりは、曲芸の類だ。正攻法で優位に戦えるのならば、それが一番良いのだ。このように相手を自陣に押し込めてしまうこと、それこそが監督の狙いだった。作戦は、見

事に的中したといえる。

しかし相手のゴールはかたく、なかなかこじ開けることが出来ない。怒濤の攻めを見せるほど、相手はより自分の殻に閉じこもってしまう。

刻々と時間が流れていく。

そんな中、ハズミSCに一つの悲劇が起きた。

まず、友井芳樹の負傷退場。レッドカードでもおかしくないような羅田圭一の悪質なファールに見えたが、それはサポートーの巣窟目というものだろうか。羅田にはイエローカードが出されただけだった。

交代要員として、渡辺輝彦が入った。朴訥とした雰囲気の、風子が気に入っている選手だ。

数分後、二つ目の悲劇が起こる。

エーズ和歌山のFWと岡崎健吾が接触した。互いに上空のボルだけを見てしまい、相手に気づかなかつたのだ。二人ともピッチ上に倒れ込んだ。

主審の笛が鳴った。倒れている一人に近寄ってきた。主審はためらわず、岡崎健吾に向けてレッドカードを出した。

客席がいつせいに爆発した。

納得いかない、というゼスチャーで主審に詰め寄るコントス。今度はコントスにイエローカードが出された。

「これがレッドで、さつきの友井に怪我させたのがイエロー？ わけわかんない！ その前だつてテツのシユミレーションとなるし。なんかむこう、選手が十二人もいるよ！」 審判、敵だ！」

十一対十、悠子にいわせると十一対十でゲームが再開した。

結局、ハズミSCは防戦一方に回らざるを得なかつた。

田中は、なにやら大きな身振りで味方を励ましている。「六枚が五枚になつただけ、気にしない気にしない」とでもいつているように見える。しかし、十一対十だ、大きく影響するに決まっている。しかも、Jリーグでも通用しそうなDF選手を、レッドカードによ

る一発退場と負傷退場とにより、一気に一人も失つてしまつたのだ。

エーズ和歌山は水を得た魚のように、完全に息を吹き返した。

今度はハズミンが相手の怒涛の攻撃に耐える番だつた。我慢しながらも、なんとかチャンスをうかがうしかない。

一点でも取られたら終わりだ。

そして、一点も取れなくても終わりなのだ。

○○のまま刻々と時間が過ぎていく。

ついに、後半ロスタイルに入つた。

ロスタイルは三分。

鉄二、田中、轟、とボールが渡る。さらに轟は田中とのワンツーで、するりと抜け出した。オフサイドはない！ 独走する轟。相手GKと一対一。しかし、相手ゴールとの角度が急なため、切り返し、そしてペナルティエリアに入り込んだ。その瞬間、後からおいすがる相手に背中を突き飛ばされ、倒された。転がつた。

主審の笛が鳴つた。

轟はとくに足を傷めたふうでもなく、すぐ立ち上がつた。
主審が駆け寄ってきた。

馬鹿、演技しろ、痛がれ！ ハズミンの他の選手、サポーターのほとんどがそんな表情をしていた。

この主審だし、またシユミレーションの判定か。

ハズミンの選手もサポーターも、みんな落胆の表情だった。

案の定、イエローカードが……

しかしカードは、エーズ和歌山の選手に向けられた。

ハズミンのPKだ……

ハズミンのサポーターはどうと沸いた。

耐えに耐え、ついにチャンスが巡ってきたのだ。

今期、初めて得たPKだ。

もう後半ロスタイル。これを決めれば、勝ちはほぼ決まったよう

なものだ。

キッカーはキャプテンである田中英一。ボールをセットする。

得点は、PKでもなんでもいい。これを決められれば、呪縛から解放される。きっとチームは変わる。たとえ今日、鎌田製鉄FCが勝ち、ハズミSCの入れ替え戦が決まろうと、そんなことは関係ない。きっとハズミSCは勝つてJFLに残留してくれる。

しんと静まり返る中、主審の短い笛の音が響いた。

田中は胸の前で十字を切った。

田中はボールにゆっくり歩み寄った。

蹴った。

右上隅を狙う勢いのあるショート、GKが反応して横つ飛びをするが間に合わない。

しかしボールは枠の外側をかすめて、ゴールラインを割つて飛んでいつてしまつた。

PKを外した……

一斉に落胆の声をあげるサポーター達。

選手もがっくり肩を落とし自陣に戻つていく。

エアルーズ和歌山GKのゴールキックを渡辺輝彦と羅田圭一が空中で奪い合つた。こぼれたボールにヨントスが駆け寄る。エアルーズ和歌山が迫つて来る。ヨントスの蹴つたボールは、エアルーズ和歌山の選手の足に当たりタツチラインから飛び出した。ハズミSCボールだ。与那嶺怜一が、力ない足取りでボールに向かつた。

死刑宣告を受けた囚人が刻々と死刑の瞬間を待つような、そんなどんよりとした雰囲気がハズミSCの選手にもサポーターの間にも流れっていた。

いつの間にか、サポーターも応援をやめて静まり返つてしまつている。

「まだ時間ある！ 走れえ！」

風子は立ち上がり、スタジアム全体に轟くような大声で叫んだ。すっかり静まり返つて、死刑宣告を待つばかりであつたサポーター達、そして選手までもが、きょとんとした顔で風子のほうを見ていた。

「怜一！ こっちだ」

鉄一の叫び声。

与那嶺怜一は鉄一にボールを投げた。鉄一は胸でトラップ、素早く反転し、ドリブルで駆け上がる。あまりの勢いに、エアーズ和歌山は慌てて三人がかりでマークにつく。鉄一はあっさりとボールを離した。田中英一が駆け上がりかけていたのを察し、パスをしたのだ。

主審は時計を見ている。タイムアップ寸前だ。

田中英一は水田恭助とのワンツーで突破をはかった。しかし、相手DFにスライディングクリアされる。クリアボールは与那嶺怜一に当たりコーナーのほうへ転がつて行ってしまう。「ゴールラインを割つてしまつたら相手のゴールキックに変わつてしまつ。おそらくそれを蹴つた瞬間に試合終了だ。しかしさまにボールがゴールラインを割るうとしたその瞬間、なんと鉄一が追いついた。ボールを止めずに、ダイレクトにクロスを上げる。いや、クロスとはいえないような、精度の低いキックだ。ゴールの方向には向かっていても、誰も味方がいなければ意味がない。しかも、ボールは低く速く、誰にも反応が出来なかつた。

いや、反応している選手が一人いた、田中英一だ。和歌山DFのマークをするりとかいくぐり、飛び出していた。まるで鉄一のこの弾道のクロスを予想していたかのようだ。

慌ててエアーズ和歌山のGKが飛び出そうとする。地面上に落ちようとしているボールを目掛け、田中英一はまるで競泳選手のスタートのように頭から突つ込んだ。

選手達の動きが止まつた。

観客席も、誰も口を開くものがなく、収容人数一千五百人のスタジアムは誰もいないかのようにがらんと静かであつた。いま起きたことに、みな目を疑つていた。

その静寂を風子が打ち破つた。風子は足の骨折の痛みも忘れて、立ち上がつた。叫んでいた。両手を高くあげ、叫んでいた。それに

呼応するかのように、一瞬にして歓声が爆発、スタジアムは強烈な熱気の渦に包まれた。

主審が高く手をあげ、試合終了の笛を吹いた。しかし誰の耳にも届いてはいなかった。

空は秋晴れ。

雲一つない澄み渡った青空だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1386f/>

じょいふる

2010年10月8日15時50分発行